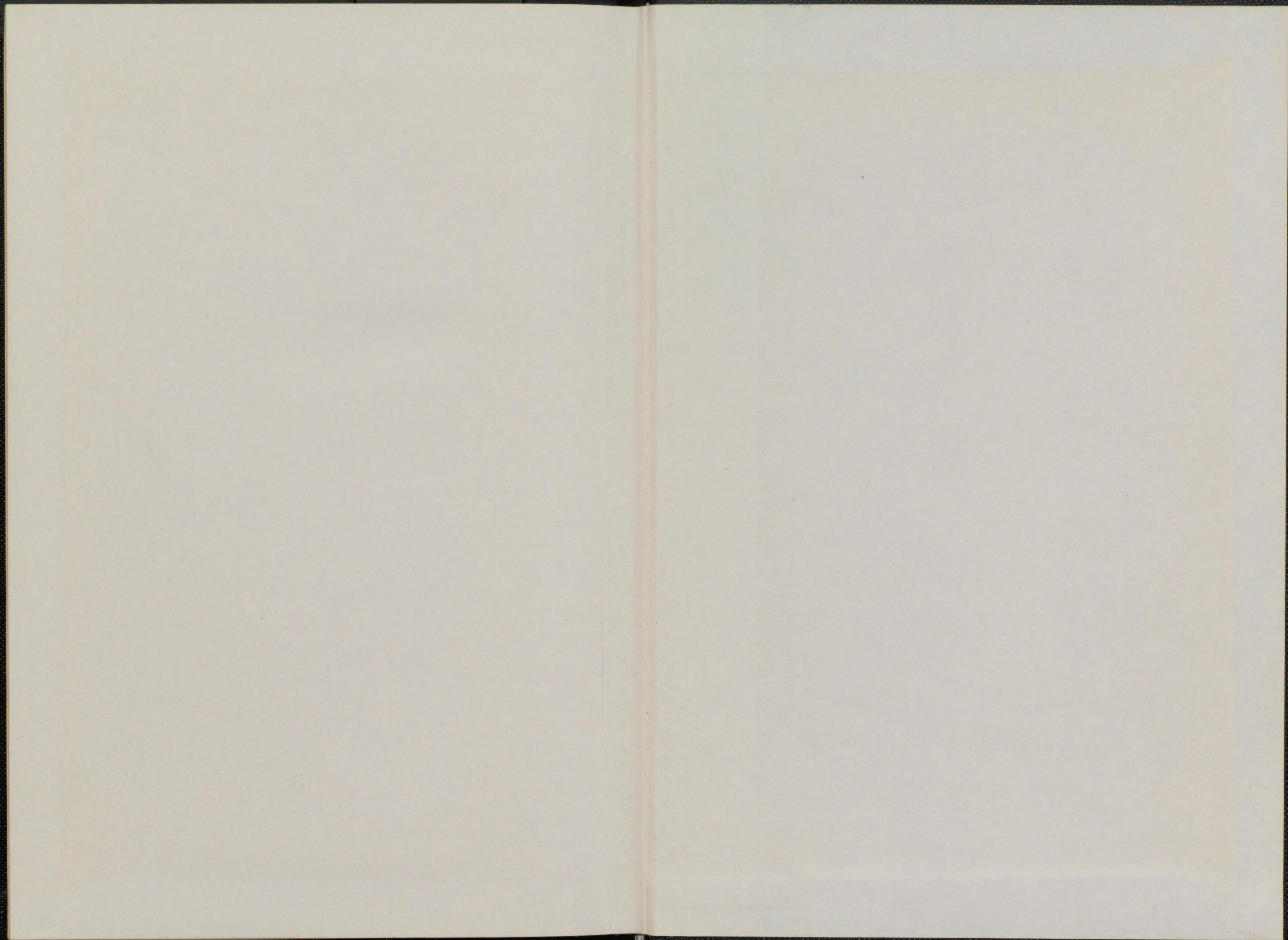
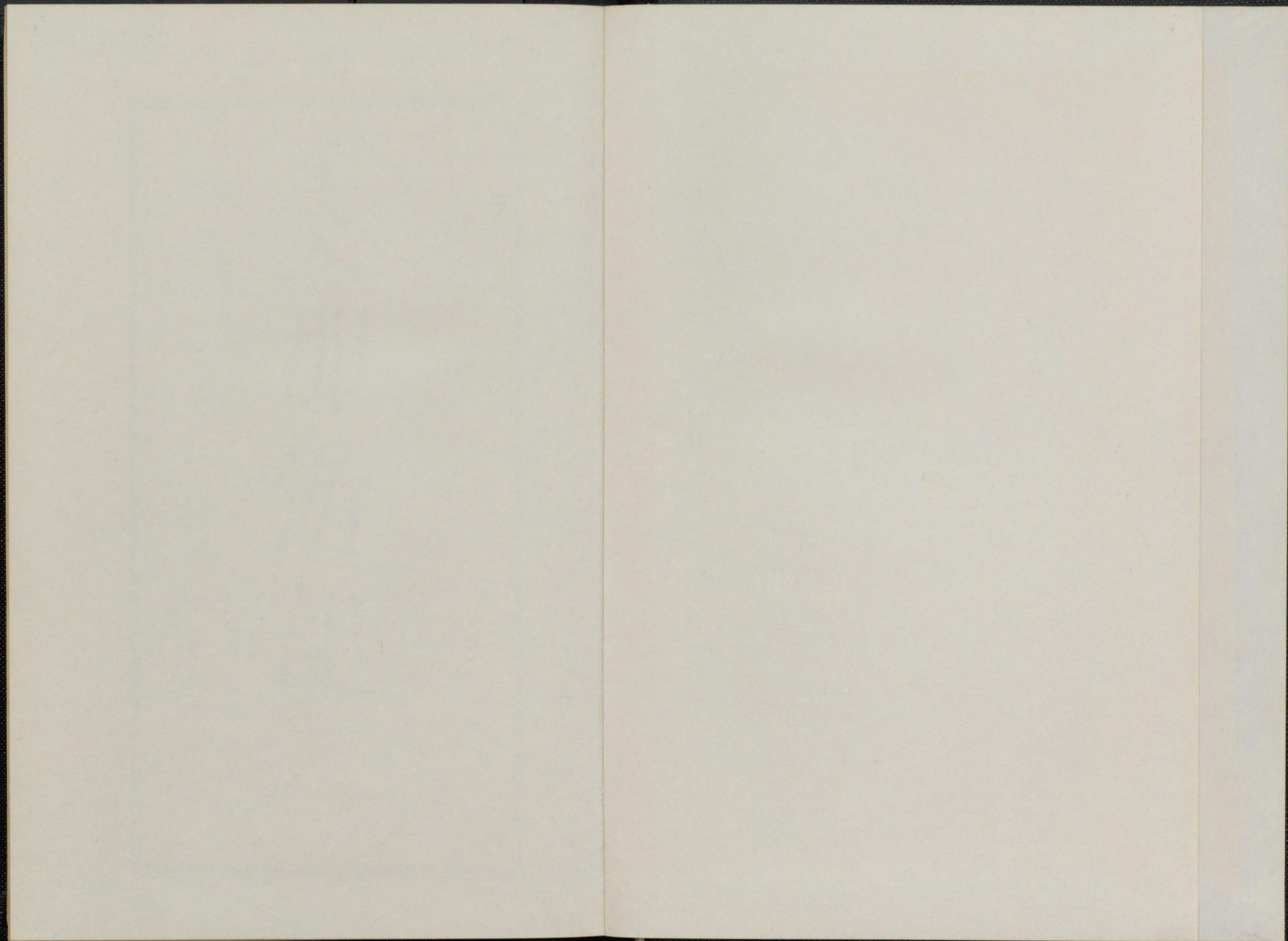


578
62

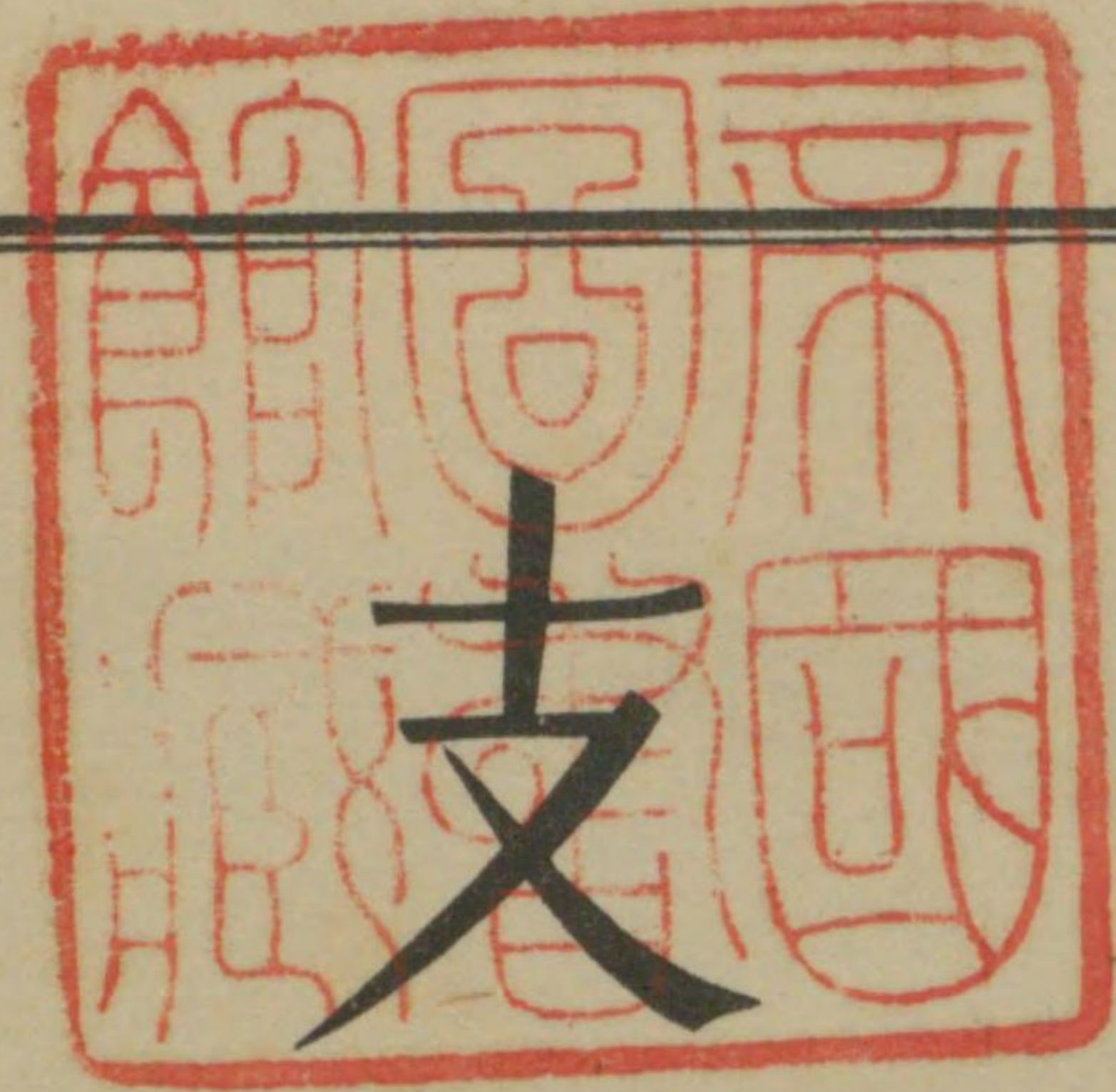
578-62
1200501520544







48578



支

那

游

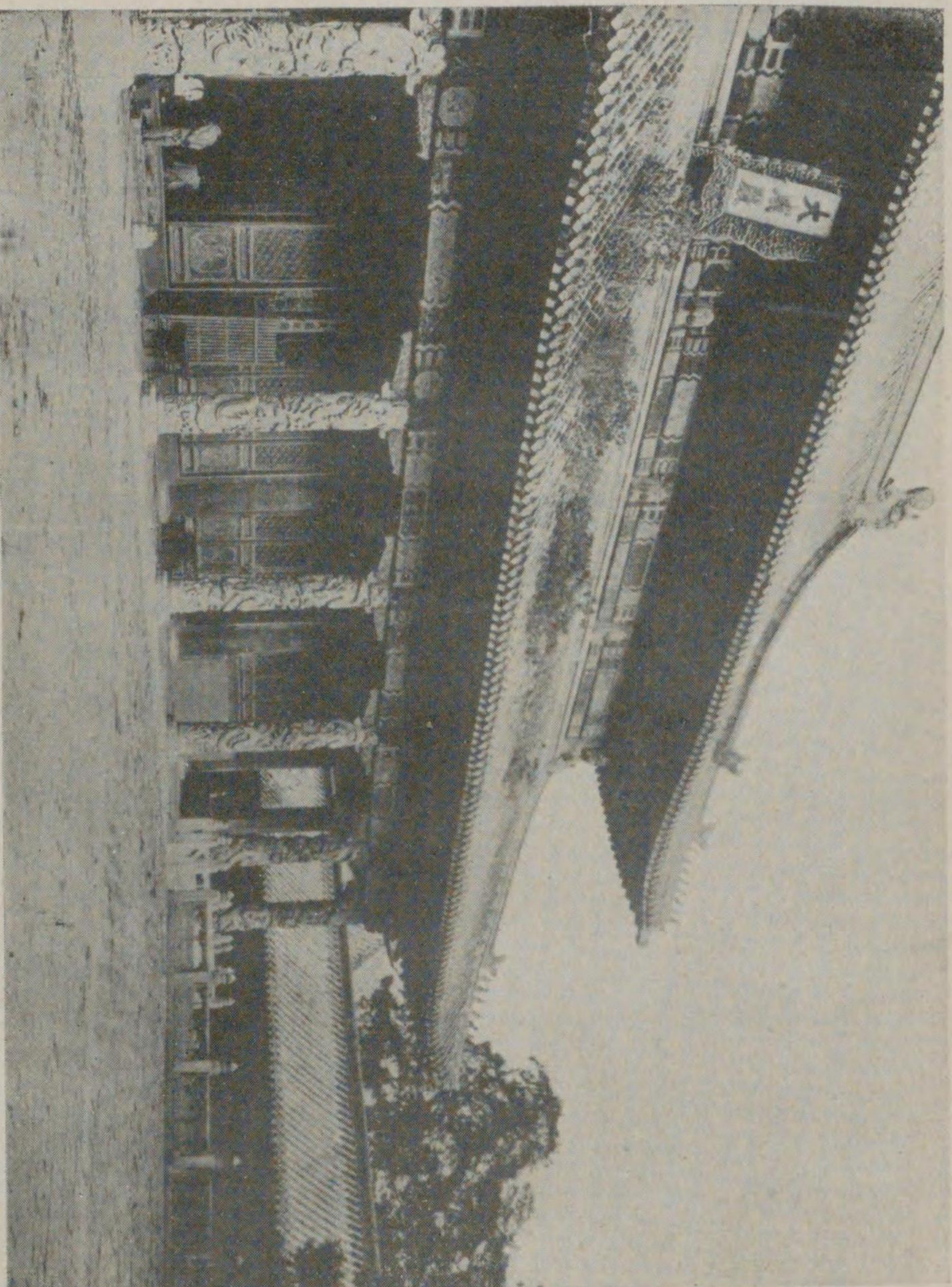
記



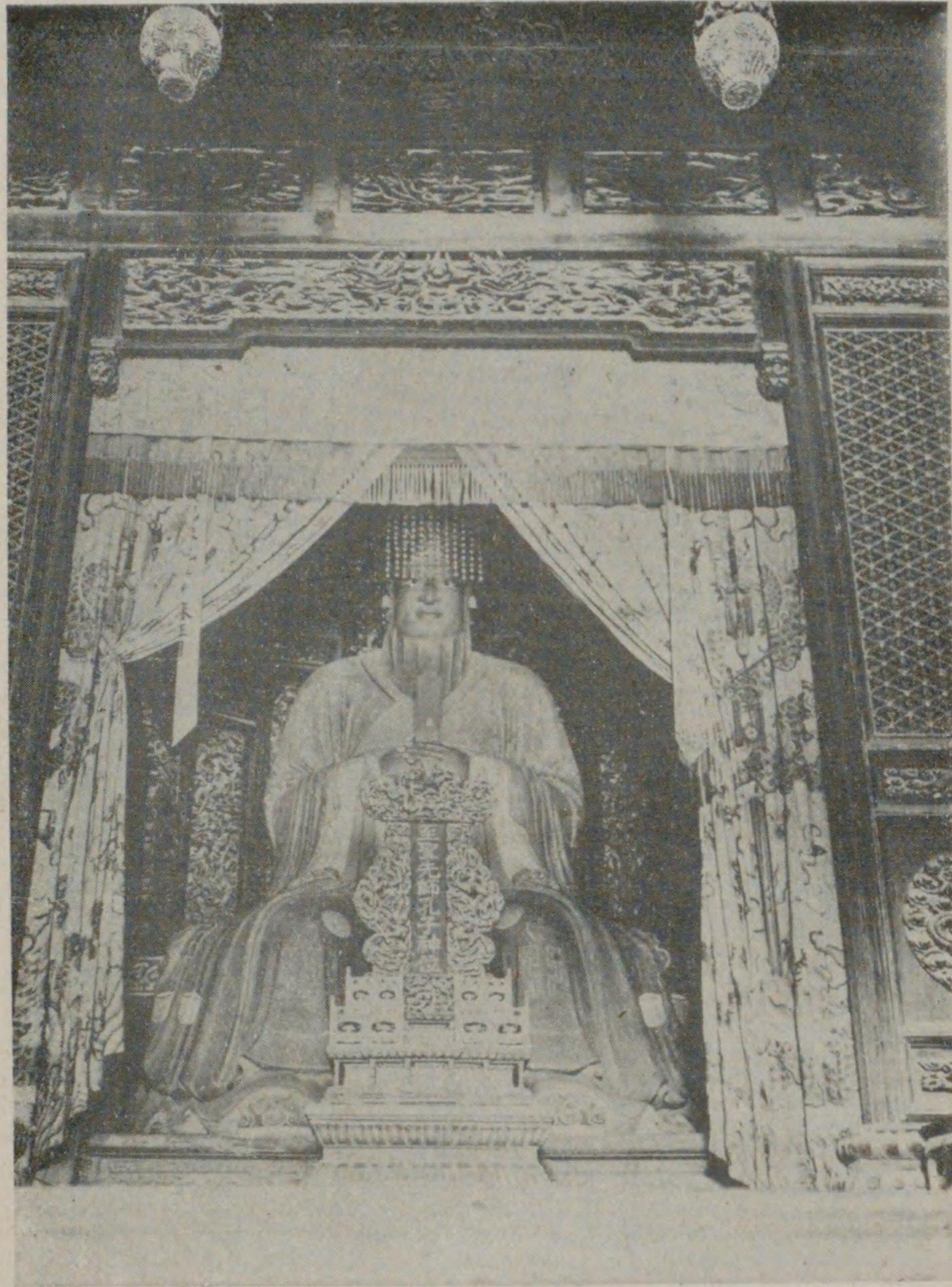


の雅老四一ヤオラーシ草靈の來將省川四 影近の者著の裝那支
趣情るれま納に室那支にぼそを植鉢

支那



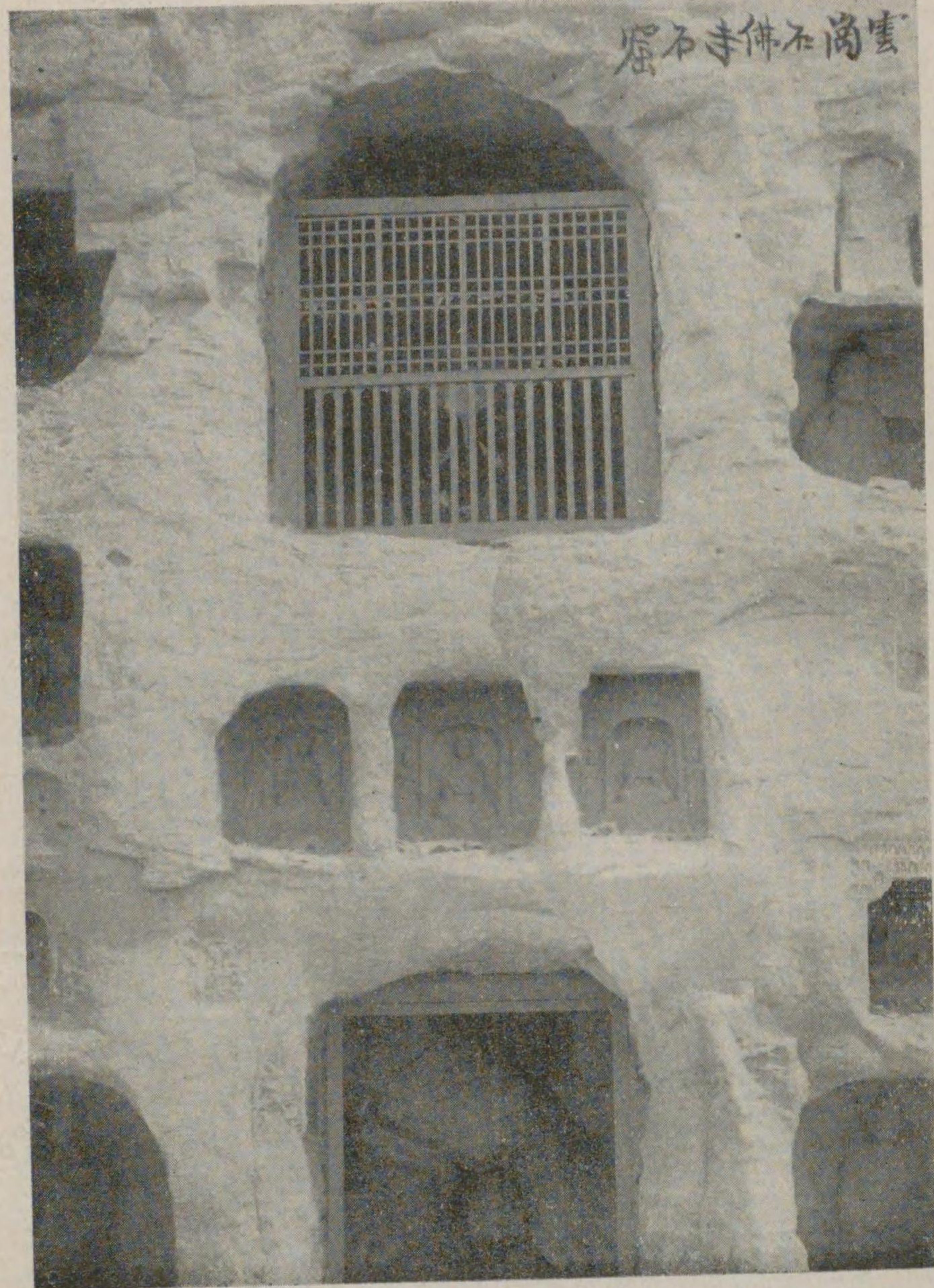
山東京曲卓孔子廟內に見る大の大基と石柱、雄渾、輪奐の美を極む處の式那なとり見しる



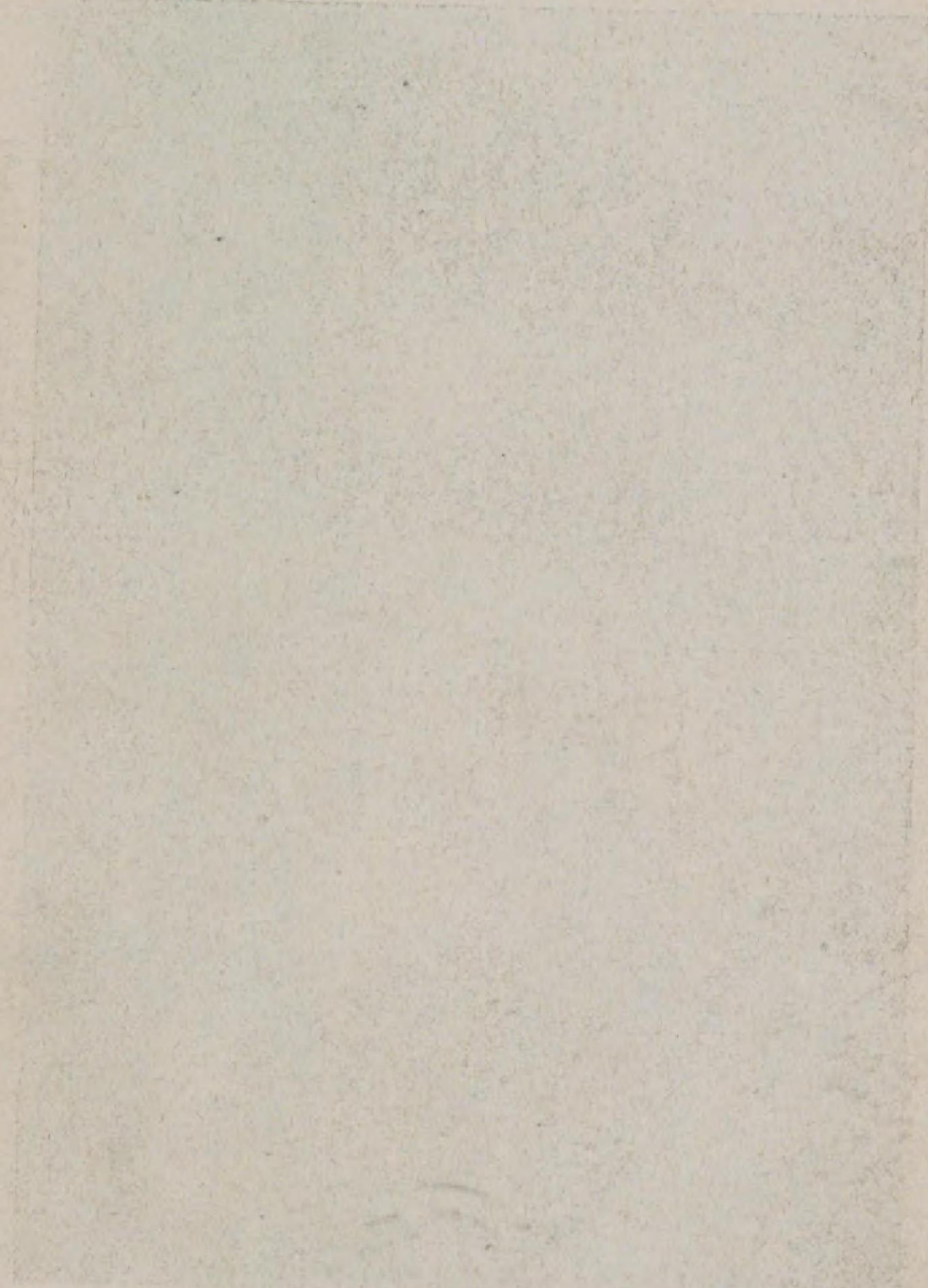
支那隨一の魯の故地曲阜文廟大成殿内に安置せられたる孔子の
像至聖先師孔子神位との文字あり



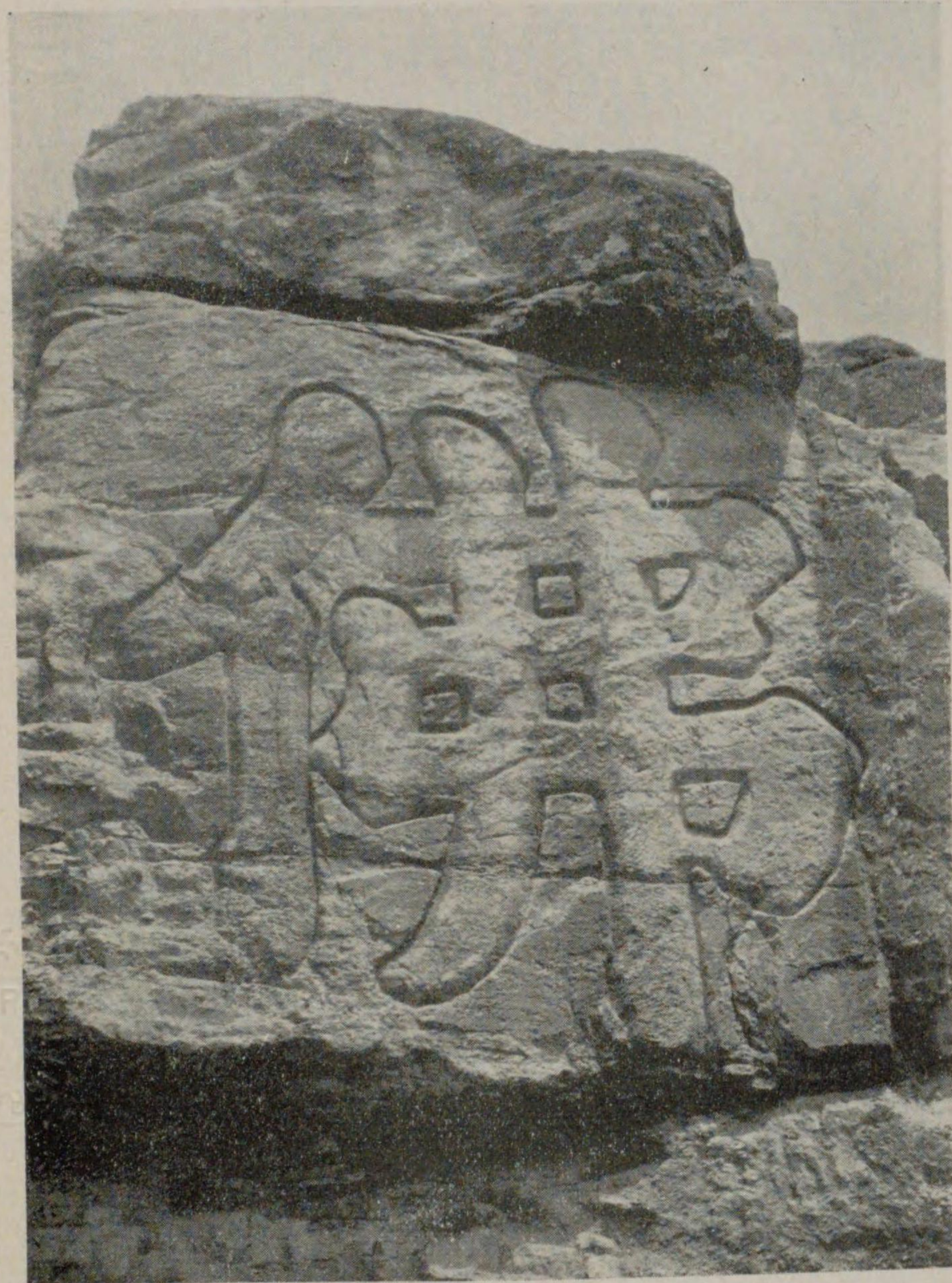
支那六朝佛教藝術の最高潮を呈する山西大同雲崗の
最大神石佛の像にして七尺二寸の丈ありその精巧雄健の趣
は朝鮮慶州武烈王龜趺のそれと共に古今東西に刻石に冠たり



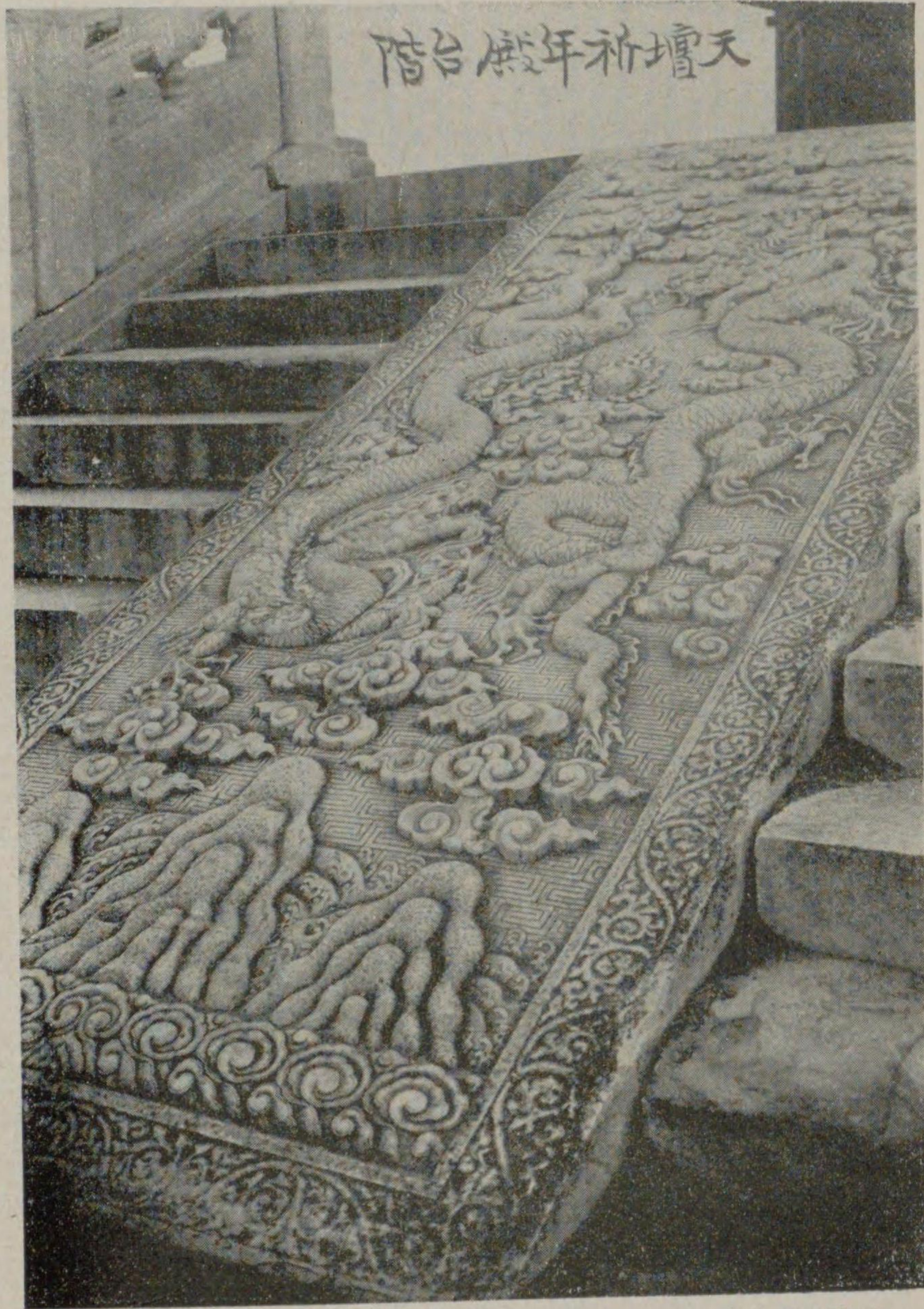
の代時魏北窟高の寺佛石崗雲同大省西山るせ蔵を佛石の古千
り在に郊北の里支十三外城同大り係に作



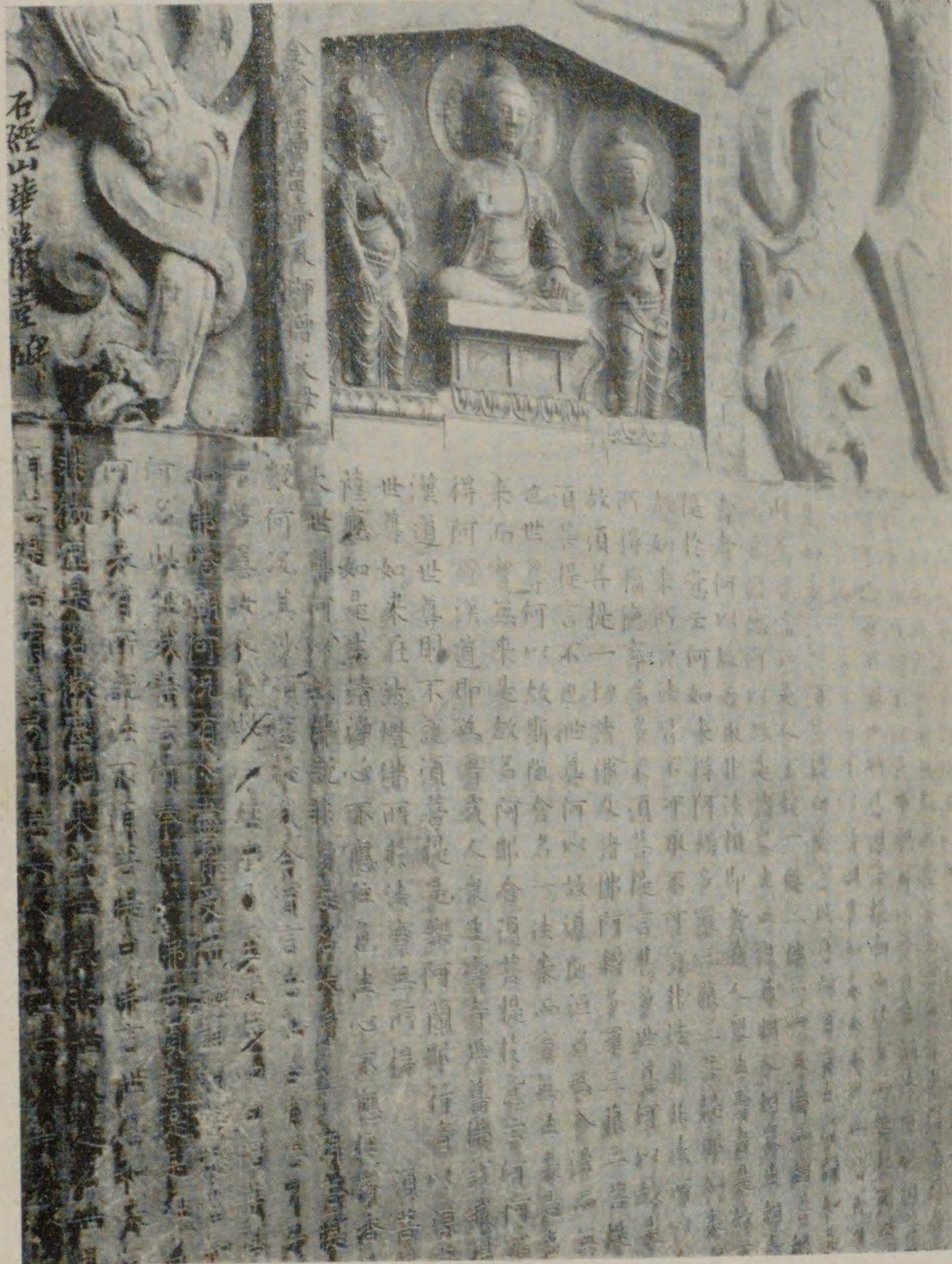
Faint, illegible text or markings at the bottom of the right page, possibly bleed-through from the reverse side or a ghosting of the caption.



北塞 雲崗石佛大上途同外に指顧せらるるの一石刻大字
夏季崖下流水を見るところあり



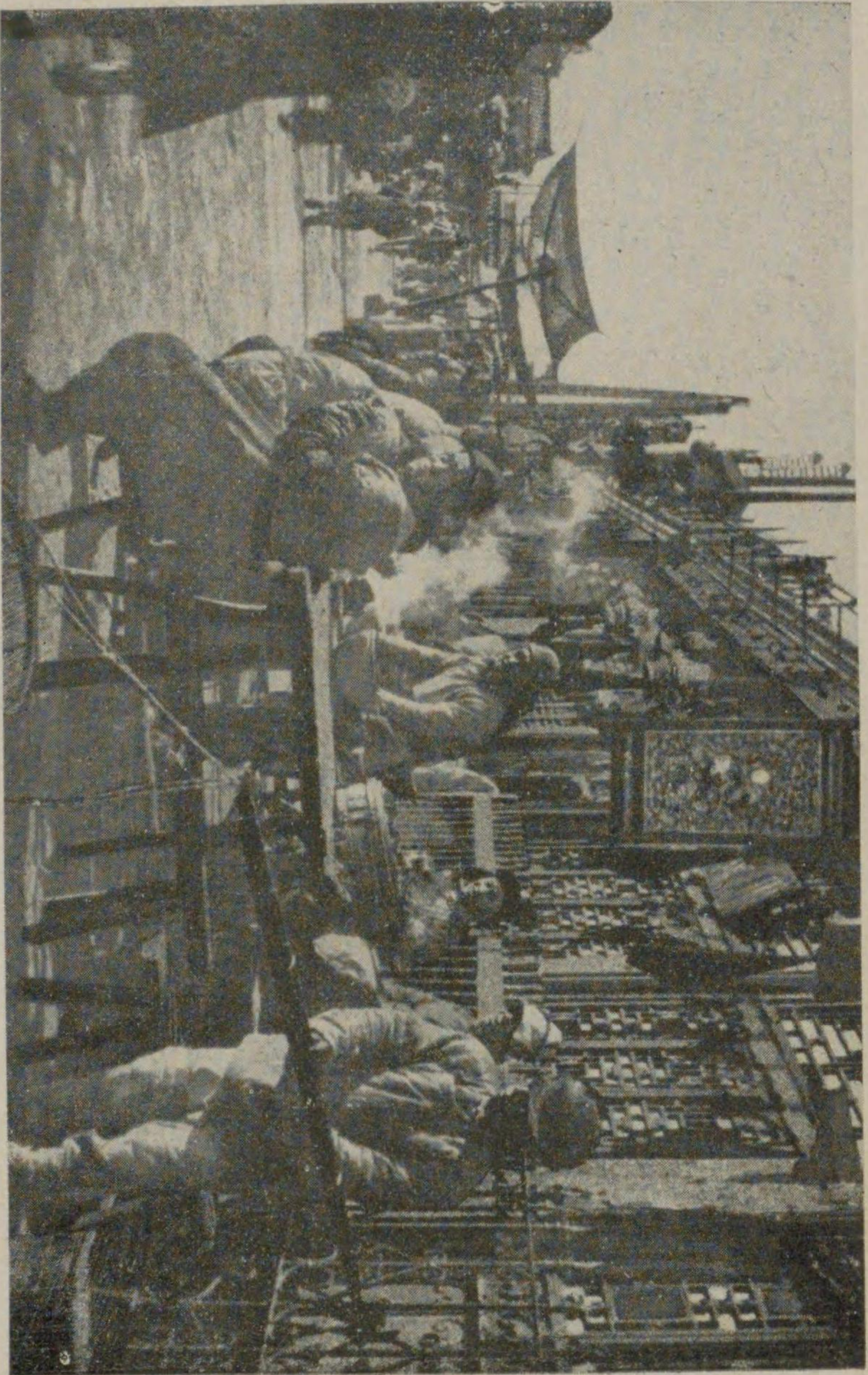
北天壇祈年殿正面に見る一枚の彫刻雙龍爭珠に瑞雲、蓬萊
の山を刻肉薄にて現はせり



此はに那支北 碑古の山經石るふ傳に古千しは現に刻石を經嚴華
 すとりな式様の來以碑漢は龍双る見に首魘の碑 多く刻石の種



支那南北各地に見られる観音堂の内、諸佛立像、俗間の信仰を集める絶人、木彫のもの
少那南西北各地に見られる観音堂の内、諸佛立像、俗間の信仰を集める絶人、木彫のもの
少



り振ひ商の糕年、頭饅の店露る見に傍路の面方街大櫃牌四東内城京北

支那游記の序文

支那は歡樂の郷であり、風流の樂土であり、時とスペースを超越した地球上無二の別天地である。さうかと思ふと又反對に支那は動亂の國であり、破壊の國であり、糜亂に糜亂を重ねたひどい國であるとも云へる。けれども又その中庸を採つて、國としては見込みの立たぬ國でも社會としてはあれで要領がよく自覺を看板に自治本位に進み得べく共産を利用しては新しい支那を創造せんとしてゐる國だとも云へる。

然かしもつと根本的に云ふと支那は列國人の前で真相がかく／＼と判つきり云へる國ではない。上記三觀察もそれ／＼一面の見方に過ぎず、支那の現在過去を博く見て來るとどの觀察も當たつてゐないと開き直ることが出来るのである。警察眼や法律軍事の立場からのみ觀察する者はその秩序維持の點のみに力が這入るからし

て、支那の現状を以て最悪の那落の底なりと斷せられる。それが支那在留邦人から云はせると更に一層之を深刻に感じてゐる爲め、曰く暴戾だ、曰く不當課税だ、曰く生命財産の脅威だと。國威の失墜と大權の發動と云ふ止むに止まれぬ最高の或る者をまで、ふた言目には絶叫しそして幾度か、異境の空に切齒握腕、悲憤慷慨を繰返す。けれども陳情委員の十人や百人大擧して乗込まうが日本の朝野は糠に釘で一般張り合ひ抜けのすること夥しい。當局ではその深刻に感ずべき筋合ひの事件のみ近來餘りに頻發するのと持前の官僚氣分であるのが悪い氣持ちのしなないので存外落付き拂ひ、やゝもするとすつかり免疫になつてしまつてゐる向きも少なくない。今急に給料取りに面と向かつて之を深刻に感じてくれよなどと攻め寄せて見たつて始まらぬと注意したい位のものである。又一般社會の輿論にしたつて雲煙萬里の異境で魔の手に弄ばれその刻々悲運に傾きつゝある在支同胞の慘狀苦衷に對し一々涙ぐましく之に同情して居たりする丈の裕りのある者も少ないらしい。全くそれどころ

ではないと云つた形である。支那内地と日本のお膝もとの間を幾度か悠々去來せる自分どもは此の兩者の間の恐ろしい隔りのあることを目のあたり見てゐるのであるが、かの南京漢口兩事件の直後自分は日本に歸つて見た。折柄、臺灣、鈴木、十五の大浪に打寄せられた騒動に天下は當惑しきつてゐて南京漢口の事件の如き耳を籍す者が見當たらなかつたのである。今やその時よりも國策上尙一層重大味を帯びてゐる滿洲の特殊地域に於いてまたしても排日問題の深刻な鐵槌が下り帝國の將來に未曾有の物凄い陰影を投じつゝあるも、内政、普選を前に控へたる我が日本朝野の士は殆んど奉天の慘狀など馬耳東風とばかり受流してゐるのである。所詮日本民族と云ふ良民族は島國の蝸牛角上でのみ争鬪することを能事としてゐて、大陸、對外の大局となるとあたまを振り向くる丈のゆとりも誠意もどうして持合はされないものであらうか解しがたいのである。

苦しくなつた時始めて南京漢口を見に行つたり陳情員の叫びに驚いた時始めて奉

天に出かると云つた泥縄式のやり方のみをしてゐては將來二十五年経たぬうちに一億萬の人口を擁すと云ふ日本帝國としては洵にたよりないこと夥しいのである。日本側から云へば固より暴は即ち暴なりと云へども公平に今第三者の立場から見れば支那滿洲自身の採つて來たあのやり方の方がどれ位將來の爲めにその自主的であり、自衛的行動であるか判らぬ。苦情をあとから云ひ立てなくてはならぬ如き國はそれ丈引け目である。失敗の上塗りは矢張り一種の失敗である。内憂外患、刻一刻と迫り來つゝあるに支那に對して日本朝野の輿論の力常に薄弱にして且つその點に誠意の足りないことは遺憾に思ふ所である。

それと云ふのも畢竟するに一般が支那を實地に見ず、あたまから之を見縊り、その斷片的報導ぐらゐを参考に意見を立て、大きく納まることを能事としてゐるに因るのである。支那は歌米とは違ひ坐ら新聞圖書をだに手にしてゐれば真相が掴めると思ふやうな當たり前の國ではない。いくら實地に行つて奥深くあるいて見ても遂

に真相の掴める處まで到達し得られないかも知れぬと云ふとてつもない國柄である。しかし實地に歩かない人には尙更ら本當の支那風物のデリケートな處は判らない。支那を實地に見ないで机上でのみ唯積上げてゐる。支那研究、支那調査は今後急迫を告げて來る我が帝國の實生活には假空のものとなり次第に價值を減じて來るは當然である。

從來の儒教倫理でも支那をよく見てから見た論語の見かたは著しく變はつて來る。又支那民族の善行所謂旌表を判斷する上にも實に眉唾ものゝ多きを知るに至るのである。同時に諸子百家の説にしてもその如何に支那人の實生活と相表裏するものゝ多きかゞ手に取る如く判るのである。ひとり儒教と云はず歴史と云はず又文學と云はず支那人の實生活の中に深刻に織込まれてゐる複雑味と云ふものは筆紙に盡せるわけのものでない。そこには無限の源流心理が濃やかに錯綜してゐるのである。而かもその間には又別に幽玄崇高なる韻致を伴ひ或は又百花爛熳、濃婉なる佳

趣を漲らせてゐる者がある。書齋で文字上から皇清經解だの、二十四史だの、文選だの、奇觚室吉金文述だのとひと通り群書を集め、涉獵して見ても略その一斑は察せられるであらう。けれども併し文學を通して見たる支那は所詮書物上の間接支那たるに過ぎない。耳に訴ふべき押韻好調の詩賦の如きも之を字形の上からするのはその價值の大半が没却せられることになる。凡そその個人行動や、また社會事實の推移して行く間にもどれ位大事な微妙な心的徑路が隠れた所に活いてゐることか判らない。かう云つた方面が率直に文字上や文章の上に悉くそのまゝ表現せられて來るなどとは考へられないのである。

若しそれ支那の山川風物の規模の大なるとその情趣の幽玄なるとに至つてはこれは到底その現場に行つて實地に踏込み遊歴をして見なくてはその味は判らず又その眞を掴むことも出來ぬのである。四川三峽の絶景の如き又廬山五老峰の如き長城八達嶺の如き何れもその實地の踏破をなしたへてこそ始めてそれに因める文學歴史の

香氣が理解され又それを自分の血管中に取り入れることも出來るのである。又從來の支那文學や東洋歴史などでは兎角地理のあたまで外視し函谷關の所在がどこの邊りであらうが臨安の都（今の杭州）がどこにあらうが殆んどお構ひなしであつたのである。今後の學生はかゝる舊式な教授法からは目醒めて、やるならやる積りで一それを突止めその天然の地理山川の形勢から現實の智識として大體のところを確かめ得た上で然る後取入れると云ふ心掛けになつて欲しいものである。又今日の帝展、院展の大作山水に見る幾多の支那畫題であるがこれ又實地にその地方の山川風物を自分で十分に確かめないで筆をおろすことに急なる爲め、上海の船を四川三峽の壁下に泛べて見たり又洞庭に現はして見たり或は錢塘に取合せられたりと云ふ風である。これではさながらちよん鬚に洋靴を穿かせた如き不調和を呈してゐるわけになるのである。がそれでも世間は怪しんでゐないのである。

支那はこゝ數年の間に南北各地共各開港場を中心に要路要路の界限に著しい社會

的變調を呈し來たり曰く、打倒軍閥曰く、三民主義曰く、共產曰く、打倒帝國主義曰く、打倒大滿鐵主義などと色々のポスターで以つて民家の壁は蔽はれんばかりの氣勢を示し來たり、支那の天地は混亂又混亂、一大修羅場と化したるもの、如く叫ばれてゐる。それも確かに最近の事實には違ひないのである。が本書は支那五千年の文化に憧憬し南北支那の山村水廓に民俗の純なるものを求めんと廣くあさり、時には四川に又南洋の華僑にとひたすら支那人の實生活の情趣を訪ねて廻つたものをそのまゝ成るに従つて稿をまとめたものである。固よりこの八百餘頁の書中一頁と雖も自分が實際その畫中の人になつてゐない處はなく又自分の體驗に無關係のものもなく、悉くその現場に在つての見聞實寫並びにその時の感想を如實に叙したもののみである。否時には趣味多き支那のことゝて自分ひとりの漫游振りに一步を進めて雅友を伴つて題材を豊かにせる所もあり巡警や兵隊を連れてあるいたこともあり、又家内同伴を好機に友人の細君連を頼まれて同導したこともあり、又今は跡見

一年に在學せる子供文子（十一のとき）の癡付きで出かけたことなどもある。しかし一度としてその八釜しい使命や事務を帯びて行つたことの絶えてない丈に日程に窮屈な思ひをなしたことがない。そして支那へ行くと云ふよりも支那へ歸ると云つた氣分で南北支那を瓢然游歴してゐるのである。今日の戰亂だの、共產だの、土豪劣紳だのと云つた香ばしくない現象からはなる可く超越して悠々自適の游歴を恣にしてゐる次第である。されば今文字通りの支那游記なるものが偶然こゝに成り題して「支那游記」となしたのであるが全くの游記である。書肆春陽堂には裝幀に不相變春陽堂式の凝つた表紙を拵へ支那貴族用禮裝緞綢の圖案に基づき高雅華麗な瑞鳥芳花をこゝに美しく攷案せられた。本書はかう云つた呑ん氣な内容と高雅なるこの表紙と相持ちで多少とも支那社會の動かざる方面の情緒の或る物を語り得たことゝ固く信じて疑はないのである。しかし江湖の士君子にして若し本書の内容に矛盾、不條理、超國家觀念、時代錯誤等幾多の不審の點を見出さるゝならば即ちそこは著

者の筆の罪にあらずして支那老大國の老大國たる所以、或は又新支那の新支那たる所以だとして看過せられたい。唯著者はどこ迄も著者の目に映じたるまゝをベストを盡し友邦中華民國人士に同情して筆を運び同時に又東方百年の爲めに聊かたりとも我が國朝野の有識者間に支那山川風物の實相を傳へらるべき者ならば傳へて見たいとの微衷から此の小著を公にしたまでのものである。

要するに支那と云ふ所は全く十人十色に如何やうにとも見える所であるから讀者は誰れ彼れの別なく機を見てそれ〴〵北支中支南支にと遊歴を試みられ、そしてそれ〴〵天下に各種各様の支那遊記を出し芥川龍之介君の支那遊記はジャーナリズムとしてか〴〵に、拙者のはか〴〵に、曰く誰れ曰く誰れと續々その社會に家庭に學校に之が提供せらるゝの盛時を見、且つさう云つた機運をこゝに蔚蒸して行かんことを希望して止まないものである。

昭和二年丁卯嘉平月 北京行の途に上らんとするの時

後藤朝太郎

しるす

目次

豊かな田園情趣……………一

一、竹柏門庭に瑞氣を漾はしむ……………三

二、酔うて田舎の酒に歌ふ……………五

江南に漲る田舎の風物……………九

一、江南漫遊の前に……………一一

二、浙江田舎の情趣……………一五

三、錢塘の煙波江上老農の道連れ……………一八

四、水郷運河に漲る田舎純朴の情趣……………二三

五、浙東第一旅館の一夜……………二五

六、浙江は紹興城外の和平の景趣……………二九

七、江上紹興の畫舫青雀舫の研究……………三三

八、江南の田舎宿に見る壁上文字の興味……………三六

九、浙江省錦江江畔茶亭の情緒……………四一

十、蘭亭に遊びて曲水の今昔を比較す……………四五

十一、雪中月牙池雅宴の好印象……………五〇

十二、江南の田舎に見る實生活の裏面觀……………五三

十三、江山萬里を脚下に王陽明祠堂の龍山に登る……………五八

十四、門前市をなす土豪名家の家廟宗祠……………六一

十五、石人石馬を背景に竹山橋の景趣……………六五

十六、清明の佳節慈谿山門に禪僧を訪ふ……………六九

十七、清明節に聽く江南の情緒濃やかなる音曲……………七三

十八、育王寺の禪門に漲る幽玄の情緒……………七六

十九、福建は閩江を溯りて天下の珍味蚌ボンを頌す……………八二

上海公園の綠蔭……………八七

上海一日旅の印象……………九三

南京鎮江の女旅……………九九

- 一、吳淞狼山鎮江の江上……………一〇一
- 二、南京城外の佳話を作りて……………一〇四

杭州西湖天竺めぐり……………一一一

- 一、西湖をあとに龍井三天竺へ……………一一三
- 二、龍井寺の幽境茶禪の情趣……………一一四
- 三、棋盤山上錢塘江の展望……………一二二

揚州物語……………一三三

- 一、久しく揚州を想ふ……………一三五
- 二、長江夜泊……………一三六

三、揚州公廨……………一三九

四、揚州の支那料理……………一四二

五、揚州平山堂……………一四五

六、揚州より鎮江への船中胡弓の賑ひ……………一四七

七、鎮江金山寺の山賊芝居……………一五〇

南北支那の山水……………一五七

一、大陸的の山水……………一五九

二、湖山色を生ず……………一六四

三、畫家を迎ふる片田舎の情趣……………一六九

四、水の光景……………一七六

五、山の光景……………一八四

六、朔比の野……………一九一

七、廬山の世界的地位……………一九五

驚異に値する大陸の大自然美……………二〇七

揚子江の下流……………二二一

一、長江の觀察……………二二三

二、崇明島附近の長江……………二二六

三、鎮江附近の長江……………二二九

四、南京附近の長江……………二三三

五、蕪湖附近の長江……………二三六

六、雨中に眺むる夏の長江……………二三〇

七、江上に眺むる黃州赤壁の東坡寺……………二三二

揚州より武昌の空にかけて仙鶴を偲ぶ情趣……………二三五

揚子江の中流……………二四三

一、四川再遊を思立ち長江の濁流を遡る……………二四五

二、思出深き船内挿話……………二四八

支那の山郷峽中の三勝……………二五三

一、峽中入り……………二五五

二、三峽、錢塘閩江……………二五七

揚子江の上流峽口を前に……………二五九

一、宣都江岸の風物……………二六一

二、支那大自然の鑑賞……………二六三

四川三峽の大自然美……………二六七

一、東洋一の民族公園たるべき三峽……………二六九

戦亂をよそに巴蜀再遊……………二七七

一、入蜀の壯圖を支那行きの旅程……………二七九

二、航路難に加ふるに軍閥の危害頻々……………二八二

三、軍費樂捐の旗翻る萬縣江上の巡查船……………二八八

四、峽中の江上に見る支那社會の縮圖……………二九一

五、民船影を潜めて日章旗翻る雲陽丸の雄姿……………二九六

六、風物を超越して峽中の涼味を理解せよ……………三〇〇

七、命拾ひの感ありし江上夜泊の巫山……………三〇四

八、大水碧空に接す兩湖の氾濫……………三〇九

九、三峽の山水と廬山洞庭との比較……………三一三

十、山西を觀た印象で四川の風物を觀る……………三二七

十一、蘇州の印象では四川の風物は測られない……………三三〇

十二、四川省入り學術探險隊の壯舉を計畫せよ……………三三四

十三、巴蜀の天地を出で、支那大陸の理解へ……………三三七

十四、峽中繪卷の畫趣……………三三一

十五、上流の濁流に峻らるゝ峽中激灘の禮讚……………三三四

十六、峽中夜泊の旅愁……………三三七

十七、四川峽中の水路王……………三四〇

 一、領江李子順翁の風懷……………三四〇

 二、峽廟河の情趣……………三四三

 三、純朴そのまゝの領江李翁の風情……………三四五

十八、峽中の傳説を生む大禹の錯開峽……………三四八

十九、揚子江の舟行一千三百餘哩……………三五一

二十、地圖の調製に餘念なき船内生活……………三五三

二十一、鶴の巢籠りを見る巴蜀峽中の優越……………三五六

二十二、峽中の輪船に現はれた國際情味の數々……………三五九

二十三、阿片賣聲峽中に響く巴蜀の祕境……………三六二

二十四、科學の文明を超越せる四川祕境の龜鹿草藥……………三六四

支那の民間祕藥

一、支那の藥劑……………三七一

二、毒藥と藥酒……………三七五

三、支那人の衛生思想……………三七九

四、支那人の迷信……………三八〇

南洋を郷土と化せる支那民族

一、支那より南洋へ……………三八七

二、草木と華僑に見る異境の情緒……………三九〇

三、支那人は氣分の上で南洋を呑んでかゝつてゐる……………三九三

四、支那一流の實業家は多く南洋馬來に在る……………三九六

五、南洋に於ける支那人進展の熱情……………四〇〇

六、成功の前には故郷なし……………四〇八

- 七、支那町建設の壯舉…………… 四二二
- 八、南洋珍果の嗜好…………… 四一六
- 九、南洋馬來に於ける歡樂生活…………… 四二二
- 十、飛ぶ鳥も落さんず華僑の豪奢振り…………… 四二五

支那趣味と南洋

- 一、支那風物の延長…………… 四三五
- 二、徹底せよ支那氣分に…………… 四三七
- 三、南洋に漲る華僑の風懷…………… 四四〇
- 四、華僑の成功を偲びて…………… 四四三

年一年と募る支那民族の優越性

- 一、その勃興は列國の鼻柱を挫く…………… 四四九
- 二、考へさせられつゝある列強の心事…………… 四五二

三、漸く覺醒せんとする支那民族の將來…………… 四五五

四、支那民族窮極の強み…………… 四五八

時局を劃すべき長江流域の風雲

- 一、英國の勢力維持難…………… 四六三
- 二、轉換期に在る長江沿岸の形勢…………… 四六五

愛の情緒を中心に臺灣の山水と民族

山東の青島經營は支那の試金石…………… 四七五

北京の電車に見る支那社會の縮圖…………… 四八一

騒がしき都城の支那街…………… 四八七

支那社會の和平氣分…………… 四九三

一、和平の社會への道程…………… 四九五

二、規則を超越した文學的情緒…………… 四九六

支那座に觀る世相…………… 四九九

一、日本の表玄關たるべき上海…………… 五〇一

二、民 國 劇 場…………… 五〇三

三、珍談異聞十六種…………… 五〇六

永久に亡びざる支那穴居生活の民…………… 五二一

支那の古寺に見ゆる社會相…………… 五二七

一、支那の古寺に於ける佛像…………… 五二九

二、支那に於ける遺物の移轉…………… 五三二

三、荒廢の原因と漢陽と歸元寺…………… 五三五

四、地方の古塔と廢墟の寺…………… 五三七

四川人の四川…………… 五三一

人心收攬の妙諦…………… 五三七

孫傳芳を訪ねて…………… 五四三

一、江山待つあるが如し…………… 五四五

二、窓外紫金山上の夏雲を眺めて…………… 五四七

三、孫總司令の風懷…………… 五五一

四、孫大人の文人的風格…………… 五五四

山西省太原に閻錫山督辦の風韻に接す…………… 五五九

肅親王への鶯鳥の思ひ出…………… 五六五

支那富豪の悲哀…………… 五七三

一、奥地の高樓にそゝらるゝ同情…………… 五七五

二、富豪の山寨生活…………… 五七七

支那名流の避難所たるべき天津上海の租界……………五八一

支那名流臨終の悲哀……………五八九

四川峽中に見る土匪の凋落……………五九七

支那人生活から見た社會の悲哀……………六〇三

一、市民生活に必要な城壁……………六〇六

二、支那城内に漂ふ不安の氣持……………六〇七

三、北京の住宅に見た秘密の穴倉……………六二一

四、自己の資産秘藏に就いての不安……………六二五

揚子江一帯氾濫期に於ける罹災民……………六二九

走馬燈も啻ならぬ民國內閣の交代壽命……………六三五

轉換期の岐路に立つ支那社會文化の新局面……………六三三

一、擡頭の機運を醗酵しつつある支那社會……………六三五

二、支那労働者の心得……………六三八

支那各地民衆の生活状態……………六四五

一、支那人の天下……………六四七

二、支那奥地の生活……………六四九

三、支那民衆の力……………六五四

四、田舎の停車場で汽車から降りて……………六五七

支那人の世渡り法……………六六一

一、支那人の辭令……………六六三

二、駈引の國民……………六六五

三、兩面の使ひ分(其の一)……………六六七

四、兩面の使ひ分(其の二)……………六七〇

五、兩面の使ひ分(其の三)……………六七三

六、兩面の使ひ分(其の四)……………六七六

支那人の社會生活……………六八一

一、社會生活の特色……………六八三

二、社會組織の特徴(其の一)……………六八六

三、社會組織の特徴(其の二)……………六九〇

支那の貨幣……………七〇三

一、不便なる貨幣制度……………七〇五

二、神經質的な支那貨幣の相場……………七〇九

支那人の苦力生活……………七二三

支那人の暗黒方面……………七二九

一、支那人の殘忍性(其の一)……………七三二

二、支那人の殘忍性(其の二)……………七三四

三、殘忍性の發達(其の三)……………七三六

四、馬賊泥坊の危害……………七三〇

五、巡查は社會の飾物……………七三四

六、風靡共鳴性……………七三七

支那内地の風情……………七四一

一、文明地域の旅行……………七四六

二、驢馬旅行(其の一)……………七四九

三、驢馬旅行(其の二)……………七五二

四、驢馬旅行(其の三)……………七五三

五、護衛附内地旅行の真相……………七五七

六、支那人の心に映じた日本人……………七六一

七、支那留學生の渡日……………七六四

支那の勞働問題……………七六七

一、宣傳の利器を巧みに利用せよ……………七六九

二、支那民衆の心理の理解……………七七二

支那勞働問題……………七七七

一、重大視すべき工人背後の外的力……………七七九

二、勃發事件未然の防止……………七八一

三、工人との意志の疏通……………七八三

四、工人心理の研究とその親しみ……………七八五

支那社會の眞相……………七八九

一、支那社會の内面的攷察……………七九一

二、支那は國家としては望みが薄い……………七九四

三、明るみに出た社會相の數々……………七九八

四、土匪や赤化に對する精神生活の根柢……………八〇一

五、矛盾の多き支那社會生活……………八〇三

六、功成り名遂げた後の願望……………八〇六

支那人の超法觀念……………八〇九

一、支那民衆の法律觀念……………八二一

二、法律よりも宣傳に力を……………八二五

國家をなさぬ支那から觀た日本の長所と短所……………八二九

一、日本思想の長所……………八三一

二、日本の自然と社會から受けた長所……………八三三

三、日本思想の短所……………八三六

四、短の短なるもの……………八三八

- 五、反省を要する日本の知識階級……………八三〇
- 六、自ら進んで物を談する勇氣に乏しきこと……………八三六
- 七、反省を要する支那方面の調査研究……………八三九

豊かな田園情趣

一、竹柏門庭に瑞氣を漾はしむ

竹柏門庭に瑞氣を漾はしめ、田園氣味日月長しとても云はんか。長江々岸の田園氣分と云ふものは臺灣の田舎、朝鮮の農村のそれよりも一層悠然たるものがある。一地方に戰雲のたなびいてゐる所があつても全體としての江岸は田園氣味どこ迄も長閑に、日本人の豫想は全然裏切られてゐるのである。

日本人はやゝもすると支那は戰亂の一方にのみ囚はれ、或は土匪の被害のことにのみ先入主が硬化して子つて、江岸一帶の最も特色とする田園氣分と云ふものを没却してゐる傾がある。その政争を事とし軍閥の事に熱中せる一種の職業的の人間は、田園そのものからは全然別箇のものであり、永久に無關係のものである。然るをとかく日本人は旅の空にゐる自分共に質問の矢を放ち曰く、

「支那は田舎に遣入ると随分不自由でせうし、それに第一危険で油斷もすきもならず、おちおち枕を高くすることも出来ないでせう。お察し、ます。」

と、これは田舎の農夫や船頭をつかまへて、總て皆泥坊ぐらゐるに見てゐる杞憂から出發してゐる

僻見である。

四

人を見れば泥坊と思へと云ふ、昔し箱根八里の雲助の部落でも行く時代の考をこの長江ののどかな田園にあて嵌めると云ふことは、妄言も亦甚だしいわけであると思ふ。たまに片田舎に臨城事件があつたり、外人の山寨に拉致されて行つた話があつたりする。又支那から歸つた人の歸朝談には面白半分に物凄い挿話を挿入したりすることもある。しかし支那の田園そのものは陶淵明式に門庭に五柳を植ゑ、東籬に菊花でも栽培して自然を楽しんでゐると云ふものが多い、今日廬山南麓の柴桑里、醉石の溪流には竹林の影に陶淵明の子孫のうちがある。後裔と自稱する陶家が二軒あつて、閑雅愛すべき田園生活を送つてゐる。自分共最近廬山再游の途次秀峰寺、李白の飛流直下三千丈の瀑布を仰ぎ、青玉峽に遊び、歸途轎をとめて萬杉寺の山門のそば田園に憩ふ。南瓜畑の間に五六人の農夫子供たちの働けるを見る。そこを通りかゝる色黒き百姓。天秤棒を片手に軽く支へ、そして右手に濃緑の胡瓜を皮もむかないでいきなりかぶり付き、さも美味らしく盛に頬張つてゐるのである。胡瓜や瓜をなまのま、頬張るは江南一帶に見る百姓の風情である。朝鮮の甜瓜畑でもマクワを手にして口を動かしてゐる農夫を見ることは珍しくない、支那も同じことである自分共はまさか胡瓜をやるわけにもまゐらぬので、その立ちどまつてこちらを眺めて

てゐる百姓たちに向ひ、

「この邊には西瓜を賣つて居る所はなきや、何ならお前さんたちの西瓜畑でもなきや。」と聞くに「ない。」と答へる。

「では梨でもないだらうか、酒錢を出すからどこから求めて来てくれないか。」

と云つて見た。しかしこの邊の田舎にはともありませんからとことわる。そしてニコ／＼して、

「この胡瓜ならいかゞ。」

と云ふ。腹がさう云つたものに慣れてゐないので残念ながらあきらめたのであつたが、しかし農夫どもはどうして自分共がこれを頬ばらうとしないかと可笑しく思つたことであつたらう。江岸農村の百姓でも恐いどころかそ風情心事の愛すべきものが多いのはこの一事を以つてしても判るのである。

二、酔うて田舎の酒に歌ふ

遠岫千疊の翠を背景に長江萬里の清きを眺め。江岸の景趣は天と與に極まりなく、田家園林の

韻致愛すべきものがある。田夫そのものは八庚の韻だの平仄だのと云ふ文字上の韻律を念頭に持つやうなことは考へてもあるないが、その平素目に見るもの耳に聞くものは一つとして詩的情趣を唆つてゐないものはないのである。

田家、軒低しと雖も鳥は宿る池邊の樹、雲は生ず戶外の峯と古人の聯句にも見えてゐる如くその春夏秋冬草堂の景致は田夫自然の詩囊を肥やさないものはないと斷じてもよろしい。殊に長江は中流あたりの所まで溯つて見ると、天下の名山廬山を背景に鶯は楊柳の風に啼き水は甘棠湖に溢るゝのとき、目に一丁字なき田夫が、氾濫の災厄を前に控へて少しの打算的觀念を起すこともなく、平氣で我れは我れの行く可き路を行くとばかり犁鋤のことに餘念がない。どうせ出水増水で流れて了ふ運命になつてゐる田園の間に立つて耕耘のことに従ひ、田園も我が郷、水郷も亦自ら樂しむ可しと云つたやうな氣持でゐるらしく眺めらるゝ、その田園であらうが、水郷に化せんとしてゐるところであらうが、耕耘は我が事である。耕耘の前には帝力も何も忘れてゐると云ふ大自然を體得した大きな所があるやうに感ぜられる。家に王侯貴族の贅澤は出來ないが、酔うて田舎の酒に歌ひ、香を野人の杯に尋ねることも出來、實にその田夫の胸にはつゆ俗累のなくして心は天と興に遊ぶと云ふ自然の境涯に出入することが出來てゐるのである。もしそれ長江は上

流峽中からかみの幽境に廻らんか、到る處に幽居の仙郷を見出すことを得べく家に米國舶來の麥粉はなくとも小船を江心に出して、そと車の水車仕掛けの簡單な機械で粉を舂いてゐる景趣を眺めるのである。又米を舂くにしても、玉蜀黍を粉にするにしても、皆この方法で水流が利用されてゐるのである。爵祿常位なく山川多古情などと幽居の聯に見ゆるもなるほどと首肯せらるゝのである。その重慶に上り萬縣に遊びて舶來のものを求むるなど云ふ氣は少しもなく、たゞ祖先傳來の千古の古習をそのまま受ついでそとぐるまの水車船を使つてゐるわけであるから、その純樸さ加減は略推察が出來るであらう。臺灣濁水溪や下淡水溪あたりはそのいかに水勢は十分であり春くに山境の物はあるにしても、かう云つた水車船を浮べるの氣分にはなりえないであらう。こゝには今特に適意山水に隨ひ、夜は靜かに猿月を吟ずるの事を能事とせよと云ふにはあらざるも、長江々岸の農夫山人がその如何に或は煙波江上を背景に又田園湖沼を背景に大自然を樂しみつゝ生涯を送つてゐるかを紹介せんとするものである。支那内地の田園情趣はその悉くを長江々岸の一點張りで推すわけにもまるらぬが、しかし、たとひ北支那の奥地にしてもその人情の純樸な點はいづこも大體同じやうに考へることが出來る。一にも二にも支那内地は危險であつて安心が出來ぬと考へるものがあるならば、それは支那田舎の田夫の田園情趣と云ふものを理解し

ないのに基づくものと云つてよろしからう。要はこちらからの出かた一つであつて、こちらで彼地の田園趣味を十分に解してゐることが何よりも肝心なことである。

八

江南に漲る田舎の風物

一、江南漫遊の前に

歐米萬能主義と歐米熱の流行は今も尙日本官民一般の頭腦を支配し渡歐者も上海に一日寄航のお蔭で以つて僅に租界の一部を覗くことは覗くがいづれも皆マルセーユ、ロンドンへと心あわただしく急いでしまふ。

そして歐洲に着いて西人から支那事情の質問でも受くるに至つては始めて今更の如く支那を顧みるの値打ちを教はる。現にこのごろ流行してゐるマーヂャン(麻雀)なども支那人の社交遊戯として夙にこれが面白いことは知られてゐるが支那人のあそびなることの聯想があるためにこれを劣等視してゐた。しかし一度白人が卓上これを手にして愉快氣にあそんでゐるのを見ると今更の如く麻雀位は知つてゐなくてはとすゞしい態度で幾組も支那へ註文をして取寄せようとする。

一にも二にも西洋でなくては夜が明けぬと來る。支那は時代後れだの、あたまが古いのと云つてどうもあたまにピンと來ないらしい。轉任も歐米の方に運動しなくては出世がおくれるとてロンドン、ニューヨークに思ひを馳せ西洋でなくては夜も日も明けぬ。滔々たる世間の空氣は、まだく多くこの歐化熱に魅せられてゐる。

官邊でも歐米にのみ人をやり、足もとの支那などに對しては昨今少しは目が覺めかゝつたやうだが、しかし一般世間はまだくゞ之を口にするのも好かぬとばかり見縊つてゐる。人も歐米行きを名譽とし支那なんかはと最初から馬鹿にしてかゝる。豫算にしても支那のことには溝に棄てるも同様に考へてゐる。言者でないかぎり、支那南北の全局面が歐洲の全體よりも、大きく複雑に出來てゐること位は明瞭にわかつてゐる筈であるがテンデ問題にせぬ。支那轉任を名譽と心得ないのもその筈である。政府の考へも低いが役人のあたまも古い。また一般國民は日本の立場を大局の上から何と考へてるのだらう。極めて少數の識者だけしか支那日本を打つて一丸とした大きな一つの舞臺として考へて呉れてゐない。

しかし、その支那を考へ支那に理解をもつにしても、が、單に政客の方面だけ、或ひは單に軍閥だけまたは取引關係の事だけに終始するものが多い。その一般に支那を見てゐる者にしても、多くはその都會地の方面にのみ限られてゐて支那の一般民族生活や、または文化生活の實際にあらはれてゐる田舎の方の事は眼中に入れて考へてゐない。上海、漢口、北京あたりのホテルにゐても、結構田舎の事情なんかは想像が出來るなどというて、支那民衆の八割以上が住んでゐる田舎の方には手をつけることをも欲しない。しかも皆机の上の堂々たる親善を大言せんとする親善

振りである。いやしくも眞劍味のある日支間の親交を求めんとするにはかくの如き方法では百年河清を待つと同様である。眞に支那に理解のある親善を欲するならば、出來得るかぎり廣く、深く、都會に偏せず、田舎に偏せず、一般支那民族の文化生活を視察研究しなくてはならぬ。軍事とか、政治とか、利源とかいふ方面は、兎角にその政局が變り、人がるなくなり、財界の不況にでもあふとバタリ中絶し、又はやり放しにをはつてしまふかたむきがある。さうでないまでも當事者が自分の専門の一面にのみとらはれ、社會文化生活の全局面を局外からの的確に見るといふことを忘れてゐる。今日の日本の立場は支那を正しく理解せんが爲にはこれが最も的確な知識を持つべきであるに拘はらず、事實はまだ甚だ漠然として夢の如き概念を描いてゐる程度にあるやうに思はれる。殊に南支南洋の支那文化事情といつたら殆ど眼中にないといつてもよい。いま上海を基點として考へて見ても、そのすぐ南の浙江省の田舎の事情にせよ、福建にせよ、廣東にせよ、上海を中心に躍動しつゝあるこれ等南支那における日常の實生活のことなどは薩張り分かつてはゐない。學者は古書を涉獵して遠き昔の歴史をかれこれいふことはある。けれども、これも現代の生活状態や今日の生きた問題には努めて觸れようとしない。觸れると學問の範圍を脱すかの如く誤解してゐるらしく見える。支那にして既に然り況して南洋やマレイのことなどに至つ

てはその理解のないのは當然のこと、いふべきであらう。

從來幾百萬の中華の民が南漸して、南洋各地の椰子林やゴム樹の綠蔭に假寓すること、に數百年、今や赤道直下であらうとどこであらうと、ところ選ばず到るところこれわが天地とばかり僑居永住してゐる。その意氣の雄々しく壯なることは洵に支那民族精神生活中の巨觀と評してもよろしい。殊にその個人として、どこまでも積極的に、徐に、且確に、堅忍持久で行く風懷は、これをその美しい長所とし、認むべきと同時に、西人の前に出たとすると無意識にへこたれて消極的に變ずる日本人としては、反省改善、一段の修養を積む工夫を切に感得せねばならぬ。われ等は南洋華僑の全部が南洋の天地に對して毫も海外異國の領土の氣がせず、無造作に南洋はこれわが廬と澄まし切つてゐる態度を見せつけらるゝにつけてもつくづく大和民族の在外思想、在外態度のなさないことが支那人の手前氣恥しく思はざるを得ない。

近時々勢の進運の然らしむるところか、識者、教育家の間に、幾分現代の支那を理解せんとなつとむるものが見えはじめ、またある方面では多少支那のゐなかを重く見るの必要を感じて來たかの趣がある。これはわが國民が漸く歐化熱から目醒めて、その眼を支那へ向けて行かうとする過渡期の道程に向かつたものとして見たい。われ等は「歐米より支那へ」を、日本民衆のモットー

とし、今後は支那に對する注目を一層強く一般識者に向つて力説唱道したいと思ふのである。

二、浙江田舎の情趣

南洋における華僑文化の跡を視察すべく自分は南國への旅行を思ひ立ち、民國十四年二月以來四ヶ月に互つて南支那の田舎から南洋は印度洋さかひスマトラまで漫遊を試みた。上海を中心にして三度南航、一度は浙江杭州の南星橋から錢塘江を渡り、會稽山の東を左にとり、紹興蘭亭のわきから曹娥百官に出で、昨春訪ねたことのある王陽明先生の龍山を餘姚の空に眺め、慈谿の普濟禪寺に甯波の鄭君や、有名な天一閣圖書館の墟などを巡訪し、鎮海や舟山列島を見、沖の鷗に送られつゝ滬上に歸つた。今一度は福建行きである。上海から臺州溫州沖を経て閩江に入り、馬尾山下から福州南臺に溯り福州は五虎、鼓山烏石山下に古の閩越の文化を味はひ、臺灣に渡り再び福州に歸り、大廟山に登り城内、南臺の美觀を賞した。更に他の一度は上海を出て福州廈門沖臺灣海峡廣東省汕頭沖から香港に寄港、安南、西貢、東蒲塞沖に山縣答禮使一行のことなど思ひ出でつつ南下しシンガポールに上陸、マラッカ海峡を北へ、馬來彼南に至り南洋スマトラ・ブラワンに渡り、スマトラの都市メダン方面を遊歴、馬來の西岸をイボ、首都のカウランボウやセレンバムへと南

下し、或ひは町の景趣を見、或ひは田舎にも入りなどして熱帯氣分を十二分に味はつた後、ジョホールの田舎をめぐり見て、シンガポールにつきぬ熱帯情緒の名残を惜しみ、南國の海上、夕照のうるはしきを賞しつゝ、再び香港に歸りつき滬上に戻つて來たのである。斯くの如く旅行の順序は遠方のスマトラから片付けたのであつたが、こゝには地理的にまづ浙江甯波の田舎の情緒から筆を起して、次ぎに福州閩江ひんかうのほりを、そして最後にマレー南洋の椰子の木蔭に漲る支那華僑文化の涼味について順次敘述したいと思ふ。

つら／＼江南、南支の文化について考ふるに、長江沿岸の流域にせよ、錢塘江方面または閩越方面にせよ、何れも皆その地方の都市並びに田舎の文化は、古來大抵水路によつて分布せられてゐる。勿論その間鐵路もないではないが、しかしその敷設は殆ど必要がない。遊歴の途上、田舎から田舎へと舟行しても見たが、實にその地方的にローカルのクリーク運河の發達はおどろくべきものである。田舎から田舎への人文の發達交通の進路はこの大中小かすかぎりのなき運河と、その枝にあたる傍水路のおほいことによつて推測せられる。

それゆゑ南方支那においては、都會城内の水運はいふに及ばず、田舎にありても鐵道の必要などは全然これを超越してゐるといふことが出来る。そしてこれに伴ふ大小無數の民船小舟の發達

が各村とも顯著であつて、小邑水郭、至る所幾百幾千といふ水上の民船が舷々相摩し密集してゐる。南支の水郷水郭とは昔からいふことであるが田舎の内地を實際に親しく見て今更の如くその感を深くする。支那内地の文化がこの水路にそつて分布され發達を遂げてゐるのもまことに偶然ではない。従つて支那文化の蹟を視察する場合の如き、もとよりこの水路によることが何より便利である。これは南洋華僑の文化が椰子護謨園の綠蔭にそつて見出されこれが視察には椰子林やゴムのエステートによることが何より便益を得ると同様である。

一體支那文化の徹底的視察を遂げ研究を遂ぐる上には自ら求めて支那の田舎に入りその生活にその文化をあぢはひ、一種いふべからざる純朴の情趣を解することがまづ第一の出立點として必要である。然るにこれを嫌ひこれを得ず單に田舎を苦勞の淵の如くに誤解し甚だしきに至ると田舎は土匪の横行する場所で危險この上もなき魔の國でもあるやうに考へてゐる者さへある。思ふに南支の文化はその歴史にせよ、文學趣味にせよその他思想、經濟交通軍略何づれにしても、すべてその文化的現象を考へるには、實際問題としてその水運の發達を地理的に見、同時にこれが實況を田舎の實生活について確め進んでは自ら田舎の宿に身を投じて十分研究する決心がなくてはならない。それでこそ初めて本當の理解ある研究調査もまた眞の親交も芽生えを見出すこと

が出来るのであらうと思ふ。

三、錢塘の煙波江上老農の道連れ

宋代の建立にかゝる杭州西湖の呼びもの、雷峰塔の塔影は民國十三年九月廿五日の正午をかぎりとしてとこしへに崩壊した。折りも折り盧永祥對齊燮元、孫傳芳の戦争の眞最中脆くも崩壊の運命にあつたものと見えて偶然にも崩れ落ちたのである。湖上扁舟に棹す雅客風人の心は三潭印月の左方幽かにこの遺塔遠影のためにどれ位引かされてゐたことか判らぬが、最早永久に雷峰塔の影は見られなくなつた。日客の西湖觀光もこの古塔の情趣によつて清游の心を深刻にそゝられてゐたのであるが、今となつては唯その對岸の空に、高く細く尖れる保叔塔の孤影を寂しく打ちながむるの外はない。ありし昔の歴史を物語る遺蹟遺物はかくの如くにして現實の支那から夢の如くほろびゆくのである。

江蘇浙江幾百千里と打ちつゞく春の菜たねの花に色どられた平野の眞ん中を行く間にも時折りかゝる雷峰塔を弔ふ氣分おさへ難く、葛嶺、天竺、吳山の諸峰をあとに浙江閘口の手前、南星橋まで火車で來た。候潮の題字あざやかなる杭州城門を外に出ると車站につく。錢塘江の義渡はこ

こにある。江岸の民家の間に灰色の軍服をつけた兵隊ども七八人、劍突き鐵砲で水汀にたゝすんでゐる。こゝは普通の統捐局もとの釐金局の税關があるところであるが、外にまた例の臨時軍費徵收所を兼ねてゐる所であるから、義渡はたゞでもこの税關許りは、いつかなたゞでは通さない。錢塘江の大河を渡る要路を扼してゐるだけに大したものである。多額の物資の去來集散する杭州の南口にあるために督弁公署においてもこれを重要地の一つとして見てゐる所である。

この義渡を渡る客は上海、松江、嘉興、嘉善乃至は杭州あたりから來たものである。草紙の荷物小荷物その他行李の大型のものを持参してゐるものが、大分押しかけて來てゐるので、これが検査に氣を取られてゐた兵隊どもは、たつた一個の小さいストケースに蝙蝠一本といふ手輕な自分の持ち物に對しては殆ど目も呉れなかつた。昨春の旅のときは規則通り一人二人來て突立つて「一寸あけて見せろ」とばかり遠慮なく鬼のやうな手を入れて着替の襯衣などませかへされたのであつたが、今度は思ひの外氣まぐれで何のこともなかつた。

錢塘江岸は汀から四五町も遠淺がつゞいてゐるので厚板を渡したせまい假橋の上をゆられながら足許徐々に一人々々渡つて行くのである。すると義渡の渡船が二三十艘も舳艫相銜んで江心に並んでゐる。向うの對岸、遠きあなたから黑煙を天にあげた小蒸氣が先になつて二三ばいをあ

とに曳いて來るのが見える。自分は早くもこちらでこの曳かれる民船の窓ぎは近く見透しのきく所に座を占めて、舳頭遙かに錢塘の濁流を悠々と去來する民船の景趣や、右岸遠く仰ぎ見らるゝ吳山の景觀に六和塔の雄景など雲煙裏に打ちながめ十年以來思ひ出で多きこの地方の山水風物に恍惚として見とれてゐた。そのうち、やがて船は滿員となり小蒸氣の汽笛を合圖におもむろに小假棧橋から離れて江心へと出た。漫々たる煙波江上、順風暖かに面を吹いて兩岸の潤色は深きを加へ、いかにもよく浙江氣分を現してゐる江水は古の吳の國を東に流れてゐるのであるが、南越に渡る行客もまじつてゐる。全く文字通りの吳越同舟とはこれであると思つて不圖乗合ひの面々の風貌を見渡して見る。

昨秋四川巴蜀の祕境で話した人々のやうにきつい顔をしたものは見當らない。また湖南湖北あたりの人相とも違ひ、吳越の面相共にやさしく春の煙波江上の雅趣に富み、和氣に充ち充ちてながめられる。紙包に紅紙の添へられた買物に城内で求めたらしい肉の饅頭の三つ四つ、それを天秤棒でかたけるやうにと頻に紐で一つにまとめようとしてゐる農村の青年がゐる。支那には日本のやうな風呂敷の使用が普及してゐないから蓮葉やちり紙で包んだり、葦の莖または緒でくくつたりすることが多い。風呂敷を用ゐるかはりに時に麻の緒をゆたかに贅澤に使つてゐるものがある。

船内にはまた十七八の百姓の子供の血色のよく立派な體格ではあるが、腕に腫物のひどくつぶれて痛がつてゐる先生がゐる。その隣りには砂糖黍の皮を齒で取り去つては音を立て、中味の心をしゃぶつてゐる小僧もある。しかし見渡したところ二三十人の同舟者は農夫らしいものが多いかつた。自分と膝を差し向ひの目尻のさがつた老農を相手に自分はその娘の子の衣裳の色や裝飾のことなどの話しに餘念がなかつた。吳越同舟のお蔭で自分は子供の話しから老農と十年の知己のやうに懇意になり、錢塘の對岸に渡船が着いてからも老農は旅行者としての自分を大層いたはつてくれた。途中いろいろの話しをしながら春風駘蕩の田舎道を茶亭から茶亭への、行き來の繁き光景の中に同行するわれ／＼二人もいつか畫中の人となつてしまふ。

元來この道は自分が昨年二度あるいた田舎街道で、勝手も路程もよく分つてゐる。昨年は沈君といふ田舎青年を道づれにしたが今年はまだ老農の好同伴を獲たわけだ。古老だけに土俗の話しを聞くには持つてこいである。その途中で出くはす里人村翁との挨拶振りに手籠の中の買物の値段の間答までが罪のない大道農夫の談柄として面白い。別段いそぐ旅ではなし翁の浙江馱舌の方言が聞きとれぬ時は空の雲雀の囀る音でも賞してゐればよいので義渡の船が縁で誠によいつれを得たわけであつた。

四、水郷運河に漲る田舎純朴の情趣

一一一

浙江錢塘江以南の水路運河は西星を基點としてあらゆる方面へ細かく通じてゐる。自分は東方寧波方面に再遊を試むるのであるから會稽山の東、紹興、曹娥に水路を取ればよろしい。昨春來の經驗もあり、萬事手にとるやうに勝手はわかかつてゐる氣もちがしてゐる。しかし道づれになつた老農は、自分の孫の面倒でも見るやうに、その運河の河畔にたゞすみ或ひは漕ぎ來たる小舟の方を見たり路上の行人に話しかけたりして水陸兩方面の氣のくばりかた一と通りではなかつた。やがて同じ年恰好の丸顔の百姓のかみさんらしいのが二人、手ごろの小さい行李を人夫に擔がせ、足は小さく蓮歩ヨチ／＼ではあるが陽氣さうな話しぶりでこちらに通りかゝるのを見た。老爺は一つ話しかけて見ませうと、いふより速いか。

「あなたさん達は蕭山の方へ下らるゝのところがひますか。」

すると、かみさんだち牌樓の壁の前に立ちどまり、心易けな愛嬌を見せて、答へるに、

「さうですよ、蕭山の田舎へ下ります。」

「デハ、一つわれ／＼も同じ方に行くのだが四人で舟ではいかゞでせう、日本から遊歴客もこゝ

にゐられますので。」

とありのまゝにいふ。話は快くまとまつたのでこんどは舟だ。いくつとなく運河を續いて下る小舟との談判である。いくら話しかけても來る舟、來る舟、何づれも皆約束濟みか又は違つた外の方へ向ふ舟ばかりである。丁度よい手頃の舟が來たと思ふとそれは人のハウスボートであつて勝手にはまるらぬ舟である。根氣よくも老爺は岸から例の黄色い聲して船さへ見れば言葉をかけ船頭と問答をしてゐるが、遂にうまく一艘を呼びあてた。そして談判大いにつとめてくれて、結局のところ、蕭山まで五里路を四十錢で行かうといふことに話しがきまつた。支那では各地に洋人價倍といつてよく外人には倍に吹きかける習慣があるが、このやうな田舎では外人を殆ど見たこともない。従つて總ていふ通りになつても間ちがひはない。

百姓のかみさん達は荷物かつぎの人夫と手を切つてこちらの仲間になり「お先に」とばかり岸の石を押さへ足もと軽く岸から小船に飛び乗つた。つゞいてわれ／＼二人も靴をぬぎせまい船内に入り苦の下に足をのびし樂々と座を占めたところが四人で一パイになつた。二人づつさし向かひであるから、とかく傾きやすい船であるが、船底は水平をたもち、船頭の艦の音やさしく或ひは古色蒼然たる石橋の下、または兩岸楊柳の間、民家の櫛比せる裏壁の廣告文字の下などを漕い

で行く。船内では尻あがりの浙江なまりで、いかにも百姓らしい田舎のまつりの話しに買物などの話しが始まる。城外に出ると運河の兩岸一時にバツと開き天空開豁のあかるみをあび乾隆道光あたりの牌樓の列が高く眺められる岸の叢、清い水汀のあたりから小鳥が二三飛び出し楊樹の蔭に消えて行く。行きちがふ運河の船の客には百姓らしくない相當な身なりのもも見當たる。自家川の船で、もあるか彩色を施した美しいのが橋のたもとに靜かに泛んでゐる。實に平和な江上の景趣で日本の畫家にも見せたい佳郷である。

このあたり運河の發達開鑿はたいしたもので、その岐路も實に多い、石橋の下をくぐると、大抵その先の運河は二つ三つの岐分かれになつて何れの江上にも民船の去來が多い。船頭は互に船と船とで何やら大きな聲で挨拶をかはしつゝ、狭い橋下を往きちがつて行く。運河の清水を汲んでそろ／＼晚めしの支度に取りかゝらうとしてゐる江上住まひのかみさんも見える。かうした平和な水郷の情趣に浸りつゝ、楊樹の新緑の下を漕ぎ行くこと一時間餘。再び船は城内らしきにぎやかな運河に奥深く漕ぎ入つた。例の裏壁高く兩岸にそびえ宏壯な白堊の大壁に窓一つなくこれに「當」の字たつた一字だけが十二三尺の輪廓に書かれてゐる。金持ちの質屋の看板とうなづかれる。また「山珍海味」の大字の黒書、これは乾物屋と讀まれる。裏口の石段水際において洗

ひ物せる家人のうちの壁にはこれも大字にて「染坊」とある。染物悉皆屋たることがわかる。また手斧の音するうちに「水木兩作」とあるこれは大工左官兼業の店である。これで見るとかなりな町であらねばならぬ。昨春城内の陸の方から見てゐた蕭山の城内はこれだ。さすがこの邊での大きな町であると思つて見てゐるうち巍々乎といつては誇張過ぎるが右方に當つてかなり高い白堊の壁に楷書で「浙東第一旅館」と讀まれた所にわが船は横着けされた。老農は到了といふ。それではと船頭に勘定しようとしてもどうしてもさせない。三人はまだ先が遠い。さき長く乗るのだから決して御心配などは……と二人のかみさんまでが一生懸命。そして一路平安をと心から祈つてくれて石段に上つて見送らうとする。その小さい足に對しても恐れ入る譯である。一時同船したゞけでさへこれ程の縁だ、況して錢塘以來船に陸に行を共にした老農は盡きぬ名残をとてわざわざその老軀をひつさけて石段を上り旅館の賑房のところまで自分を案内し且ねんごろに番頭や館主に自分を紹介してこゝは浙江東部第一の旅館なればと第一室に室を取極めたところまで見届け別れを告げていつた。この美しい純樸の印象は永久に自分の頭から去らないことであらう。

五、浙東第一旅館の一夜

支那の田舎の宿屋ぐらゐるその地方のローカル・カラーの溢れてゐる所はない。支那文化の現代的視察にはこの田舎の旅館を重く見る必要がある。自分はこの田舎の宿屋に深い文化趣味を感じてゐる。この地方では宿屋のことをなまつてカザンといふ。宿屋のことを聞けば土民は客棧有的と答へる。客棧はカザンと發音し土地の通り言葉である。自分は今その客棧に身をおいてゐる。ひろい蕭山の田舎の町に日本人は自分ひとりである。宿の老班(番頭)に向つてこれまで日本人がこの邊に來たといふ話しても耳にしたことがあるかと聞いて見たが、聞いたことはないとのことであつた。

道理で大層物めづらしけに、あたりの村民や子供たちが夕ぐれの第一樓の中庭に集つてくる。セツペンニン(日本人)來たといふ聲はあちこちから聞える。動物園の庭にめづらしいカンガールでも來たといふ恰好である。珍客扱ひは結構だが何分大變である。隣室第二號の客は氣のきいた青年で眼鏡越しに上海の新聞申報を手にしながら中庭の籐椅子に寝そべつてゐる。自分の挨拶に答へては浙江の田舎の話など糕柄にする。話し半で自分は番頭に晚餐の品目を書いて命じておく。一青豆蝦丸、二年糕油菜湯、三炒鷄絲或鷄蛋、四老酒(五個銅片)五花生。幾らも時のたゝぬうちにボーイは吃飯といつてきて中庭の正面、客廳の八仙卓上に支度が出來てゐる。青年は食事

を済ませたので宿の老班どもを話し相手に晩飯をとる。食後散歩して見たいと思つて一筋町の賑やかな地域、見晴らしのきく拱橋、寺廟の所在などを聞く。老酒の爛が甚だよく出來てゐるので酒のことを老班に聞いて見ると、老班は

「これは老酒の本場紹興酒の陳酒だからものが特別によい。紹興はこのすぐ先の町だ。」

と説明する。陶然としてよい氣持になつて、一應第一號の自分の室にかへる。扉を這入つて右の方に清潔な寢臺、夏冬通しの白い金巾の蚊帳がかゝつてゐる支那更紗の薄い綿布(蒲團)が細長くたゝんである。やはらかく低い枕もある。ベットの下には青磁焼きの便壺がおかれ、正面の壁には扁額の山水や佳句がかゝけられてある。窓の下には小卓、椅子、脚、これにランプこれだけで全部である。室の廣さは四疊半もない位であるがいかにも小ぢんまりして便利に設備された部屋である。手さげと例の蝙蝠をこれにおいたきり、別段戸締をする必要もなく、運動かたぐい町を見てくると計り中庭にたわいもなく集まれる連中の中からソツト抜けて出る。

支那の新しい文化はこの田舎町にもしみ込んでゐる。左方一二町いつたところに照像(寫眞)屋がある。上海のバンドの古い引のぼしを後生大事とかゝけてゐる。その浦東を取り入れた取り方が氣に入つたから暫く見つめてゐて、そして譲らないかといふとジロく見ながら不賣と答へる。

見れば此店は鑲牙(齒醫者)の店を兼ねる。金齒を嵌めるとすぐその場で撮影しようといった當世流行の空氣が早くにも入り込んでゐるのである。又相當ハイカラ店も出來かゝつてゐる。唐物店に立寄つて見た。日水壺といふものを天井から澤山ぶら下けてゐる。支那圖案の老子の繪など描かれてゐるが紐の工合が日本人らしい。鄭君の坊ちゃん土産にと思つて求めて見た。日本で魔法纜といふ名が支那ではニスィフといつてゐるのだ。町は四五町で盡きる。折れ曲がつて石の拱橋の高い所に上つて先に來た運河の水路を見渡して見る。鯉節型の細長い圓い屋根の民船の去來は相變らず繁々しい。漕ぐ櫓の先の水をかきわけてゐる風情も何となくゆかしい。

宿に歸り大客廳に茶を請ぜられてゐると、どこから寄つてくるかまたく百姓の子供たちが八仙卓のまはりに集まつてくる。申報の繪の話しのたねに種々の地方的の質問を發してゐると、村の若い衆どもがよろこんでその間に應ずる少しもはにかまない。四ツ手網の名前から今ごろ網にかゝる魚の名は何かなど聞く段になると得意げに語る。落花生でもむきながら、かうした田舎の情緒を異國の旅の空で味はつてゐる時は天下太平である。上海に紡績罷工が起つてをらうが、青島に飛び火をしようがこの田舎の團練的情味といふものはまことになつかしい。

六、浙江は紹興城外の和平の景趣

浙江の田舎の支那宿はたびく經驗はしてゐるが蕭山の旅館に泊つたのはこの日が初めてであつた。終日出來事が多かつたのでつかれも甚だしく、旅枕夢一つ見るひまもなく深く徹底的にねむることが出來た。人はよく支那宿には南京蟲がつき物で閉口だなどと食はずぎらひをするが一向にそのやうな者にも見舞はれず、そのためむしろ少々物足りなく思はれた位であつた。今少しくだらしない客棧にとまつたらその情緒が味はれたかも知れぬ。

それは兎に角として翌朝は早く十時半ごろ開船するといふから朝飯がすむとすぐ船出の前に、近所の髮床にでもいつてさつぱりして來たいと思つた。宿で床屋のことを北京語の剃頭的といつてもよくわからぬ。むしろ理髮店といつた方が分りが速いくらゐるにこの邊は新文化に染んでゐることを知つた。さてその理髮店にいつて見るとたゞガラツとしてゐる壁の鏡と相對して椅子が置いてあるだけである。床屋は皆小鞆を持つて通ひでくる。感心に朝の九時ごろであつたが既に三四人店に來て客を待つてゐた。自分は別段に洒落る柄でもないし、さらばといつて前方を藪の如くモジャク、當世流にやるのも好まず、またヤング・チャイニースの時代にオール・バックも

好まぬ。矢張りガリ／＼がよいからとて寸法をよく説明すると心得たりとばかり小鞆からバリカ
ンを出して早速毛を二三度もんで刈り始めた。曾て北京で刈られてゐた間居眠りをしてゐる支那
流に丸く剃り上げられてその晩公の宴會の席で皆から早く寫眞を取つておけなどとひやかされた
こともある。それ以來支那の髮床では神經をとがらしてゐたのであるが、こたびは無難にあつら
へ向きに出來た。耳も髻も皆濟んだ。いくらかといつたら實におどろくなかれ郵船賀茂丸船内バ
ーバーの時の十分の一以下で小洋の十四錢だといふ。文明の風の吹いてゐる地方ではバリカンさ
へ使へばすぐ一圓五十錢をとるのが普通である事實と對比して實に意外の感が深い。

宿に歸つて見ると船が來てゐる。先刻から先生を待つてゐたといふ。見れば民船は殆ど満員の
形ちであつた。切符の票も出來てゐたので「これは濟まぬ」とそこ／＼に早く飛び乗つた。客は例
によつて田舎の百姓どもやこぎれいなかみさんだち、子供をつれた番頭らしいのなどである。運
河の兩岸の眺めは裏壁つゞきで先般來見て來たところの延長みたやうなもの、別段とりたてゝい
ふ程のこともない。やがて蕭山城外に出るとその轉壩といふ所で小蒸汽輪船に乘替るのである
その碼頭で皆おろされ二三時間待たされてゐる間に自分は色々面白い城外の情緒を味はふこと
が出來た。その第一は實に美しい五彩の青雀舫または艫舫と稱せらるゝ美術的の民船である。盛

んな佛事の施餓鬼をやりながら鳴り物入りで波上靜かに流して來る景趣が見える。新緑の楊樹と
菜種の花の兩岸をバックに、その合唱する題目の優長さ加減といつたらまたとない。春の日永に
土民どもと一緒に橋の縁にもたれ暢氣に打ちながめてゐるとその苦のうちから打ち鳴らす鐘の音
も清らかにその善男善女の香を焚いてゐる趣きはやさしくて何ともいへず、春の水に調和してゐ
るやうに見られた。そして、その一パイを見送つて、かすかにそれが見えなくなるころ、またも
や次ぎの江上に清香の趣きをたゞへつゝおもむろにやつてくる。實に何といふめづらしい田舎の
詩的な眺めであらう。南京秦淮の畫舫は夜趣においてその名を得てゐるものであるが、この青雀
舫は晝の呼びものとして天下にあまねく知らせたいものである。

第二には鶉飼ひの船の江上橋下を去來する景色である。一つの船に三四十羽の鶉を使ひ、その
運河の水深くもぐつていつたかと思ふと、やがて意外の水面に姿を現しバタ／＼とふなばた見か
けて飛んでくる。そして時々さかなをはかせるのであるが、その一本の竿でよくもかゝる多數の
鶉の群を追ひあしらつてゐるかと思ふと實によく手なづけたものである。高い拱橋の上からなが
めてゐるとその鶉飼ひ船のかすかに見えなくなるまで羽ばたきたり、水上にあそんだりしてゐ
るその景趣が春の水郷ののんびりした氣分を一層引のばしてくるやうに思はれた。

第三には橋のたもとにどこからともなくもれ聞ゆる兒童の讀書の咿唔の聲の賑やかなことである。昔は庠序に咿唔の聲を聞いたなどいふと司馬溫公などの幼年時代を聯想するのであるが今の田舎は宋代の延長として見てもよし、隋唐の世に見ても差し支へない。聲の聞こえる方角にひかされていつて見たら、寺のよこ手の家で小窓のうちに兒女の二三十人も一人の村夫子先生に教はつてゐるのであつた。ちよつと這入つて參觀しようとするどん／＼皆にけ出した。怖れなくともよいといつたら引かへして來たものもあつた。三字經や孟子色々のものを、節をつけて音讀させてゐる。寺小屋そつくりの光景である。橋のうしろにまはり道教の寺へも這入つて見た。「聖神文武」の四大字が金ピカで扁額にかゝけられてゐる。わきに四天王のからだを前にな／＼めにしてゐる立像や紅燭の餘燼なども見えてゐた。こゝは民船の船頭連中の信仰をつないでゐる寺らしく拜せられた。なほこのあたりの民屋農家の住ひの破風には多く「福」の字が一字筆黒々と大書してある。土地の趣味がこの福の一字によく無邪氣に現されてゐる。かうした田舎の情趣景趣にひたつてゐるうちに紹興曹娥行きの輪船が程近く來る時刻になつた。

七、江上紹興の畫舫青雀舫の研究

城外轉壩の船つきには田舎の飯屋もあり茶亭もある。やがて乗り合ひになる多くの百姓たちと一緒に表から見通される田舎飯屋にはひる。看板に、

葦素包辨

とある。葦素便飯とあるのとおなじことで煮付けもあり、酒もあり、お手輕辨當といつた格のところである。中々の繁昌でなかには茶だけ飲んでゐる客もある。かみさんも亭主も忙しげに立まはつてゐる客の茶碗の蓋を取つて一々熱湯をさしてまはるだけでも大抵でない。

やがて曹娥行の青旗の立つてゐる輪船が汽笛を鳴しては入つて來た。すると官艙房艙の窓口目がけて待ちかまへてゐた岸の物賣どもが長い竹の先にザルを吊りさげ、いきり立つ聲のかぎりを盡くしてわれ先にと客に押し賣りをする。一體何を賣つて斯う騒ぐのかとのぞいて見ると、紅色のついた四角の菓子の一束四個づつ／＼つてあるもの、また揚豆腐の油をぬいたやうなもの、また砂糖黍の二寸ばかりにぶつ切りにしたものなどである。感心に水中に落とさないやうにして船へ突き出してあきなひをしてゐる。輪船から降りる客と乗る客とで碼頭はかなりの混雑である。その混雑を見物してゐる子供がゐるかと思ふと、混雑をよそにそばの墓陵の塚の上に凧揚げに餘念のない子供もゐる。また江岸の鋪石を運河に沿うて、やはらかい毛繻子の靴も軽く二三人何や

ら話しながら春風を切つて進むものもある。

その中に輪船公司の案内者の案内するがまゝに自分は船尾の方の天井の高い官艙にをさまつた。屋上見晴らしのよい所に上つてゐる客もゐた。寄港二三分間汽笛を合圖に船は岸を離れて江上へ乗り出した。窓からそとをながめてゐると例のうるはしい五彩の青雀舫と行きちがひになつた自分は年來南支那各地方の民船を注意して見てゐるが、そのうち、藝術的に美麗に出来てゐるものに、浙江の青雀舫と福州の山東船とがある。この二種の様式は支那南船美舫中での白眉である。ところで福州の方の山東船は後の機會に述べるとして浙江の美船は紹興を中心として蕭山、衙前、錢清、柯橋、虹橋、昌安、五雲、皋埠、陶堰、涇口、東關といった曹娥水路の運河の各所に到る所に認められる。しかし曹娥あたりにくるとそれ程でなくなり色も變り圖案も一變してシンプルなものになつてしまふが、紹興方面の青雀舫と來たら實に美術的である。富者のハウス・ボートも多くはこれであつて形状、構造は普通の民船とそれ程たいしたちがひはないがその彩色塗抹の圖案に至つてはおどろくべきものがある。

青雀舫は船首や船側、船尾はもとより、舵にしても艙にしてもことごとくがこまかく青緑と紅、黄、金銀などで彩色されてゐる。殊にその船首のところは青緑の鬼の顔面に見立て、その中央に鼻柱を太く長く、左右の眉を長く、眼は圓く、そして口は口角を大きく開けてはゐないが可なり怖いやうにかいてゐる。綠、青、藍、黄褐の色が最も重なる地色となつてゐる。浙江の古老楊先生についてこれをたづねて見たら、その名前は

烏篷大鳥或は又鶴首

と稱するものであるといつてゐた。古來この江上の舟行危険を伴ふこと多きも、もし船に大鳥、鶴首を冠しておくときは、蛟龍の類の水怪、その形を恐れることが甚だしいので航海爲に危険を免ることが出来るといふ信仰から出たものらしい。子虛上林の賦にも既に飛閣青雀舫のことなどの見えてゐる所から察すると、この畫舫は漢代から知られてゐたものであることがわかる。類腋卷十五、六、物部に閭閻、艦艚などあるのも同一のものを指すのであらう。かうした美術的の裝飾は浙江寧波方面にかけて漆塗の技術の發達してゐることに原因すること、思はれる、その圖案が初めは大鳥鶴首に起つてゐるにせよ後世は鳥の形から脱却して全くの怪物鬼神の顔を誇張的に現したものになつたものらしい。なほその舷側や船尾、舵艙に施せる圖案は、色は大體船首と同色であるが、こまかく密畫で、上流宮廷などの榮華の生活振りまたは古典的のデザインになれる模様を以て全部塗りつぶしてある。

支那南北の畫舫のことについては、自分は北京萬壽山昆明湖石船の奥に西太后の遺物として知られた畫舫の片影を見たことがあり、また南京秦淮にその優秀なるものを見ぬでもないが、浙江のこの蕭山紹興あたりに見るものは群を抜いてゐる。しかもその數もおびただしい。思ふに晋王義之の蘭亭方面に近き南郊の水郷にも、これら青雀舫の偉影を今日同様に豊富に見たことであつたらう。

八、江南の田舎宿に見る壁上文字の興味

われ／＼の船は運河江上、柯橋虹橋の碼頭を過ぎると、次ぎには右岸楊柳の茂れるあたり山の如く高く大壺小壺の横ざまに堆積されてる所に來た。支那四百餘州名流民衆すべての長夜の宴には必ず出るあの有名な老酒、紹興酒の本場紹興は即ちこゝである。江南の大平野のたゞ中にエヂプトのピラミッドをま欺く老酒幾萬の壺の山は實にその容壺の大規模なところを見ただけでもたいたものである、その山なす壺は花や唐子模様のものでなく、また紅描のものでもなかつたから一番多く出る並みの老酒の容壺であつたらしく思はれたが、さてその多量の老酒そのものこそは毎日この運河によつて絶えまなく北京にも上海にも四川にも日本にも送り出されてゐると思つ

て眺めると、一層その偉大なる感に打たれる。民國では酒黨でなくとも、その老酒の中の區別として花酒や紅酒の咬み分け位は常識として誰でも鑑別が出来る。たゞの老酒にしても紹興の土地に來ての味はまた格別なもので、さてこそこの地方には李白遺風とか李白醉餘とかいふ扁額が吟香閣のめしやあたりにいくつとなく讀まれてゐるのである。

浙江餘姚の友人張雨耕君と前年紹興城内から小舟をやとひ、江上山陰王右軍の蘭亭に向かつたときは雪中極寒の時であつた。今は春陽の好季、同じ江上を城外へと左にとつて悠々めぐる。錢清の遠山道觀は遙に、紹興の城壁は江を壓して高く仰ぎ見られてゐるが、城内の丘上墓陵の原となつてゐる所に指しかゝるころ、暮色蒼然天にかゝる晚霞の夕陽は刻々に大陸の地平線に近づく。船は進路を右へ夕照は城壁の影にかくれんとして益々紅に、また愈々大きく見えた。雲煙次第に邊りを鎖ぢこめて江上を急ぐ歸帆の色も夕陽を受けてしばし薄あかく映じてはゐるがやがて靄々裡のうちにつままれつゝ姿を消した。紹興城外最早物寂しく柳浪聽鶯の景趣も味はへなくなつた。ひとり何ものか輪船を追つかけ薄暗き城外の原頭を江汀に浴うてひた走りこ走つてゐたものがあるが、時々船の賑房と暗やみに聲のみで應呼してゐるのが、氣味わるく聞えてゐた。併しそれもいつしか全く暗の中に消えてしまつた。自分はよく唐宋の文人墨客共が、大陸の夕暮を詩

に文に咏じてゐる所を深刻に経験した。またその情緒の氣持ちもかなり諒解してゐる。たゞそれだけの表現の言葉と文字を持たないことを今更痛切に感じたのである。

紹興の城外は全く夜の世界となつた。北斗七星は低くあざやかに閃めいて來た。船は星月夜の江上水郷を時々汽笛をあげて切り進んで行くのである。臬埠の碼頭につくと、その渚近く高く出來てゐる舞臺の上で煌々たる松明を前に村芝居武劇がはじまつてゐて、白い長鬚をなでゝゐる役者に、鞭を手にした對手がしきりと奏樂に合はしてクル／＼まはつてゐる。東關についたら、ここにも亦村芝居の演ぜられてゐるのを見た。建物が向うを向いてゐたので、舞臺はよくわからなかつた。その銅羅や胡弓、四ツ竹、笛ではやし立てゝゐるところの情緒は都會も鄙もたいしたちがひはない。寧ろその遠くまで江水にひゞき渡るところ、江南の村芝居の方が一層雅趣に富んでゐるやうに思はれた位である。

東關につくと曹娥の娥江旅館の宿引が宣傳ビラをかゝへてこの次ぎは終點の曹娥だ。高士來たつてわが娥江に泊せよとばかり遊説至らざるなしてあつたが、船が曹娥の碼頭につくなり、いやはや提灯やら出迎へやら宿引やらで江岸の雑沓喧噪は身動きならぬ。氣の弱い者は行李の一つも持つて行かれてしまふ位である。その騒ぎの中を船から吐出さるゝ二三百人中、われ／＼五六人

だけが『娥江』の紅字の提灯を頼りに押すな押すなの群衆の中を漸く抜け出てその宿に案内された。見ると、前年泊した越新旅館はその隣りであつた。そこには小學生の可愛い子供のゐたことなどを思ひ出しながら『娥江』のわが部屋を定める。一號室ときまつた一人部屋で蚊帳つき寢臺に綿布、小卓椅子、便壺みなそなはつてゐるが、小窓の戸がすいてゐて壁の間から風がスウ／＼入つて來る。戸がガタ／＼いふ。ランプの火がいらだつ。運悪くもこのやうな室にきめたものだなといふ氣がしたので一應番頭を呼び一緒に他の部屋を見に行つたが皆似たものばかり。我慢の外はない、没法子だ。前年隣りの越新にとまつた時には二階の段梯子をあがりおりの客の登音で閉口したが、こん度はまたこれだ。そこで反對の壁の方に卓を移させてわが部屋の模様がへをしてみたら少しはよくなつた。そして不圖その上の壁を見ると面白いことに茅山三清殿の「すべからず二十二ヶ條」のいましめが細楷で掲げられ旅客の無聊を慰さめてゐる。わきの支那宿や船内でよく見る、重要物件各自留心、若し紛失することあるも責に任ぜず、なんていふ殺風景なものよりは遙に面白い。左にその全文を付記して見よう。

茅山三清殿轉校

父母逆不得

兄弟爭不得

支那遊記

坎墓荒不得	棺木燒不得
盜賊做不得	咒罵使不得
女兒淹不得	邪路走不得
淫書買不得	算盤兌不得
窮人逼不得	良心壞不得
壞話說不得	訟事啖不得
賭局開不得	閨闈談不得
善事擋不得	物命傷不得
坑廁露不得	口腹貪不得
廟宇撤不得	神像壞不得

敬惜字紙

孤雲氏敬送

この二十二ヶ條は熟讀玩味してこれを今日の支野社會の現状について一々考へ合せて見ると一層教訓的やら皮肉やら反證やらが擧がつて來て興味津々たるものがある。

九、浙江省錦江江畔茶亭の情緒

寧波に遊歷を試みんとするものはなるだけ支那式に田舎の情緒を味はひつゝ行くに越したことはない上海から一夜で三千トン級の汽船でいつてしまふのは餘りに没趣味である。特にそれでは文化的研究の目的にも叶はない。その錢塘江を渡り、運河の水路をたよりに蕭山、紹興、曹娥と來たものは必ずや百官の驛にくる。百官から寧波へは一空、火車で二時間半で行かれるのである。

さてその曹娥を出て百官に至る間には錦江の義渡がある。錦江江畔には幾多の支那情緒の漲つてゐる貴い材料がころがつてゐる。遊歷客はそれを親しく經驗することが出來て、それが又支那らしい支那を味はふ一助ともなるのである。自分は友人の張君を花潭村にたづねるべく曹娥の宿で前晩から轎子を頼んであつたので、かれらは朝早くから第一號室の戸のそとに押しかけて待つてゐる。すつかり支度が出來て愈々轎子に乗らうとする前、よくあることだから轎班だちに念の爲。

「君等は花潭村の路はよく心得てゐるのか」

と駄目をおして見たら異口同音に、

「曉得、曉得、明明白白」

と如何にも心得たやうにいふ。これは百官驛を知つてゐるといふだけの心でこちらの壺には少しも嵌つてゐなかつた。それはあとで判明した。當てになると思ひ込んだのが間違ひのたねである。しかし早朝宿を出て、山下河沿ひの平野を行くこと三四支里、窓外の青々した眺めはよい。年々歳々相似たる山水の風光ながらもなつかしい。錦江を義渡の船で渡る。朝風は寒く身に浸む。渡船は屋形船である。七八人の乗合ひもある。船の左右の聯にはうまい佳句をかゝけてゐる。

波平兩岸潤。

風順一帆懸。

船頭の心にも風流を解してゐる如く讀まれたのであるが、怨めしいのは昨年も見たこの錦江に架設の工事半ばにして抛棄してある鐵橋の脚柱である。滬杭甯鐵路のこの興州、紹興、百官間は折角の枕木も堆積のまゝで腐らしてゐる。レールも腐蝕に委されてゐる。鐵橋の基礎工事だけは出來てゐるのに、あとはやりツ放し。借款の金は途中でどこかへ消えて今その責任者は代はつてしまつてゐる。どこを責めてよいか全くわからぬ。運河江上の水路があるのであるから鐵路は初めから不要なら不要としておいてよさうなものであるが、そこが支那である。實に錦江の鐵橋は幽

靈の形でいはゞ全くある筈でないやうなものである。

鐵橋といへば蘇江松江のあの長い鐵橋の一節をば過般の江浙戦争のとき框からレールから何から何までそつくり原型の構造のまゝで、

三町も離れた陸の田畝の方へと運び込んで置いてあるのを見た。取こはずと後で組立てる時の骨を見越したのか、支那でなくては見られない暢氣な運び方であると思つて、如何にも自分ながら心が讀めたやうな感じがした。この鐵橋の運搬にからむ裏面の魂膽は色々あることであらうが錦江の工事中止の方は見る目も誠に見苦しい。

轎班をあてにしてゐて要領を得なかつた張君のことは百官の朱象賢といふ人の話して最近歸杭して不在であることが明白となつた。自分はそこで正午の火車を待つ爲それまで三時間餘り錦江江畔の錦江春といふ茶亭で休むことにした。錦江春とは名は美しいが竹の柱に茅の屋根式の極めて瀟洒といふよりは掘立て式のものである。氣の利いた七八歳の女の兒に梅干式の老婆と二人だけで、竈を焚き初めたり湯を沸かしたりして自分に茶を請する。山の中腹だけに見晴らしがきき、錦江の流れに曹娥の野、遠山近峰新緑の装を見せ、義渡の船のあまた碇をおろして帆檣林立してゐるところなど一幅のよいパノラマである。後方の山に桃李の花の見えたるあたりをある

く。工程重地。間人莫入。とある。役人でもゐるところらしい。茶亭に歸り娘の入れてくれた茶を喫む。柱を見ると、

勤筆免思。以免爭論。

とある。茶を喫みに來た客の時々騒ぎでもはじめるために戒しめた語か、何だか意味あり氣に讀めた。やがて卓によりて窓外錦江々畔義渡の去來、船人の往來、里人の水汲み、紙の荷物の運搬、雜貨の集散、何くれとなく行人の活動するパノラマを見てゐた所が江岸の全線に互りひどく憐れさうな豚の鳴きさけぶ聲がしきりと耳を刺すやうに聞える。老婆にあればどういふのだらうと大抵わかつてはゐるが念の爲聞きたくして見た。老婆は、

「今、豚船が來てゐるから豚の積み込みがはじまつたのですよ、行つて御覽になられたらどうです」

といふ。いつて見るといかにも他の地方でやるとおなじくその四肢を十分に硬く縛り合せてその一匹づゝ悲鳴をあけてゐるまゝを苦力どもが肩にかついで陸から運んでいつては船底へボンと投げるやうに落として行くのである。幾十、幾百投げ込むかわからぬ。この豚は縛られる間、かついで運ばれる間、投げ込まれたときは随分苦しうに哀を乞うて悲鳴してゐるが、底に納まる

と括られたまゝ黙しておとなしくなつてしまふ。孟子が牛を見て惻隱の心を起したといふが度々見ないうちにはさうでもあつたであらう。しかし自分たちの如くかうたび／＼各地でそれを見せつけられると麻痺したかたちで全く左程に思はなくなる。ましてこれを運んでゐる苦力人足たちには一種の音楽にでも聞えてゐるであらう。

物も見やう一つで高い錦江春の茶亭から大觀してゐるときは人足たちのエーホー、エーホーの掛け聲とおなじ意味において豚の鳴叫も何だか全體としての支那らしい濁つた錦江の流水や船着きの景色や村民の物事に少しも頓著しない活きぶりなどによくハーモナイズしてゐるやうにも感ずるのである。それもその筈、美しく着かざつてゐる姉妹らしい丸顔の女がふたりして、一本の天秤棒をかついで來て、水汀にヨチ／＼降つたと見ると桶に一パイその濁水を汲み込んで陽氣さうに二人でまた休み休み坂を上つて運んで歸る所が目についた、これを飲料水にしてゐることは錦江春の婆々もあの美人だちも皆おなじことであるのである。

十、蘭亭に遊びて曲水の今昔を比較す

蘭亭の位置は、王羲之の風格を追懷せしむるに最もふさはしい浙江の田舎、閑雅幽邃の山峽に

ある。之れをかの 柳先生陶淵明の廬山柴桑里、醉石の閑雅幽邃なるに比べると其趣がやゝ異つてゐる。柴桑里には陶氏の子孫と稱する小廬が二軒ありて互に總本家を争つてゐるらしい。が兎も角も子孫はゐる。その醉石の景趣、刻文、また溪谷より仰ぎ見らるゝ小瀑布の小音、すべてこれ隠者的で山月の風格をば十分に偲ばせてゐる。之に反して蘭亭の方は此に王氏の子孫こそ居ないが、山陰の峰は廬山ほど高くもなく山峽も相當に濶く、其の地勢と云ひ規模と云ひ王右軍の清遊の境地としては恰好の所といひ得る。蘭亭の境内は例の溪流を涉り綠蔭を右に見て、正面に進めば『蘭亭』と正楷の大筆金文字の扁額を掲げられたる樓門がある。見るからに雅趣に富みたる古代建築のスタイルに出来てゐる。門を入り左へ折れて梅林の間を行くこと數町『鷺池』の草書の刻碑がある。碑亭のうちに納められてあるのであるが、手拓の跡甚だしく殆ど漆黒剝落せる所も見えてゐた。

碑亭の奥梅林庭園の正面には寶亭がある。乾隆帝勅額の御書『流觴亭』と云ふが鮮かに仰ぎ誦せられ又亭内高く『曲水趣歡處』と五大文字の扁額が光つて見えてゐる。左右の柱楹は氣高く之に長聯の懸かりて奥ゆかしく、その光彩を添へてゐるものがある。聯に曰く

寄傲林邱三春陶和氣。

散懷山水千歲挹遺芳。

とその右軍の遺芳を偲ばせてゐる所に盡きぬ千古の餘韻が認められてゐた。寶亭の飛檐は甚だしき反を空に示して靜寂の悲境に一段の清香氣分を漲らせてゐるが、更にその向かつて右方曲水の流れに接して樓閣の飛亭が聳えてゐる。境内建築美の呼物となつてゐるものである。先に溪流を隔て、綠蔭の影からその飛亭の屋根の尖端が認められたのはこの樓閣であつたのである。曲水の水はこの飛亭の後方山陰の北麓より滙流し來たり、劃然直截極はめて深く作り成せる溝渠を縁一パイに流れ今もその溢れん計りに勢ひよく湛走つて更に又右へ折れてゐる。その色紺碧。洵に豊富、潤澤、清冽の情緒を起させてゐる。

石橋を隔て、右方は更に二梁の堂宇破風を接して曲水の、ヘリを劃し並んで居るものもあつた。かくして境内竹林、梅林の蔭には六、七宇の樓閣榭亭を數へることが出来た。固よりこれとても晉代千有餘年前の當時の佛をどの程度迄傳へてゐるかはよく判らぬが、何れにしても其の曲水の路は山陰溪流のS字形に滙流せる自然の水勢を利用してゐるらしいこと丈は今も明らかに推測せられるのである。朝鮮の慶州の鮑石亭の遺蹟の如き、もと山陰蘭亭の故智に倣つたものであることは人のよく知れる所であるが、斯くの如きものを以てしては殆んど此の曲水の片影にだも似かよつた所を見出すことの出来ないことを知つたのである。

次にその流觴賦詩の清遊の場面に就て考へて見るに、自分の實地に親しく見た曲水の流勢からすると、羲之の催しをやつた時代は水勢が今少しく徐々に緩やかであつたものではあるまいか。と云ふのは、當時境内の水面を流れ來たれる幾多の酒盃がそれ／＼群賢の席の前に餘りにあわただしく速く到着し來たつては吟詠の暇も何もあつたものでない。罰盃又罰盃と續けさまにやられたにちがひない。今日の曲水の流れは誇張して云ふと四川三峽の水勢のその如く快速力になつてゐる。これでは電光石火の如く詩が口を衝いて出たとしても詩箋に認める暇もどうする間もないだらう。殊に文人のあの執筆、運筆の構へから想像して見ても、こは日本の芝居で三くだり半など立つて居てスラ／＼一氣呵成にやつてのけるあの式には參らなかつたであらうと考へられるからである。

曲水のスピードの研究理窟を足るほど列べて、それが濟むと後庭林間の綠蔭を探り山陰の麓、山畝の間にさゝやかな小隠を訪ねて見た。百姓のかみさんが針仕事をしてゐる所であつた。張君先づ口を切り暖が取りたいの茶を請ひたいのと思ふ心のまゝを云ふ。そばにはふたりの女の兒のゐるのも見えてゐた。が優しいかみさんと見えて「さあどうぞ」と却々愛想もよろしい。話のうち「子供さんの名前は」と軽くやつて見ると、上のが沈秀英（十一歳）小さいのが沈桂英（七

歳）と云ふ、かみさん流石に字もよく知つてゐて文字の即答も出來た。いかにも蘭亭山陰の農家だけあるわいと珍らしく思つた。上のが十一歳ならうちの文子と同じだなど、たわいもない話を續ける。小さいのに向つて持ち合せた甘い物、紙包のまゝ張君から與へようとするに、桂英はにかんで母の膝もとに行つて了ふ。可愛い唐子のやうである。姉の秀英は一バシ早や豆がらで爐に湯でも沸かしてくれたらしい。ゾオ、ゾオと茶の方言訛りを發音してゐたのであるが熱いところを出してくれる。煙い薄暗い蘭亭の農家であうして自分共は心あたゝかいお茶を頂いたのである。小さいのもそのうち狎れて來て一緒に甘味の一つも摘むやうになり母子諸共五人、氣のおけない間柄の團欒で爐を圍み、蘭亭年中行事の事から遊歴家のことや正面は石橋の流れであるのでどうも危ぶない藝當で、又涉らなくちや歸れないなど色々の物語りに暫し耽つてゐるうち、こちらの體も大分暖まつて來た。張君は「行かうか」といひ出す。子供の狎れて來る時分には行かなくてはならず名残り惜しくも思はれたのであつた。かくて挨拶をすませ梅林の間まで見送られて別れた。飛亭をあとに再び驢夫の背にすがり水を涉りて馬上歸路についた。樓公の田舎飯屋で年糕油菜湯と老酒ラオチウに再び暖を取り、船頭の待ちくたびれ寝てゐる所を可哀相であつたが呼び起し、これも中飯は夙くに濟んだと云ふので、それでは歸りの舟行は南へ十支里迂回だと例の夏の禹王

の臨終地と傳ふる禹皇殿（地名）に寄航大禹廟を拜し又穴の穿いた妙に滑べつこい大孔石を撫て謂はれを聞きなどした。

かくて一日の史蹟めぐりに幽情を暢叙し得て紹興東郭門をくゞり、薄暮五點鐘と云ふに紹興旅館の仕官行臺に歸りついたのであつた。

十一、雪中月牙池雅宴の好印象

紹興旅館は『仕官行臺』と自ら大官御用宿を以て任じ、氣位高くきめ込んでゐる位だから、體裁、設備、部屋、客廳、番頭、手代、夥計（ボーイ）すべて氣がきいてゐることは無論だし、そのシステムも悪くない。

田舎城内の宿としては指折りに數へても少しも恥かしくない。部屋は廣い二人部屋であつて、寢臺、卓、椅子も結構であり、電燈も明るいのが點いてゐる、客廳には大きい置時計、壁に對聯、鐵畫の四君子、蘭、菊、梅、竹。左右に十景椅子、中央には仙菓と到れり盡せりである。而かも房金、小賑、被褥、電燈、茶房すつかりで『貴衆同伴貳位住貳天』と、つまり張君の分をこめふたり二目で、たつた洋貳元捌角四分、これは銀のターヤン大洋二元四角だから日本金の三圓そこ

そこにしかあたらぬ。もとより料理は別であるが、兎も角支那の田舎宿ではこの邊が上乘の部である。

しかし支那宿につきもの、露旅の感とか商女は不知、亡國の恨といった様な哀れつほい情緒のこゝに見出だされないせるでもあるか、どういふ譯か餘りきちんとした仕官行臺は田舎らしき風情を味はふ上から少々物足りなく思はれたのであつた。けれども蘭亭歸りのその日は幸ひに張君の友人の既に留守中から來て待つてゐるのがあり、その君が即吟七絶の詩を草して見せるとか城内の有志がたづねて見るとかで親しみの氣分は旅社にみなぎり相當面白くまた忙はしくもあつた。そこへ以前船中で懇意になつてゐた青年平徳福といふが先約によつて車で迎へに見えた。

平 先生

「小廬は紹興城内は月牙池であるが今宵うちの老父が心ばかりの小宴を開き御一緒に趣味文字談を語りたといつてゐるから是非今からどうぞ」

「實は正式に紅紙の招待狀を何する筈でしたけれども何分急な思ひ立ちのことです……」

と心持ちのよく讀めた好意に張君同伴、からだを任せて月牙池へと案内される。ところが城内運河、大小水路の縦横無盡、それに架せられた旗橋のおほいことく。ものゝ一二町も鋪石の狭

い路を曳かれていつたかと思ふと降ろされる、降ろされたかと思ふとまた乗せられる。石の段々を高く上つて行くのでとても車が曳けないのである。運河からいへば舟行に便するためアーチの旗橋にしないでならず、路行く人からいへば不便厄介はこの上もない。南方支那はそれだから小舟で動くに限ると胸のうちでは切にさう思つてゐた。或ひはまた轎子かなども考へてゐたが、平君の手前理窟を今列べる時でもない。壁高く聳えたる門扉を入り部屋にいきなり通される。家廟に祀る祖先ふたりの紅衣と黒衣の肖像が大幅にして正面に高く掲げられてゐる。色々の供へ物に貢燭花屏などいふも更なり、づつと上には墓表の拓本まで神々しく寶藏されてある。やがて嚴父、母堂お揃ひで席に見えられ、徳富君を間に入れてねんごろなる挨拶のあつた後、紹興の古老として追舊談やら古書畫に關する趣味談があり、近代人の畫幅三四十點の展觀さへ催され、水墨を特に愛賞せらるゝ風流韻事の閑話など殆ど盡くる所なく、そのうちに湖筆徽墨臨池の餘技も初まつた。興に乗じ翁の趣味に感じ今では何をものしたか覚えてもゐないが、兎に角その日ひるは蘭亭曲水の清游に浸り、宵はこの清宴を名前も懐かしい月牙池の鶴莊に催されたことゝて『奈斯良夜何』と計り古篆か何かでその快感印象の或部分をせめてもの記念にとて蘭亭のほとりに紹興月牙池にわが恥を残しておいた次第である。

田舎の昔ながらの支那住宅のことゝて、部屋には別に暖房の設備などはない。家人何づれもただその羊毛の筒袖の長きを拱手してゐるだけで、それで何等冷を覚えることもないらしい。これは北京、北支那方面も江南のこのほりも變りはないのであるが、自分はどこにいつてもいつも脚爐をもとめて僅にこれで凌ぐ習ひである。この日の寒さにもこれを求めてゐたのであるが、老爺の君のその脚爐一つだに必要としてゐないらしかつたのは營に油つこい料理からくる勢力ばかりでもあるまいと思はれたのであつた。異境に翰墨の清談に耽つてゐるといつ盡きるとも、時を知らない。そのうちに夜もふけ、月牙池の戸外墻界、雪は紛々紹興城内橋上白皚々裡に埋められた景趣の中をおくられて宿に歸つて來た時は、さすが仕官行臺の門前街頭家もすべてこれ銀號をつらねたるかの如く電燈に照されて誠に美觀を呈してゐたのであつた。

かくて紹興の情緒はその蘭亭行といひ、また月牙池の雪中脚爐の印象といひ、過ぎにし春の清游の思ひ出はなつかしさにたへられぬところがある。今も尙平先生との消息は絶えないのである。

十二、江南の田舎に見る實生活の裏面觀

支那の田舎の情緒を帯びた實生活の中で日本人の最も苦痛とし、支那人の最も平氣でゐられる一問題がある。君子は自重してこの謎の問題を餘り露骨にはぬ習ひになつてゐる。が併し實際の支那文化の研究にはこれをオミットする譯にも參らぬ。そは抑も何であらう。

自分は各省各衙の都鄙の支那住宅、殊に田舎の土豪などのうちで、それに接する時は努めてその正面觀察のみに止めず、時と場合の許す限りは住家の内部や後門の方に廻つて見て、その實況を視察する。そこで今まづ後門の楹聯の文字の方から見ると、例へば次ぎのやうのが見られる。

庭餘安樂福。

門掩太平居。

といったやうなのがあるかと思ふと、また藥園、柴門のことなどを却々うまく表現してゐる佳句もある。即ち

藥圃茶園爲産業。

柴門草舍絶風塵。

半ば浮世ばなれをしたことを詠じてゐる。或ひは幽居を氣取り身を全く浮雲の外においたやうな心持ちで書卷柴門を詠じてゐるものもある。

書卷莫教春色老。

柴門不爲俗人開。

また門に俗客なく古人の書を読むなども云つた様な、洒脱な紅聯の對子の貼つてあるのがあつた。支那は都鄙共に文字上の遊戯は手に入つたものである。通りの辻横町などに「君子自重」の貼紙を以て一定の約束ある意味（小便無用の類）を表示せるその呼吸に至つては例の行人民衆心理の面子を重んじた最も巧な行き方である。支那人心理の利導はかう云つた式に行かなくつてはならぬ。然るを旅社の壁等に如何にも教訓がましく露骨にも坑廁表はすを得ず、廟宇撤するを得ず等とあるは餘り賢い表現法といへない。杭州西湖畔の勸工場には「小便請進一步」とある。設備がある丈まだよい方である。想ふに支那では其可なり立派な土豪の邸宅で、その何一つ不自山のなく、設計せられた堂々たる殿堂作りのうちであつても大抵の住まひは、その主人公の教養に餘程の新し味を帯びてゐないかぎり一ヶ所だけよく抜かつてゐる所がある。時には主人の道樂趣味から萬金を投じて竣工したと得意に説明される。その建築にはなるほど立派な五彩の唐草模様まで飾付けられてあつたりして、表面一寸見た所その輪奐の美に眩惑されるやうなものもよくあつた。そこでどうかすると、その主人の好意からそこに滞在し客堂の一つが自分にあてがはれ、そ

して物の一兩天も宿泊して見ることもある。すると忽ちにしてその一件で以て實に不自由を痛切に感ぜしめられるに至るのである。

支那の中でも北支那の田舎の宿屋にはその設備の缺如せるものが殊に多い。缺如してゐても平氣になれる位でなくては物にならぬぞ。と評する人もあるやうではあるが、元來こは空氣の乾燥せる所などでは直射されるから、すぐ砂ほこり同様に消えてしまふ。その實景を自分は確めたことも幾度かある。また北部の田舎では牛のは壁を塗る時の塗料に混じて有用に供せられてゐるやうであるが、萬物の靈長の方はまだそれ丈のことは聞かない。また江南から浙江方面へかけての土俗では四人でも五人でも路に面して同時に同じ方向に椅子にでも凭つてゐるやうな恰好で、互に顔と顔を見合はしながら四方山の話しや冗談など語りつゝやつてるといふ暢氣な態度も見られる。勿論またその前を通りかゝつた近所の農夫とでも、また自分の親兄弟とでも人をえらばず氣兼ねもなく、また失禮といつた氣分は更になく各自自己の行くべき道を行つてゐるといふ心事であるのである。

蓋し吾人は彼れ等の三人、五人が長江の大錢塘の雄をながめつゝ、一列に並んでその行くべき道を行つてゐる堂々たる景趣に現實に出くわしたときは、その光景は全く支那大陸文化の偉觀とやいはんと評したのである。若しそれ江上民船の上にて船頭の大自然を擁して演じてゐる時の如きは更に一層その徹底して眺めであるところを見たい。その朝に夕に船頭のかみさんの飯の支度に汲む水の味などもその全くの現場を見てゐたあたまで思ひ出して見るときは随分慣れないものを驚かせるのである。

日本の如き小さな川や狭い港内でこそ、それが神経質にも批判せられようが、一つ太平洋に乗出したものとしたならば一々聯想にも上つて來なくなり、またさまで刺戟も受けなくなるのであるから、いはゞこはたゞ程度の問題であり習慣の問題たるに過ぎぬ。支那の人士にいはせると日本は晝寢のときなど平素腰の下にのみ敷く座蒲團を折つて、よくもあたまに敷いてゐる。これいかにと詰り、また浴場でたつた一筋の手拭で體の上下を洗ふは、これまたいかにと來る。この話しは自分の屢々例にひく談柄ではあるが、要するにかうして日支兩國民間は唯互に自己を基としてそれ々々他を批評してゐるのである。支那から觀た日本の實生活の内容のうちには、まだもつと大きな不自然な缺點もあることであらう。吾人は讀者の判斷にこれを任せて、こゝには唯支那の田舎に見る文化の實生活に入りこれが情趣に接するに當つて最も痛切に感ずる問題として、これをこゝに文字上遠慮しながら婉曲な形ちで提案した次第である。

十三、江山萬里を脚下に王陽明祠堂の龍山に登る

浙東文化の観る可きものは甚だ多く今はこれを到底二回や三回の漫遊で盡さるべくもない、會稽山を中心として考へて見ても紹興、蘭亭、禹王廟の外に東湖精舎の懸崖の名勝地がありユウヤオ(餘姚)の龍山に王陽明先生の王龍山公祠の靈址等がありまた甯波甬江を中心には慈谿に三國吳の相宅(今の法王城)の蹟やら和寇の故蹟また范氏の天一閣書庫の跡に錢江街があり又天童、育王の兩禪寺に東錢湖があり舟山列島の普陀、洛珈の名山がある等實に枚舉に追のない位である。或ひはまた民衆文化の方面のものとして麻雀トランプの歴史起源でも調べる上には陶公山島の漁樵の情緒を理解する必要もある。或ひは交通運輸の方面の文化については例の青雀舫の畫舫の外に一般にチエーワチュアン(脚划船)と稱せられてゐる小舟のあることも面白い事であるが甯波人がその商業種族として全國に覇をととなへてゐる以外に更にまた航海の種族として普く優に支那沿海一帯の實權を掌握してゐることなど實際方面に對しても頗る注目に値するものがあるのである。

されば浙東の天地は錢塘江以北の杭州カーシング嘉興、湖州(吳興)や莫干山、嚴州あたりの文化に比して優るとも劣るところなき優勢なる地位を占めてゐるものであるとも評し得るのであ

る。また浙江全體の文化史の上からは支那墓陵の形式の研究にはこれが頗る貴重なる材料を提供するに好都合のところにあるといふことも考へおくべきことであると思ふ。

若しそれまた日本と浙江省との文化史的關係については吳の太伯の昔話しまでには遡らなくとも空海を初め奈良朝當時の日本の遣唐使の上陸地點が今の甯波の地にあたれることを考へて見る丈でも頗る緊密な因縁をむすんでゐたことを想像するに難くない。

されば甯波文化の研究調査の影響するところは實に至大であるといひつべきである。殊に自分が視察の上から感じたところによれば浙東の地は日本とその風土人情のよく相似かよへる所があり従つて日浙互に相近接し合ふの便益もおほいかのやうに察せられる。たゞそのチャンスを作ることの如何によつてそれが實現せらるゝものであらうと考へられるのである。

浙江の地理文化は何となく親しみが深い。自分は浙東漫遊の途次張君の心あたゝかい愆愆により百官、驛亭、五夫、馬渚と江南氣分を湛へた諸車站を過ぎて、蜀山の手前なるユウヤオ(餘姚)におりたのである。張雨耕君初め葛永齡、陳保安、張暨年氏等文字ある人士に城内田舎氣分の濃厚な水郷、江上の景趣を紹介されたる後共に相携へて陽明先生の龍山に上り浙東の平野を俯瞰し江山萬里の春色を賞し王龍山公祠に詣うでて陽明先生の神像を拜しそゝろにその神徳を敬慕した

のであつた。かつて山東曲阜に孔子廟を参拜した際山東の民衆教化と孔子廟の膝許とが餘りに懸絶してゐる全然別物なるかの感を起こしたことがある。思へば聖賢の廟と社會教化の問題とは必ずしも今の支那では一致渾一の状態になつてをらぬ。その間に密接なる因果關係でもあるものと思つたのが誤りなることに氣着いて見ると王陽明先生の龍山祠堂を参拜するに當りても相濟まぬ譯ではあるがどうせ要領のよい俗衆の世間であるからといつたやうな穿ち過ぎた情緒の閃きが自分のあたまに來るのを禁ずることが出来なかつた。しかし例によつて扁額對聯の文字は實に見事なるものがかゝけられ殊に「垂裕後昆」の四大字は肉太き楷書にて同治丙寅の邵日濂の書として立派に拜せられ、その扁額の下には朱顔の龍華山王先生の坐像が高く安置されてゐた。また天井高く「名世眞才」並びに「古之不朽」の兩扁額にかゝけられた正面の大室に進んで見るとその神位の文字は正楷にて莊重に、

明贈新建侯原任新建伯南京兵部尙書兼都察院左部御史王諡文成陽明先生位

と書かれ青顔の陽明先生の神像が神々しくそこに高く安置せられてゐた。その印象は今も目のあたりに拜するやうである。そして像の前には餘姚の權知、胡爲和の謹撰とある光緒卅年甲辰孟冬月穀旦の對聯などこれも筆蹟見事に拜せられたのであつた。しかし自分が龍山に案内されて文

字の筆の方で一等神韻を感じたのは頑廉儒の「山高水長」の扁額と王家五十九世の孫王承漢の筆に成るその文字であつた。即ち、

(右)奉勅祀龍山五族並傳萬古垂竿釣舜水兩坡權作雙堂。

(左)帝求賢同商陽周武公避世異釣渭耕莘。民國九年秋月吉旦五十九世孫承漢敬立。

であつた。途上聖賢の遺墟を訪ねて來てかゝる文字や神像、廟宇、展望の末にのみ拘泥してゐることは濟まぬ事であらうが、民衆の後昆、教化の影響に關係深き點より見れば廟に上りてはこれ等諸條件に注意して見ることも矢張りその地方文化の考察を遂げる上に忘れてはならぬ點であるまいかと思ふのである。

十四、門前市をなす土豪名家の家廟宗祀

龍山公祠を下りその日、浙江餘姚の知縣、陳國材先生をたづねる積りであつたが、不在のため一行と張君の友人陳子莊君を城内にたづねた。門聯を味はつてゐる暇もなく、いきなり客廳をぬけて居室に通される。お定まりの調度、卓、椅子、寢臺などよりも壁に掛かつてゐる母堂の肖像畫額、花瓶の香花に胡弓の一竿、卓上の文具などが目につく。何くれとなく所狭い所によく

も集められたもので、そこに面白味もあり、家庭的の親しみも溢れてゐた。そこへ陳君の老母や少女（十歳）なども會釋の爲姿を出しに来る、熱い茶が配られる。

日本の話しを聞かれるまゝに、浙江の村と似たところを二つ三つ答へて見た。そのうち、少女は甲蟲の美しいブリキ製の玩具をこちらの卓上に持つて来て見せる。（日本做的）だといつてよい音をさせて見せる。成程、色のかけ工合に出来鹽梅がどう見てもさうだ。まぎれもなく日本來的である。また卓上を見ると、黒塗りのブリキ製の茶壺の罐がある。まぎれもない半斤入り圓筒で、秋のすゝきに月をあしらつた繪まで這入つてゐる。浙江の平和な山村水廓には、かうした日本品がいくらかも流れて來てゐる。その室の一隅に見える置きランプも、その姿や口金のところなど、これも違ひない、偶然こゝで見つかつた物だけでも既にこのやうにある。日本人の文化は既にかゝるさゝいな物によつてこゝの田舎に取り入れられてゐることを知つた。少女、水郷嬢の要求があつて誰がひくともなくこゝに胡弓や笛で童謡鄙唄の曲趣がはじまつた。土地の點心、果物に二度目の茶もそゝがれた一曲がすむと又一曲。九連環など日本人に親しみのある曲も奏でられた。奏演場にあてられた、この居室はどうも晝でも光線のよく差し込んで來ない部屋ではあるが、これが若し夜分薄暗い楊柳の江岸竹山橋の袂で、も催されたのなら如何ばかりか情趣を唆

るものがあつたであらう。

われ／＼が胡弓のやはらかい雅曲の聽取に餘念なく、茶など喫してゐるうちに別に麻雀でなくては夜も日も明けぬ手合どもは向うの卓を圍んで既に『一萬』『九萬』と骨牌をバチ／＼取つたり出したり可なりはしやいでゐる。あれで晝を晝について二日位ぶつ通しにやるのであるからうっかりははひれぬ。社交には上乘のもので弊害さへ心えてゐればよろしいのであるが、まづ／＼九連環の方が間ちがひがなくてよからうと、音曲組は水郷少女を中心にこちらでもまた相當はしやいでゐた。

やがて竹山橋へ歸らうと、歸途城外に差しかゝるとその邊は大變な人出で、引切りなしに群集が動いてゐる。聞けば土豪、邵氏の宗祀祭りがあり、邵家ではあらんかぎりの家寶重珍を陳列して一般の展觀に供してゐる爲門前かくの如く市をなしてゐるのだと判つた。

支那の田舎で家廟宗祀の祭りにはこれまで屢々出ツ喰はしたことはあるがこれはまた格別である。人波に押され押されて門内を第一門、第二門、第三門とは入つて行く。奥まで五六十間もあらう、中央を長く廣く臺に作つてその左右紫の大紐を張り手を觸れさせない様な設備が出來てゐる。その臺の上には幾十の屏花、幾百の飾り菓子、果物に幾千の硝子、水晶、瑪瑙の彫刻、木彫

人物、山水、焼き物、堆朱、錫物、古銅器、銀器、芝居人形、玩具、文具、調度、衣裳、武器、書冊とあらゆるものを寶庫より持ち出し整然とならべてある。また天井の幾百千の彩燈には瓔珞がさけられキラ／＼と目を奪ふ程、そして左右の兩壁には新古の書畫扁額の名品、祖先の鹵簿用の儀仗など飾り付け、東廡西廡いくつかの廊下の傍室を休憩室にあて、椅子には悉く紅綢を被ひ卓には深く緞子を打ちかけ大聯明鏡をかゝぐるなど實にどうも大變な仕掛けである。全部奥まで這入つて見るとその正面の奥には祖先の神像に累代の尊像をかゝけてこれに供物を捧げ左右に見張りの番人が番臺の上から押すな押すなの拜觀者群集を目を光らせて見張つてゐる。重寶のうち目星いものゝそばには必ずまた見張りのゐるのは當然である。その見張りの前に日本の九谷、武者繪の大花瓶が一對珍什の部に頭角を現してゐたのはなつかしかつた。また壁の書畫のうちには土地が土地だけに王陽明先生の大字の扁額に侖曲園の書幅、潘祖蔭の珍幅と注目すべきものが少くなかつた、無論東坡の寒食帖（乾隆雪堂餘韻卷）だの、王羲之の九月十七日帖のやうな天下の珍中の珍といふものは、たとひあつてもかゝる展觀には出さう譯もない。

邵家當主の名は今失念したが、譜によると十六世の舉人、祖先以來世々學者のうちで『進士及第』の扁額も門内各所に飾られてゐた。餘姚の城内にはその土豪名家でなほその頃徐氏宗祠にも

またおなじやうに祭祀が舉行され、展觀も催されてゐた。約十日間位の會期でこの催しのために門内門外市をなし界限は景氣立つのであるから子孫榮ゆれば必ず時にこれを行ふ。日本でいふ、縁日か酉の市が立つやうな恰好であるが、かくの如く宗祠の祭典の行はるゝところでは邵家徐氏にかぎらず總てまたこれが城外、墓陵塋、並びに牌樓旌表等の保存修營の事と相待つて支那地方文化に底力のある精神を吹き込み祖先を尊び後昆を刺戟するの空氣もこれによつて養成せられつつあるのである。海外萬里の異境に華僑として出かけていつてゐるものも子孫あらば宗祠の盛事を行ひ、家名の面目を擧げんとの情は頗る切なるものがある。

十五、石人石馬を背景に竹山橋下の景趣

塋域の前に石馬の突つ立つてゐる景趣が味は、れるなどといへば日本では物珍らしく感ずるだらうが、支那では城外ののんびりした廣い陵墓にいつて見ると屢々この光景を見る。現に浙江餘姚の郊外竹山橋畔の墓場を逍遙中、その古色、様式、大いさの實に見事なのが發見された。石馬の外に石獅があり石羊もあつた。約八尺大のもので各一對宛整然と南面して陵道に列んでゐる。他の多くの例からすると尙文武の石人が一對宛ゐるた筈であるが何處へか運び去られたのであら

朝鮮平壤の箕子陵を参拜すると古色蒼然たる石人、石羊の並んでゐるのを見る。或ひは北京北郊、明の十三陵、南京孝陵の石人石馬昭陵の六駿馬といったやうな出陵偉觀の雄物たるそれらの各地に見王ださるゝは世人の夙に熟知せるところである。また山東濰縣城外畎畝の間にも雄物の片影二駿馬の隠れたるを見たことがあり、杭州西湖畔龍井の石人石馬に甯波西郊、江蘇、松江、閩行の田舎など自分の遊歴中目睹せしものだけでも随分な數に達してゐる。支那古傳説に従へばこれらの風習は初めその葬られたる亡き君公の遺徳を慕ひその英靈に感ずるの餘り文武百官はもとより駿馬、小羊に至るまでが、爲に愁傷の情を盡くし悲哀に暮れてゐるところを象徴せんとて建立せられたものであるといふ。上海ゼスフィールド公園前に移し來たれる駿馬などは、既に陵前の意味を失つてゐるが、要するに隨處の石人石馬は當初の原義がそこから出發してゐると見て差支へなからう。南口十三陵の如きこれに石象、石駝石麟の異獸巨像の數多加へてゐるのも王者の陵域にふさはしい。浙江方面に見るものは多く土豪といふよりは地方大官の陵墓の跡と思はれるものであるが、石質の砂岩または凝灰岩なるものがあり、大理石なるものがあり、中には風化作用を受けて見るに堪へなくなつてゐるものなどもある。然るに竹山橋のそれは様式彫刻の勝れ

てゐる上に質が青石(大理石の土語)で保存もよく出來てゐる。無言の石彫は無限の情緒を兩眼に湛へてゐる。自分は永久平和の象徴としてこれを見たい。また實際これが浙江の水郷に、どこまでも平和の趣を添てゐるやうに思はれた。空橋をへだて、運河の岸近く茂れる竹林は綠未だ淺けれども江上にたはむる、白鷺の景趣清くあざやかに、薄暮橋畔にひとりたゝすみて遠く黄金の色に染分けられた會稽山の空を望めば、雲か山か、水光天に接するあたり、孤帆遠影、夕照を負ひて動くが如く動かざるが如く、浙東夕照のパノラマは實に大きくてまた麗はしい。水色の支那服姿で張、葛、陳、淘の四君廬外にありて江上の船頭を呼ぶ聲も高く頻と問答を初めた。橋下、江山漁舟の風情、全く倪雲林の畫趣以上の文人畫題である。

たそがれ、廬後に老婆の念佛らしき唱聲の引切りなしに聞こゆるに引かされ張君の『あれは村の觀音廟で』といふを更に興味深く詣で、見る。暗い廟内奥深き所に燭光を列ね點じて善女の七八人、老婆老媪の耳と額とを入字なりに蔽ひ飾れる出揃ひが一行に横に並んでわき目も振らず手も舉げず、南靡薩ナモセ、南靡薩ナモセの念佛に餘念がない。見知らぬ日本の善男の詣で來たれるに氣付いてくると空念佛でもなかつたであらうが、一時にパタリと聲を止め、こちらを見てニコとほゝゑんでゐるた媪もあつた。廬に歸つてからも暫しは念佛の聲が耳朶を打つてゐた。その念佛は耳に這

入つてゐるがこちらでは猪肉たつぶりの田舎料理で開飯がはじまつた。田舎の精進もよいが普通のもまたよい。殊に田舎の中での田舎では何を採つてゐるかは興味のある問題である。材料は筍(筍)豆干、猪肉、開羊、辣、時魚などで飯は例のバラついたためし、これに日本流の醤油なども出されてゐた。日本では料理屋の支那料理のみしか判らず、それから判断して何處の家庭でも支那は皆あの式かと類推する傾きのあるは無理もないが經濟と榮養第一主義で行く支那ぢやもの、どうして抜かる筈があらう。田舎の平時は質素で淡泊で有のまゝの文化生活を現してゐる。

王陽明先生と張君のお蔭で餘姚の數日を暢氣な視察清遊に費し得たので愈々豫告の通り明天は立ちたいがと切り出すとむきになつて皆が反對する。一定かといふから屹度だと鸚鵡返しをやつて見たがいつかな承知してくれぬ。折角の好感に平和な氣分をスポイルして立つのもどうかと思つてゐたところへ、餘姚の文人墨客の雅催も開く豫定にしてゐるからなど柄にない文人扱ひで心配して呉れてる様子が讀めた。なほ更大變だとはかり樽俎折衝に却々の骨である。止むなく何か記念をと請はるゝまゝに卓上の貢箋をひろけて、

十年湖潮三杯酒。萬卷詩書一布衣。家無俗累身輕似葉。室有佳人心不羨花。一船書畫米襄陽。
萬頃波濤黃椒度。

とない智慧をしほつて古人の句を草しお茶をにごす。ところが元來持つてゐぬ筈の判子を擦せよといふ、見れば餘姚の篆刻師に頼んで早この通り出來て來てゐると出て出された、これには哄笑一番。その翌、古老の文字ある大人どもと盡きぬ歡をつくし韻事を談じ再遊を約して矢張り定めぬの如く立つことが出來た。その後張君の來信には常に「……爲念正切馳思」の語を用ゐてゐる。お世辭も半分はあらうが自分も衷心すまぬことをしたといふ氣分が未だに胸に残つてゐる。

十六、清明の佳節慈谿山門に禪僧を訪ふ

雨の景趣は南方にかぎる、春雨紛々、江南新緑の楊柳にしつとりと來たその情緒はとても北支那では味はへない。天高く馬肥ゆる秋の大景が北方にかぎるが如く、蕭雨の洞庭、楚水、吳山にかゝつて白雲生ずる所、奇峰の一角を望むといつたやうな潤ひのある景色は南方でなくては他に求められない。唐詩、杜牧の詩趣のうちにも、

清明時節雨紛紛。路上行人欲斷魂。借問酒家何處有。牧童遙指杏花村。

とあつて路上の行人をして清明の春雨が随分やり切れない雨だなと斷魂の思ひをさせたことを歌つてゐる。杏花村が南京金陵だとか、ないとかいふ話しも耳にしてゐるが、この詩の意は江南

一帯にみなぎつてゐる春雨の情緒をのべてゐるものだと見ておいてよからう。

杜牧の詩の雨の情緒は、今回の江南漫遊中、あだかも清明の佳節雨紛々の最中江南にゐたこととてよく體驗が出来た。路上行人欲斷魂などの支那一流の警句は、寧ろ千歳後の帝都路面泥濘深き所の路上行人に適切な皮肉とも見るべきものであらうが、しかし江南の降りみ降らすみの糠雨の長いことも相當行人に苦痛を與へてゐるのは事實である。江南春雨の情緒に就てはこの唐の杜牧の遺風を汲み杏花村の旗亭にでも納まりながら酔餘、雨を聴くのも一策であらう。また江上舟に棹して小雨、四ツ手網の揚げおろしに餘念なき漁夫の景趣を見てゐるのも悪くない。併し自分は春雨、山寺を訪ねて雨を聴き高僧と清談に耽つた時の情緒を最も懐しく想起する。昨春の事であつた。甯波の田舎、慈谿の城外に山寺がある。普濟禪寺といひ山の麓、慈湖上に倒影を映じ、山紫水明、畫のやうな禪寺である。鄭君の東海、雨中新緑の間を行つてこれを尋ねた。山門の對聯古色を帯び風韻高き筆蹟にて『古吳相宅』『今法王城』何公旦敬書とあり、また壁上の題字の『湖山生色』の四大字の大きく出でゐるのは殊にその景趣に痛快味を添てゐた。境内に入ると老樹の下、開山當時の遺物とか傳へらるゝ開成年間の經堂の片影の現存するは古時七塔のありし昔の韻趣に一段の潤色を添へてゐる如く眺められた。また階を上り右方天王殿の楹柱に、千年の白

骨今に至るも淨體尙香をとゞむなどゝある。青蓮の眞跡を瞥見しつゝ、樓に上りて方丈に通され定法大和尚に鄭君の紹介で面晤するの機を得た。江南の巨刹天童育王の兩禪寺に廬山の東林寺虎溪三笑の話など佛寺行脚の清談を語り合ひ東都震災の慰問から水野梅曉師の再遊談に常盤大定師不來の事まで溫容に笑みを湛へつゝ、親しみ深き禪門の高話、頗る傾聽に値するものが多かつた。雨を聴きながら禪僧と山寺に問答に耽るは人間清香の氣分を向上せしむる上に頗る望ましいことと思はれたが、時がないので再遊を約して山門を辭し去つた。

今年春、清明の佳節（舊三月十三日）をトし山門入りの再遊を思ひ立ち甯波の客中鄭君、若林君等を語らひ雨餘また慈谿に出掛けた。慈谿城内では、市井の巷に濃緑の蓬餅をいくつとなく鍋上に列べ焼いてゐる老婆をながめ鯉魚大藕に日本産の鰲（シホジャケ）などひさける賣買人の市場の間を通り抜け城門の牌樓のわきに石獅の雄物をわざと壁中に嵌入せる没趣味な支那工事につき批評などしながら城外湖亭の眺めに昨年春雨潤色を思ひ出だしつゝ、山門に向かふ。今年はその日は雨後の霽れでめづらしい遠足日和り、湖畔に紫紺の旗押し立て、小學生唐子の行列の繰り出ださるゝを見たのは可愛かつた。山門の題字われを迎ふるに似て懐かしく天王殿堂、中庭、けふの清明節の祭典奏樂に山僧檀家のにぎはひといつたら殊の外盛大を極はめてゐた。昨年も會

つた寺僧良慧頻と愛想よく一行を取持ちやがて定法禪師の方丈に通される禪師に咫尺して昨を語り今を談じ清明の佳節、禪林に梅花、賦詩揮毫の雅趣あることなどにも及ぶ。前年の約を履みて戲筆を弄したるに隣室既に十數葉の玉版箋に何れの高僧の傑作にや老梅の贊の殊に秀逸なるもの成れるを見た。方丈正面の大壁に掲げられたる古聯は定法上人印可の爲にとて上虞王弼和尚の落款で、

入林必深入山必密。

如月在手如水在心。

と趣の高い所が文字に吟じてある。聽て清明佳節特別の精進料理が若い寺男によつて運ばれた。石標こそ見えね、葷酒山門に入るを許さずの筈ではあるが、その桂花の加へられた老酒の爛は特に香高く、料理も湯葉、麥粉、豆の三者を材料に千變萬化、珍嗜好の凝らされたのを味はひ見ることの出來たのは自分が再遊中何よりの見學であつた。定法禪師も今日ばかりは善男善女の參詣ひきも切らず引見願る務めてをられたやうであつた。自分はこれまで支那南北各地の山寺を訪ねてゐるが昨春の第一印象において定法上人の風格ぐらゐる大徳圓妙の上人として感じのよい、また淨高敦厚、人をして溶けしむるが如き方丈大禪師に接したことはない。晩年山寺にこもるの

機會でもあつたらばかゝる上人と時を超越して、ゆつくり禪を談じても見たいやうな氣がしてならぬ。

山門を辭し徑を清道觀へ採り流れにそひ畑の豆の花、白すみれの咲き亂れたる野邊に行くこと數丁、畦畔入りみだれたる大型の陵墓の影に女のワン／＼と聲のかぎりを號叫泣き苦める如きを聞く。辿り辿りてこれをさがし當つ。親しく現場に至つてよくその様子を見ると二人の着かざれる良家の美人である。涙を左右の頬に流し唾液を下顚一ぱいに泡立て眞に文字通り號叫慟哭の自然を見せてゐるので斷じてその時ばかりは世の空泣きなどではないことを確め得た。かくて自分共は春の日に清明文化資料の道くさを拾ひ獲たる外、道觀の山にも登りて慈谿の丘の蕨狩りを試み大いに幽情を暢舒することを得た。清道觀は三層の高樓に登りて浙江萬里の春の菜たね蓮華の自然の毛氈を賞し、運河水路の長蛇の狀を語り合ひながら山を下り綠蔭苔深き山門を出て、雨餘の清明の佳節を十二分に利用が出來て甯波バンドに歸りついたのはまだ三時ごろであつた。

十七、清明節に聽く江南の情緒濃やかなる音曲

寒食から清明にかけての百花新緑の好時節にあたり、自分は他郷にあつて、獨坐、江上の流鶯

を聴き、酒を把り花に愁ひをやつてゐる、このころ京師の諸弟は今いかにと、湖北杜陵の片田舎で草の青々したのを見ていたく感慨したといふのは、唐の詩人韋應物の七絶に見えてゐる。草の青々した位でもこのやうにひどく人情の機微をさしてゐる。自分は春分寒食の前から江南は甯波城外新馬路鄭君のところに客中例の清明時節雨紛々で、毎日窓外に雨に聴いてゐるが、逍遙途上雨中農夫どもの並樹の楊柳新緑の枝上に攀ぢ登つて細枝といふ細枝をむやみと手折れるを見たのは一再ならずであつた。路を隔て、廣く開けた陵墓土饅頭の青々たるに加へて、雨中新柳の影を江水に投げたる靜な景趣の妙。寒食の佳節を前によくもぶち毀しをやる無風流ものかなと異境のことながら餘計な心配でうらめしく打ちながめてゐたのであつた。

楊樹といふ楊樹、あそこもこゝも殆ど坊主にされる位に枝を取つてゐる。先日慈谿行の途上、同乗の老農が眼鏡越しに一尺大の少陵全集を繙きながら、大きな聲でその節もあさやかに、寒食江邨路。風花高下飛。江煙輕冉冉。(中略) 雞犬亦忘歸などよく杜工部の寒食詩趣にひたり吟じ入つてゐた時のことなどに思ひくらべ、この殺風景は何事ぞと心から考へてゐた。ところが物は聞いて見るべきもので、民俗を鄭君の細君や古老にたづねて見るとかうである。寒食に百姓共の手折り集めてゐるあの新楊の細枝は清明の佳節を祝ふ風流の心から土俗毎戸軒並に二三枝を或ひは

屋上高くかざし或ひは檐端に低くさしはさみ、清明のかざりが出来る、往來構はず路上に卓を持ち出し亡き人のために供養の宴まで張られ、また陵墓塋域の修理清掃が出来ると土饅頭の頂きに新柳をさして手向け、五彩の紙旗まで加へ立つることもあるのだと。なるほどそれとわかつて見れば郊外楊樹の梢高く新緑の影に雨に濡れつゝ仕事をしてゐる村郎若衆の合羽姿も甯波文化の情緒をそゝる風情の一つとして見られるやうになつた。

また寒食の旦、小雨に新馬路の橋下を去來する畫舫民船の、清き鐘の音して漕ぎ行くを何の催しのありてかと汀近く打ち寄りて眺むれば、寒食に慈父慈母などのこれも亡き人の遺骸をさめた巨大なる靈棺を安置して、遠く甯波の田舎から故郷へ運び歸れるところであることがわかつた。錦を着て故郷へとは人の生前の事にのみ適用せらるゝものと聞いてゐるが、その黒塗りのうるしの巨棺に莊重な黄金、青、丹の繪畫模様の施されてゐるその上に、錦繡緞綢の綺麗な蔽ひものまですで打ちかけ前後の兩側を少し見せて鄭重に蔽ひ包み支那式のむすび紐で小口もこまかく一々止められてゐる。舳頭、家人の二三人香を焚き銀錠を燃して念佛の聲も靜に煙波江上はるかに向ふの空橋の影に入つてその姿を消した。清明の支度土俗の力を入れてゐる情趣はなほこれのみには止まらない。その回忌に當たれる家とかまたは陵墓の移轉を行つた家などでは、半ば佛教の方が

ら、半ば道教の迷信から七日七宵鳴り物入りの讀經を請うて、近所隣りに響き渡るやう、銅鑼と太鼓笛で清明の情緒を表現せんとする實はその表現してゐる事實を世間になるべく強く見せたいがため鳴り物まで奮發をしてゐるのだといふやうにしか見えないのであるが、何づれにせよ朝は未明から晩も一二時ごろまでたゞかれるのであるゆゑ、その情緒は近所にゐると、もう澤山だといつてやりたい位になる。しかし、これも遠く江をへだて、やはらかい楊柳の里に雨後の雅曲として幽かに聽いてゐる時は清明の銅鑼四ツ竹も頗る詩韻を咬る者があるのである。鄭君の自宅では自分の爲に寧波清明の春の情緒を記念したいとて寧波獨特の名物唱文書の音曲の趣向、洵に得がたいローカルの雅催である。招かれてゐた衙門の林振翰君も見えたが福建出身で土地のことは明るくないと謙遜せられる。地方文化に審かな若林君の肝煎で城内からこれを迎へたのであつた。それ〴〵専門の樂器を大事に新馬路の邸へと乗り込んで見えた。蛇三線の汪成文に琵琶の俞鶴春、胡琴の呂金生それに洋琴の何とかいふ伶人などで、このうち俞琵琶師だけは盲者であつた。何の曲を聽かうかといつてゐるうちに支那四百餘州に通つてゐる勸善懲惡の果報録が一等よからうといふことで結局、そのうちから思唐の雅曲と規夫の艶曲といふ二曲を願ふことにきまつた。卓を圍んで四伶人の身構へがはじまる。家庭の面々も部屋の一隅に皆椅子により、さあこれ

からとばかり待ちかまへてゐる。やがて沈重の趣を蛇三線三絃、大絃、小絃の好調優雅典麗なるしらべ、汪成文伶人のせりふと節まはしのよい所に琵琶が裂帛の清趣を閃かしてそこにはじまる。胡琴が這入る。洋琴の清韻が之に和して這入るといつた鹽梅で本調子になつて來た。熱心に果報録の書物を手にして唱文書の語りかた唄ひかたを一々文字につき研究してゐるものがあり、耳を傾けて一所懸命になり節まはしのよい所にくると目を細くしてしまふものがある。一座感心して物めづらしく悦に入り何づれもその曲の特徴を印象にとり入るゝことに餘念がない。そして、どうやらあたまのレコードに這入りかゝつたと思ふころ註文の二曲は奏しをはられた。今一曲何でもよいからと所望すると伶人共はこんどはふたりきりで琵琶の俞鶴春と胡琴の呂金生の掛け合ひを始めた。その曲の名はわすれたが鶴盲人は靜かに尺八式の笙を吹き流し、平沙落雁の雅曲を聞く趣にも似た極めて幽玄の感じを催させたのであつた。唱文書の印象はこの目に體驗した曲から推すと日本の琵琶の調子に最も近いところがおほかつた。或ひは日本文化史の上で浙江の文化を比較でもするやうな場合には浙江の田舎寧波の琵琶について考へるの必要があるであらうと思はれる。

十八、育王寺の禪門に漲る幽玄の情緒

甯波の文化は頗る内容に富んでゐる。その昔日本の遣唐使、空海の入唐上陸地點が今の甯波の故地だといふだけでも日本との親しみを深からしめるところであるが、その佛教關係の文化においては土地柄殊にその交渉が多いところである。その工藝美術の側や交通航海の側、乃至は商業取引の方面において可成注目にあたひする文化を地方的に發達させてゐることはいふまでもないが佛寺陵墓の方面には頗る豊富なる文化を發達させてゐる。のみならず土民善男善女の寺詣での風習が盛んにまた濃厚に行はれてゐる。

浙江における佛寺參詣の盛大を極はめてゐる名山を今錢塘江を境に南北に分けて見る時は、南は天童、育王、普陀洛珈。北に天竺、靈隱寺といった割合になるであらう。三天竺の山寺の毎春江南一帶幾十萬の信徒を引付けてゐる勢力はたいしたものであるが、併しまた天童、育王に海上の普陀の勢力と來たらこれにまさるともおとりはしないといはれてゐる。普陀山は邦人の江南遊歴客のまゝこれに遊ぶものもあるも育王、天童に至つては甚だしい。甯波城外から運河江上兩岸の野景を賞しつゝ東へのつくり民船を漕がせて行つて僅に五時間、洵に一舉手一投足のツリッププで

ある。

民船を江上、寶幢街の碼頭に繫留し墓陵續きの松並木の寺道を行くこと數町、清冽の水を湛へたる境外、松林の淨池を左に見て山門に向ふ。山門、樓は高く天に聳え背景松樹林の山嶺と相映じて扁額に光る八吉天王殿の草書大文字は殊に脫俗清香の氣宇を示して、禪門の雄趣を唆れるかの感があつた。門前左右の方池游鯉のあざやかに、門下、門内のかぎり一面に鋪石を施さざるところなく且その淨境、一塵一芥の掃き残されたるものもなかつた位に、清韻境内に漲つてゐる。

樓門四天王の立像、

東方多聞天王。西方僧長天王。

南方持國天王。北方廣目天王。

は支那南北各地四天王中での巨觀と思しく、像の大きさも殆どわが奈良の大佛に亞ぐ佛教藝術界での巨姿であるとの印象を得た。その溫容の眉の間から足の先まで修飾塗抹の五彩、最も清秀鮮麗を極はめ山門建立の新しき塗料の幽香と共に芳趣を大地虚空に放つてゐるかの感を禁じ得なかつた。

寺僧に育王大和尚介紹の書簡を手交しその案内せらるゝがまゝにまづ客堂へとついで行く。七

曲八折れ、實にその境内、堂廊、庫房、廊徑の複雑に且長きには聊か驚いた。或ひは内庭に偶然見たる龍燈の舞樂たけなはなる妙趣を味はひ、その田舎趣味の雅致を賞しなどしつゝ、或ひはまた筒袖長き灰色の法衣の寺僧幾百と集へる、各僧坊も珍らしくソトウかゝひなどしつゝ進む。高閣清房の間に行くこと暫くにして客堂に到る。客堂は清楚なる長き二階建て、他の坊と廊下づたひである。七層の古塔、半ば崩壊し、臺上草蓬々たるもの後方の右方奥まりたる所にあつた。聯に、

七重寶樹圍金界。

一片氷心在玉壺。

と慈谿の禪林でも見た結句が雙壁に掲げられてゐる。禪窓靜なるよい室であると思つてゐたらその一室が善男としての自分にあてがはれた。堂は樓上樓下清房二十餘、二人部屋あり、四人部屋あり、優に六七十の參詣お籠り客を泊せしむるに足りる。日本越前永平寺の禪林などの如く事務室、卓上電話、帳場と抜目なく出來てるものとは全然選を異にし、第一印象の感じからして既に香臺白月禪心を照らすといつたやうな氣持になつた。

寺僧三百有餘寺男數知れず、接待の係りの老僧來たつて恭しき會釋に慇懃なるもてなし振り、

まつこちらからの念願に應じてさらばとばかり寡言のうちに墨染の長頭巾に溫容を浮べ焚香の流芳高き大雄寶殿や舍利寶塔初め四天王堂に禪堂の靜觀堂、面壁堂、それに經堂、禪閣、禪林書屋、東廊、西廊、庫裡、鐘樓、僧室、僧房、飯堂、巡察庫房に佛足石の邊りまで隈なくすつかり案内せらる。達磨面壁九年の故事など思ひ出し面壁堂に木魚の梵趣、殊に梵筵は素人の自分共に興味が深かつた。また靜觀堂その他の繞り廊下の所々に貼紙して『小心火燭』『間人留步』その他『竄』の字を用ゐた文字が随分讀まれた。

かくて育王寺の境内規模は京都智恩院の十倍以上と感ぜられた。朝寢坊の身には柄でもないが育王の天提唱の禪機に觸れて身外盡く天竺の偈に歸するといつた靜味を味はつて見たいといふ氣持もした。やがて客堂に歸り客廳の八仙卓に凭れて老僧と清心妙香を談じてゐると浙江隨一の有名な育王精進料理、老酒が運ばれる。お籠りの甯波の檀家一家族が佛心から話しに來る。寺僧も入り替り立替り數多來たつて客堂の燈下、爲に瑞氣に充ちそこへまた畫僧の飛入りがあつて筆端三昧の力、雲外一生の心で揮毫の韻事がはじまる『一片氷心在玉壺』とやると『觀心同水月』揮手成雲烟などで夜氣大いに賑はつて來た、そこへ晩の八時ごろであつた。清磬一聲、香一炷、高閣佛室で讀經奏樂の事がはじまつたとの知らせがあつた。何も見學だとはかりついて佛室に入

る。鐘聲磬聲經聲、焚香梵唄正に酣なるの時、供養な請ふ檀家の繞坐して神位紅燭の梵筵に念佛をとなへてゐるもふさはしく自分もならば尊前禪の景趣に接して見たいと末筵に列つた。そして案上の焚香と鐘磬の音に心をとられてゐた。すると鐘聲、磬聲一時にハタと止まつたと思ふとすぐ暗黒の屋根裏より靜かな落付いた妙聲で讀經してゐるやうな唸りが聞える。目を張つてよく見るとバックが一面に五彩の彫刻に出來て二三間の高いところに左方普獻菩薩の像の前に一人また右方文殊菩薩の像の前に一人、紅緑の法衣をそれごとく着けてそこから幽玄の經聲を放送してゐるのであることが判つた時には、自然に無量幽玄なる禪門の情緒を感じざるを得なかつた。

十九、福建は閩江を溯りて天下の珍味ホン蚌を頌す

福建の天地は浙江とその景趣を異にしいはゆる江南の情緒とは全くちがつた別のおもむきに富んでゐる。舟山列島は普陀洛珈の沖合濁流に薄く色づけられたる海上を南航し眉の如く優しい臺州温州の山彙を遙かに指顧しつゝ、福建三都澳の灣、北菱嘴の漁舟の群の洋上一面に張れる幾百千の網の搖れてゐる所をプロペラに引かけた事故もなく、巧みに我が船（建福丸）は南へ南へと山水明媚の水郷閩江へ進路を取つた。臺灣から福州材でも考へて來たか山下汽船らしきが紅の浮標

の彼方を黒煙の尾を長くあとにひきつゝ、同じ方向に向つてはしるのが見える。

閩越の感じは北支や四川、湖南江南一帶の感じとは著るしく異なつてゐるが、福建の景趣はその奥地武夷山下を東南、延平、閩侯にと流れ走れる閩江流域の地勢によつて最もよく現されてゐる。閩江の水は長江とおなじく濁水である。が兩岸の天に連なつて聳ゆる蜿蜒たる山脈は總てこれ顎骨の偉大なる巨觀を呈し翠松點綴、峰に溪に、渚にと茂り生えるところ、黃壁の古廟民家の散點し到るところ一幅の山水南畫の題材たらざるものはない。文人墨客の、よく古寺樓閣の扁額に「江山生色」と題せるものもあるのも眞にかゝる山水清韻の畫趣仙境より得たる印象なるかと自得せられた。福州は南臺萬壽橋下の奥まで溯江四十幾マイルの風光、馬尾山上高塔の清韻、福建造船所に兵艦の舳艫相銜んでアンカーせる雄姿、海軍査驗處の水上衙門など一つとして福建氣分をみなぎらせてゐるものはない。わけても溯江兩岸峽中、佳景は巴蜀の祕境、萬縣、重慶、江安あたりの巨巖の怪峽とや、趣の通ぜる所もありて、閩江以上別にその猿聲の兩岸に啼くを聞かず、また旋渦激灘の恐るべきものあるを耳にはしなかつたが、しかし兩岸の自然の大觀は正しく巴東三峽の景趣に彷彿たるものがあつて何だか奥地の航行を思ひ出さしめたのであつた。

溯江船中福州の田舎の婦人がそろひもそろつてその頭髮に一尺に餘る錫の笄を三本づゝ挿しち

がへてある。この地方の化粧振りは何となく野趣に富み閩越古俗の資料として貴重視すべきものと思はれた。殊にその横臥するときなどを抜きもせず、そのまゝ枕するに至つては横向きも容易ならず、さぞ頸の筋の凝ることであらうなどと、他人ごとながら氣を病みつゝ、蔡星穀君などと語り合つて、要領よくカメラにをさめた。

かくて高く鼓山の山寺を東天に仰ぎつゝ、溯江、五虎、烏石山、越王山を左に見て南臺につく。入澤老博士紹介の野上、栗原兩君などを訪ね、陳、鄭二君も同道して省長薩鎮冰翁を城内衙門にたづぬ。衙門の古色蒼然たる大規模の建築に感心し、薩省長の溫容に感心し、そしてまた毎年その全俸給を部下の自由にまかせて自分は令息の扶養に一身を託せる殊勝振りに感心してよく聞くと、この點では段執政政府もその徳を認めてゐるとのことだ。翁が大客廳にて「これは特に福州獨特の點心なれば」とてやさしく請ぜられた干菓子の一皿と武夷の清茶にはまたひどく魅せられたが、更に記念にと墨色麗はしき正階の揮毫大幅を寄せられたには武人の半面を偲ぶ風韻として心からこれを珍としてゐる。

衙門を出ると、于山、烏石山、越王山、三山古塔の眺めは雲煙靉靄裡に包まれて、紅に夕照を受け美しく映えてゐる。昔の琉球使節の舊館の址も水邊になつかしくながめられる。城内溫泉場

も幾個所となくある。福州名物の木彫漆塗に紅漆袍の美術的なのは軒をつらねてつくつてゐる。幾萬の江上生活をなせる一段低い民船部落の舷々相摩して所せまく碇泊してゐるのもあれば、仰ぎ見るばかりの巨大な山東船の五彩の錦繪に帆檣高く絶頂に徑三寸大の黄金の寶珠を冠せる金ピカの雅趣も、その風にひるがへる細旗と相映じてまことに閩江氣分を大空に咬つてゐる。或ひはまた萬壽長橋の空高く暗夜に孫中山先生哀悼の念にとてアセチリンの電飾の光りもひどく人目を惹きつけ橋下の流水と相映じ、新思想を翳してうれしがつてゐる青年の心をいやが上にも咬つてゐる風も見られる。

かく福州の城内城外南臺閩江すべて山紫水明の佳境であつて、街には起伏せる丘陵の馬鹿に多いだけにおのづから景色の上にも變化が多い。特に大厝山に登りて全福州を眺めると、兎角どうかすると殺風景になる防火壁をば、最も巧みにまた最も複雑に都市計畫のうちに編込みてその實用と美觀の目的を助けてゐる一事はこゝに特筆大書する價值がある。なほこの際附言して置きたいのは、ボン蚌の珍珠である。古人のいはゆる鵝蚌の争ひの元祖なる蚌はこれで、蛤よりもすつと大きく、評判以上の味をもつた貝である、閩江に獲れるさうだが、松江の鱖魚と併稱せらるべき天下の珍珠といつて差支へない。

福州の地にはこれまで閩江を溯つて二度これを訪ね福州方言のわからぬのも意に介せず各方面の便宜で十分に福建情緒に浸ることが出来た。しかして自分のこの度の南洋行きは臺灣海峡から南、厦門、汕頭沖を経て香港に寄港、福建、廣東兩省の華僑としてシンガポールに、マレイの田舎ゴム園に、南洋各島嶼の津々浦々に、美しい文化生活を民族的に成し遂げ、今や全く世界的成功の域に達してゐる幾百萬の生活状態と、その成功の裏面に潛む幾百年間の臥薪嘗膽のエピソードとを探り、それから日本人のこれと反對に南洋諸島における現状並びに南支、南洋におけるその植民的教育の缺陷のひどいことにつき痛切な印象と實驗とを経て來たのである。

上海公園の綠蔭

支那や南洋の舞臺のことを考へると日本の表立關はどうしても上海でなくてはならぬ。神戸や横濱は内立關見たやうなものである。吾人は寸時も上海のことを忘れてはならぬ。自分は昨年夏又四川再遊を思ひ立ち、上海丸で上海に著いた。その日の晩南陽丸に乗り替へる心組で夕刻は上海バブリック公園を散歩してゐた。上海バンドにあるこの公園は今更こゝに紹介する迄もなくガンデン・ブリツヂのたもとから黄浦灘の河岸に沿うて作られたる洋式の公園で、支那人禁制の公園である。最近にはその公園へは支那人も入ることの出来るやうに運動中であると云はれてゐる。こはかの蘇州河に沿へる四川路の一角に作られたる支那人公園や半淞園などと異なり支那人の蹈み入ることを許されてゐない公園である。自分は四川入り同行の高山孤竹翁父子に江越君と虹口の歸りに此のバブリック公園に蹈み込んだ。六月の下旬のことゝて涼を取り、ベンチの緑蔭に上海氣分を味つて見たい感じがしてゐたのであつた。殊にその日は月曜のことゝて、例會の音樂會の雅催のある時五點鐘になつてゐた。菩提樹の綠濃き木蔭の夕暮れ上海の奏樂を聞くことは悪くない。足は思はず公園内に這入つたのである。春以來上海は御無沙汰をしてゐた。春は東都家郷に老母逝去取込みのことがあり、好きな支那漫遊も延び延びになつてゐた。久しぶりの上海の散策は又格別の情味がある。かう云つた氣分であつたので、此の公園に今どきは服裝のこと

など殆ど念頭におかれなかつたのである。支那人入るを許さずとの公園であるが支那人らしいもの入る可からずと云ふ公園ではない。上海工部局で公認の公園であるからには、支那人でないならば這入つて散歩しても、構はない筈である、支那人でなくとも、支那服を着てゐるものは注意人物視される恐れがあることを氣附かねばならぬのである。

自分は一行と一緒に公園内をガルデン・ブリツヂの方から這入つて行つて河岸に沿うて南へ進む。英米、獨佛、伊露、安南、馬來、印度各人種の散策せるものがあり、さうかと思ふとベンチに凭つて、白人の清風を納れ悠々とやつてゐるものもある。又音楽堂を圍んで清音の響きの樹間に洩れ聞こゆるを樂しみ待つてゐるもあつた。ビジネスで見目ぐるしく活躍してゐるもの、多い上海には又かうして暢氣さうに老夫婦や若夫婦の各國人の相携へて公園内を納涼散歩と出かけてゐるものも少なくないのである。その顔を見渡すとよくは判らぬが合の子らしい顔付き血色、毛髪のものもかなりある。嘗て南洋スマトラにて人種の博覽會とも思ひきメダンの納涼の光景を見たことがあるが上海のバブリツク公園の夕涼みはそれにも増して色々様々である。實に盛なものである。そのうちに支那人らしきものは一人も見當たらぬ。若し居ても西洋人の子供の子守阿媽の類のみである。さすが支那人禁制の地域だけに支那人は一人もゐない。

支那服を自分の常服と自分できめてゐる心持ちから云へば人が之を何と見ようが構はないのである。園内の小徑の辻に立てる印度巡查もジロ／＼と意味ありけに自分の歩く姿を見てゐる。別段貴婦人などの自分に視線を注いでくれるものなどは勿論なかつたが、どうかすると相當な紳士、淑女までがこの公園の禁制を知らぬ支那人かなと云つた目附きでこちらを見つめてゐるのを見たのであつた。これは自分ばかりで氣がついたのではない。一行の他の諸君もさうらしかつたとあとで話を聞かされたのであつた。

不平等條約撤廢論などの持出されてゐる時代の推移からすると此の差別待遇の精神は早晚改めらるゝ時が来るであらう。支那人が自分の地域でありながら這入れないなどは怪しからぬと憤慨してゐるものゝ出るのも當然のことである。

民國人と云つても一概に云へない。西洋人よりも清楚にして禮儀エチケットを心得たものがあり、立派なものもある。公園にすべての民國人を拒む意味では無論あるまいが、原則としてはそれが禁制になつてゐる。自分は支那服のおかけて此のバンドの公園内を一種の義侠心に充ちて散策をした。むしろどうか巡警印度巡查が自分に咎めの言を發してくれ、ばよいがと思つてゐた位であつた。しかしかれらは半信半疑のせるか云ひ出しさうに見えてゐるたがその實何とも遂に云

はれないで済んだのであつた。若しや支那服の爲めに引きかゝつて来るやうなことがありでもするなら、大いに辯じようと待つてゐたのであつたが、不幸そのことになかつたのは張り合ひぬけがしたのである。上海バンドの公園は人品を見て支那服の人でも自由に入れるやうに改めらるべきものと自分は考へてゐる次第である。これは支那民族の爲めに大いに氣を吐いて見たいのである。

上海一日旅の印象

上海は家族のものにも見せておきたい。牛に曳かれて善光寺詣でと云ふが自分は子供文子（十歳）に曳かれて一日の上海見學をさせるべく急に日本内地の旅行を上海まで延長する事にした。先年のことである。その九月初めの東京の附屬小學校の都合もあり上海は中一日しか居られないのである。

上海一日旅とは云へ小學四年の子供にとつては可成り強い印象を生涯與へることになる。他人に向つてのみ支那を力説してゐる自分は、子供の爲めにも内心拒みがたく旁好機と考へ一寸上海の香ひだけでも經驗させるつもりになつたのである。

實はその夏は淡路の洲本の夏期大學に講演を兼ね、海水浴にと一週間ばかり出かけ、慶應學長林毅陸博士、小山内薫君、植松醫學博士、矢内原教授、北吟吉氏等と共に五六百の聽講生の前に、自分は支那民族性と支那趣味の講演を試み、又婦人の集まりの爲にも二回ばかり試みたる後、大阪天保山に渡り大阪から神戸に出て聯絡船上の人となつた。長崎から再び引返して歸東の豫定をしてゐたのであるが、子供から歸途奈良の大佛も京都の嵐山も何も見なくてよいかから三十分でも上海へ連れて行つてくれ上海が見たいとの純なる熱望。エハガキを買つて來たいと云ふ。それから此船で行つて此の船で歸ることにして一日だけならと云ふことに含めてそこで牛に曳かれ吳淞

の濁流に向つて行つた次第である。

長崎丸は四十七航海である長崎出帆の時刻が来ると、雲仙引揚げの西人邦人客で船のサルーンは百二十人。食堂の賑かなること夏季掉尾の盛況を呈し、船尾の方も二百名に達してゐた。早速郵船社長などへも感想やら實狀やらを通信した。

三時のお茶の集まり。夜のデッキの岐阜提灯下の活動寫眞、中々に乗組の努力功を奏してゐる。子供家族づれの連中も大喜びだ。中一日の上海見物はあだかも歐洲航路のバセンジャーのそれの如き調子で一種の技術であるが、子供だけに今度は新世界だの何だのと少しはブカ〜ドン〜の處も覗かせる方が東京への土産ばなしにもなる。自分も子供をだしにせめて一度は上海の淺草をも見學しておきたい氣もちもする。然し又ゼスフィールドや新公園も見せておきたい。城内湖心亭附近の氣分も兒童のあたまに入れさせたい。

前年夏樺太へ見學につれて行き北海道札幌常山溪や小樽函館、松島の印象が殊によかつた。海の鯨の潮を吹き上ぐる印象もよかつた。東京の高等師範附屬は教授方法も進んでゐる方で父兄會なども中々振るつてゐるのであるが、家庭で色々と實地見學に意を用ゐるに越したことはないと思ふ。殊に東京でチブスその他の危険性の多い夏季はなるべく野に山に河に海にと大自然に連

れ出すものが多かつた。又目黒あたりでは林間學校が盛んであつた。

淡路の三熊山にも林間學校を見た。その前青森縣の十和田湖に行つたら湖畔に米人のキャンプライフを原始林の中にやつてゐるのを見て非常によい事と思つた。兒童は夏は大自然につれ出すに限る。東京は別荘道樂をやめてこの聯絡船で上海まで家族づれで往復すると云ふ紳士淑女が次第にふえるやうになつたことはよい事である。支那からは雲仙や瀬戸内海へ、日本からは上海や蘇州杭州や長江、廬山、莫干山へ夏の浩然の氣を養ふべく出かかると云ふ一つの年中行事を見るまでにすべてが進んで來ることを希望してやまないのである。

南京鎮江の女旅

一、吳淞狼山鎮江の江上

先頃上海は浦東から船出して南陽丸で南京の観光に出掛けた。普通南京行は時間を省く爲め汽車による者が多いが初夏の江上の風光を賞するには船に若くものはない。

宛かも南京の情趣を味ふ可く多年心深く思ひを寄せてゐられた住友の名村豊太郎君の夫人、日華紡績の田邊輝雄君の夫人それに荆妻も加つて、三名の夫人と共に南陽丸のデツキも賑かに吳淞から長江の本流に向つた。狼山の白塔が見え始めた處あたりから輪投げが始まる。漢口に初めて行かれる臺銀の井原君それに宮崎嘉一君等大供打はしやぎ、長江の空の色鮮かに或克の白帆も遠く洋々湖江氣分を味ふことが出来た。

サルーンで漢口の氣候の話が出る。漢口の夏は物が云へなくなる程暑苦しいが廬山があるので助かる。初めての方は御子さんだちを廬山におかれたらと云ふ名村夫人の實驗談が出る、田邊夫人は淺黄の毛糸の編物に餘念がない。デツキの籐椅子に二本の編み棒も忙しく時々蘆原の風光をめでられる。通州に船がスローで寄ると、沖に漕ぎ出てるた傳馬が本船から綱を投げて貰ふ。大荷物を持った百姓が二三人乗込む。盲者が一人下船する。呼子の笛がなると大綱が解かれて本船

から離れる。慣れたものだと思取れてゐるお江戸下りの山の神もゐる。

やがて輪投げの勝負が續行される。田邊夫人最も妙、名村夫人兩手を使つてゐるわりに點數が這入らぬ。その恰好と來たら安來節の鱈すくひの姿、最も拍手喝采を博した山の神はゼロ専門、點數が少しもとれぬ。男子側では井原君最も手に入つたもの。一度に四十幾點取られたこともあ

る。
夜半に江陰についた頃は傳馬の人の聲のさわぎもよそに東京上海談に花が咲き上海生活の批評が始まる。上海ぐるらるよい處はないからと懲罰されるかと思へば、日本へ一日も早くと云ふ連中もゐる。上海東京間を聯絡船の快便で去來が出来る時代を有りがたがる話も出る。南京に行くのに此の長江を通らなくてはとメートルがあがる。江上の船おだやかに全く陸にゐるのと同様であるので夫人團大機嫌。これでは夫人團長格の自分も大變樂な譯である。大切な奥様だちを預つてゐる自分にとつては何より幸せのこと、思つた。その翌日未明南陽丸は焦山と美人岩のあたりを過ぎて船はいつしかハルクに横付けされた。荷揚げの聲に夢がさまされた。顔洗はぬうちデツキに飛び出で見れば東方甘露寺の一角は薄紅の雲を帯び、それが桃色の水色新緑の蘆原と相映じて實に繪のやうである。

東雲の水平線から盆の如き朝暈が薄霧をかぶつて少しばかりあたまを出し始めた。日本から來たばかりのものは此の大陸の日の出に無限の興味を感じてゐる。名村、田邊兩夫人を今すぐデツキと呼ぶ。山崎キャプテンと打合せして上陸。吾われ四人相携へ鎮江は金山寺塔の方へと散策。勿論金山寺までの時間はないが、鎮江名物の盆子を求むべく狭苦しい支那町を右へ右へと進む、木器老舗を叩き起して柵を見る。殆東西なき爲め更に進む。左に曲りたるところの左側のうちで何とか云ふ大きな盆子屋の看板を見て之に到る。まだ戸を開けてゐない。起きてゐない。まだ朝五時半であるから起きてゐない筈である。熱心のあまり戸を叩いて起こさうとした。そのうち船の汽笛が聞えたので、買物どころの騒ぎでなく引かへした。

道路の鎮江人早朝自分が三人の夫人同伴で廣くもない途を暢氣さうにあるので第三夫人までも携へてあるいてゐる東洋人かなと云つた一種の目つきで眺めてゐる中國紳士もゐた。

粽子や炒餅を露店に出して商ひの仕度をしてゐる小商人もゐる。蘆の莖で作つた小屋に乞食然として寝てゐるものもある、大觀樓や六吉亭のあたり既に四五回も前から見てゐる光景と少しも變はらぬ。揚州行の碼頭義渡の眺めも前と同様である。

先年揚州は高洲太助翁のところに行くときに立寄つた泰來館は、排日當時から日本人の名義で

經營がむづかしくなつた由をき、鎮江の日本人の事業は益困難になりつゝあるを痛切に感じた。揚州の高洲翁は山口縣肥島に島の王として納まり、又そのかたわれは日華紡の君のところに片付かれたとき、往來の太助翁の依頼のことも重荷をおろした感じがした。

鎮江を船出し金山寺の塔も幽かになる頃朝食が始まり、やがて鹽の税關で有名な儀徴にテローでよつた。三夫人は南京孝陵でつかふピクニックおにぎりに忙はしい。山崎キャプテンより賜つたビスケットの空罐もありがたく、上陸後のお辨當はすつかり出來た。自分は例によつて郷に入つては郷に従ふので又々粽子や炒餅で晝をやるつもりである。南京では今は森岡領事であるがその當時は林出君であつた。先づ領事館に出かけて行つて林出領事に敬意を拂ひ孝陵秦淮に遊び明天蘇州に寄り楓橋の古詩を見出させて兩三日中又々上海に歸る豫定である。杭州西湖錢塘江はそれからあとに廻すことにする。

二、南京城外の佳話を作りて

南京は下關のハルクに南陽丸がつくと例によつて苦力どもは恐ろしい勢で左舷内に飛び込んで來る。山崎キャピテンや井原君にイザさらばを告げてデッキのブリツヂから上陸する。吾われ四

名の上陸がひどく馬車屋の注意をひき恐ろしい勢で催促される。わざと相手にせぬやうな顔付きして少しばかり歩を運ぶ。そのうるさく、八釜しく云ふ馬車屋はすべて退けて、最もおとなしいそして人相のよさうな馬車屋を求めてゐたら、何一つ要求がましいことも云はず而も馬車の新しい綺麗なのを引ばつてゐるのが見つかった。之にきめて、一時半から九時半までを四弗で約束し下關から先づ日本領事館へとドライブした。夫人連れのためガイド振りを發揮して路傍の風俗話などしてゐるうちに紅色に塗り立てられた大門を左に見て進むと幾度行つてもなつかしい日本領事館について。支那各地の日本領事館は色々風景のよい形勝の地を占めてゐるが、南京のそれは又格別で、列國のそれよりも第一等地にあつてうれしい。いつ行つて見ても南京第一印象はこの領事館の位置の少し遠すぎるけれども地勢のよい點にある。

林出領事は外出であつたので後刻再訪を約し、近藤書記官にあひ、夫人連れもこゝにひと休みしお茶など頂き早速見物へと急ぐ。北極閣の丘を登り樓堂の下に先づ展望を恣にし、南朝四百八十寺の當時の事をかたり、城壁の偉大さ、革命當時の破壊の話や城内に吠畝の多きことなど語りつゝ次ぎの鷄鳴寺に詣つ、境内茶館式のところ學生紳縉の遊ぶもの多く、吾人日人の四人に目を注ぎお茶の飲みかたまでを見つめて居る。境内郭公や伉麗の鳴聲涼しく聞え殊に茶館よりの眺め

は最も妙である。學生の樹林間で心靜に英語リーダーの勉強をしてゐるものもあれば、机によつて頻に論文らしきもの書くに餘念なきもあり、試験前でもあるか、中々皆勉強してゐるのを見受けた鷄鳴寺は看門、寺僧何の要求もなく、寺にしては珍しい寺だなと話ながら鐘樓の下をおりた。馬車で城内をドライブするとき粽子屋が目につき、十個銅牌で粽子二十包を求めピクニックの材料をふやし、南陽丸の辨當の上に之を加へて幾分支那氣分を添へる事にした。夫人連に粽子に興味を持つて貰ふには前途遼遠のこと、思れたが、ピクニックの機會に支那の田舎の情趣を味ふべく心がくるもまんざら無駄でもあるまいとそろ／＼粽子黨の本音を出し始めた。馬車は古物保存所に到る。明の故宮の跡だけありて碑碣瓦磚その他出土品を樓上樓下に陳列して考古の資料に充てゝゐる。前回來訪の時には六朝の天發神籤の名碑が陳列されてゐて流石天下の名品があるわいと思はれたが今は何處にか運ばれてそれも見えない。たゞ古井の框石がいくつか列べられてゐるのが最も注意をひき、名村夫人もこの井戸の側の繩の跡の切れ込みに光澤のあるを見て田邊夫人どもと手で撫で、は古を偲び物語りが始まる。日本の婦人がたにして南京の古都に入り考古物語に耽る場面は恐らく今次われ／＼一行を以て嚆矢とすとは云へないかも知れぬが恐らく多くはあゝるまいと聊心強くも感ぜられた。南京古物保存所から朝陽門を出て石人石馬の方へと馬車に揺ら

れながら旅行氣分の話しに花が咲く。朝陽門の門内門外驢馬の大囊を負うたのがいくつも並んで、馬夫に引つばられてゐるのは可愛いく見える。麥畑の黄色に深まつた景色が灰色の城壁コバルト色の大空と相映じて洵に美しい。可愛い農夫の親子が路に通るかゝる。

城門の下、涼風そよぐところに甘蔗莖を三四寸に切つたのを賣つてゐる露店の老爺も風情に富んでうれし。でも馬車の動搖は激しい。全くこれでは大抵のものであつたら流産をするかも知れぬとの話も出る。

そのうち夫人連のひとり突如としてアラワタシホントにドウシマセウと連呼して足もとを頻に捜される。フェルトの草履を片方馬車のゆれが激しかつたのでいつのまにか、ぬけて落ちて了つたのである。見れどもさがせども馬車の中にはない。孝陵の前の茶屋でわらぢを求め陵に上るに、今様常磐御前をきめ込む。常磐御前も經驗しなかつたであらうが片方草鞋の御陵詣では支那の田舎でなくてはこれ丈の場面を演ずることは出来なかつたのであると思へば全く貴い經驗であつた。

孝陵に上つてゐるとあまたの支那の學生がはしやぎながらあとからぞろ／＼と上つて来る。先きに古物保存所にたくさんゐる連中である。どちらからですと聞いて見ると上海からと云ふ。中

中賑かである。連中と打まじつてピクニックをとる。南陽丸で造つた材料である丈に吾人のものが一番おいしい。百姓の子供か花子かそばに寄りつく。支那氣分で之も景色を添へてゐる御馳走のつもりで追拂ひもせず手を出すがまゝに幾回でも出させておく。夫人連から二つ三つ箸でつまんでやる。外の子供がまた来る。またつまんでやる。やるのも待ちきれず取らうとする。卓子の一隅におくと遠慮もなくふんだくるやうにとつて口におしこむ。中に一番たちの悪いのがゐるよこどりをしようとするものもゐた。

孝陵の歸途馬車の幌を後方にたゞみ展望向きに仕立て石人石馬もよく見え石象、石獅、石人、華表の建立の由來など物語りつゝ城内へと急ぐ車上、まだ面白い夫人頼冠りの一幕があつたがそれはお預りにしておくことにして、貢院小學校夫子廟や秦淮を巡遊。夕暮の秦淮の畫舫一向に夫人連の興を引かず、却てむしろ小學校の圖書、自由畫などの方に興味があつたらしい。それから古玩店の町に至り十軒ばかり古美術品をあさる。名硯もいきなりあるとは思はなかつたが上海よりも概してよいものがありさうに思はれた。

やがて領事館につき林出領事を始め近藤朝比奈の諸君並びに須藤ドクトルに挨拶、林出君より新代議士の神田正雄君も見えてゐるので實は六時に皆さん一緒に聚餐の積りでと、時間を過ぎる

こと二時間半の八時半についた爲めすつかり失禮して了つた。林出君千客萬來の中を色々接待に努めてくれられる芳情を多とする。須藤ドクトルは水巖の端溪を持參して旅情を慰めてくれる。馬桶研究から難問題の焼物を持參、コレは何でせうとツルの付いた急須型の三四寸のもの、器に徑六七分の孔がありツルに小孔がある。博古圖や西清古鑑でしらべて見たいと思つてゐる。林出領事のところでは令夫人にも敬意を表したいと一行の希望であつたが一週間前にお目出度い事があつたのでお目にかゝれなかつた。が樓上で赤チャンの可愛い、聲には時々接することが出来た。大客廳に林出君始め近藤朝比奈兩君須藤ドクトル、神田代議士それに吾われ四人都合九名歡談しばらく、神田君より車上のホワイト、ヴェールをチラと發見したと云ふ素破ぬきがそろ／＼出初める。あまりに當日の暑氣に恐れジャパニース、ホワイト、ヴェール、をかけてゐる姿で江南をドライブしてゐるところを同君自動車の上から瞥見したあの馬車が尊夫人だちであつたのか、人もあらうに自分如き新聞本職のものに目をつかつたとは冗談ばなしなど續出、やがて十時にも近くなり非常なおせわになり厚く林出領事や館員諸君の好誼を謝し神田君と前後して辭し、自分共一行は十一時の汽車にまに合ふ可く下關のステーションへ急いだ。

杭州西湖天竺めぐり

一、西湖をあとに龍井三天竺へ

日本人の杭州の観光と云へば普通いつも西湖見物のみに終始し、孤山、三潭印月、岳王廟に靈隱寺、之に玉泉觀魚の清澗寺でも見て來ればよい方で大抵の雅客は一泊半日位の間で片付て歸らうとする洵に島國的の忙はしさである。これで杭州城内、清河坊のあの殷盛な純支那式雅趣も味はれなければ錢塘江の大きな江畔の景趣も味はれない。天下の杭州に遊ばんとするものがいつもかく心あわたくしく瞥見、快走するのみであつては抑も支那漫遊本來の意味も何も没却して了つたことになる。支那に旅するものは大いに心せられたきものである。

西湖の見物にしても蘇堤白堤の水から孤山の遠影を打眺め三潭印月のあたりからも雷峯峰のあつた方角夕照靄々裏の間、あひだを舟遊し一葦の行く處を恣にするの風懷は決してわるくない。さんぬる民國十三年の九月廿五日のことであつた。雷峰塔崩壞の偶然の出來事があつて以來塔下南屏夕照の眺めは今やなくなつて了ひ洵に惜しいことをした。しかし別にもしそれ杭州は南方の空に高く聳ゆる吳山の峰に上り明の太祖が提兵百萬西湖上。立馬吳山第一峰と賦したあの名山の頂きに上り南の方ひろく浙江の平野を望み、漫々たる江水に大陸氣分を漲らせてるるか錢

塘江の大景を賞するの亦實に痛快なことである。

つまり杭州は由來名所舊蹟に富みその上天然の風致景趣に富んでゐる。その文人墨客でなくとも一般の觀客の旅情を慰むるに足るものが殆んど枚擧にいとまのないほどある。中にも杭州に行つた觀光客の最も留意すべきことは、その杭州氣分を十分に味ふに在る。西湖の氣分よし、吾山の氣分もよし靈隱寺、岳飛の氣分亦無論よろしいのである。しかしこゝには特に自分の考に泛んだ幽境に見出さるゝ風流氣分に棋盤山の展望氣分、また煙霞洞の裏山からして虎跑寺の幽境清地、それに上中下三天竺の清香氣分。かう云つた餘り人に知られてゐない方面の杭州の情緒を左に紹介して西湖のみに囚はれたる江湖の雅客の參考にもして見たいと思ふのである。

二、龍井寺の幽境茶禪の清趣

龍井はルンチンと讀む。云ふ迄もなく支那隨一の茶の名所での福建の奥の武夷の茶と併せ中國の茗茶の名にあこがれる者の必ず訪ふ所である。自分は茶をかつて千の利休の後裔文學士千嘉次君から學んだ。茶は學んだが茶人ではない。茶人でなくとも支那の茗茶に因んだ名所を訪ねて見るのは興味深いことである。先きに福建に遊び武夷の茶を得たとき非常にその香の高きを賞し

た。今龍井の茶は上海でも北京でも珍重せられよくその名は通つてゐるが存外その本場まで突止めるものは少ない。龍井は杭州西湖から譯ない近い處にあり乍らその山の手に入つて引込んで居る爲めか人の之を訪ふものが洵に少ないのである。

自分は最近春三月の初め既に浙江の野一帯には茶の花が黄色い毛氈の如き柔かみを見せてゐる時候であつた。龍井から上天竺の方へと一日の清游を試みたのであつた。杭州は城内上馬市街田白眉翁の邸内かち自南翁と紹興生の轎夫を伴ひ湖濱路の碼頭からして湖上の人となり小舟の艫の水をかく音も靜かに葛嶺初陽臺上保俶塔の秀姿も幽かに孤山の輪廓は低く湖心亭を右に三潭印月を左に見て西湖を渡るそして蘇隄に差しかゝる。蘇隄は長く之には六橋がある。跨虹橋、東浦橋、壓堤橋、望山橋、鎖瀾橋、映波橋の六者がこれである。自分共の小舟はその中央の壓堤橋下を通りぬけて裏湖に出た。蘇隄を蔽ふ桑の樹の畑中を牧童の一人ふたりが二十頭に近い水牛を連れ湖上の小調を唄ひ流しながら金沙隄さしてもやの裏に消えて行く景趣は何とも云へぬやさしさである。

橋下を通りぬけて蘇隄橋のたもとを振り返つて見るとこゝは昔から蘇堤春曉と云ふ詩の題材になつてゐる所だけに景趣深く一歌人をして讚歎せしめずにはおかないところである。丁家山下の

將軍廟を左に見て郭莊臥龍橋の湖濱に舟から上がる。臥龍橋のほとり玉壺春館を左へ、石工屋に憩ふ。石人石馬の路傍春畝の裏に空しく立ち列べるを眺む。昔この邊り高貴の人の墓陵の參道なりしことを物語れる遺物なるか。石人石馬の外に石羊、石狗まで揃ひ盛なもので總體で八對からもあつた。定めしその昔の陵域は大規模のものであつたであらうと推測せられる。

溪流に沿ひ水田の間の小徑を縫ひつゝ、三臺山の手前の谷を龍井へと上る。丘陵の麓、墓陵の散點するもの多く大抵は貴人の墓所らしく之に老樹の茂れるものがおきまりである。轎夫や土民に就いてその樹名を聞くとスウタンと云ふ蘇檀とでも書くか。その文字を聞きたるに「知らぬ」と答ふ、多く他の地方の如く松樹などは之に植ゑない習慣のやうである。總體このあたりの谷地、丁家山、三臺山、吉慶山、雞流山の諸山の麓には溪流に沿ひたる思ひ思ひの所に地域を細長くとり、之に幾棟となく長屋式の納棺堂を盛に建て並べてゐる。堂は厚壁もて十室乃至二十室にも仕切られその各室には觀音開きの扉が二枚づゝ必ずついでゐる。行つてその内部を覗いて見るに一室原則として一棺を納めてはゐるが又時に二棺を納めてゐるものもあるが。この地方界限の習慣だと云ふ。その死體の棺はもとゝゝそれゝ故郷に持運ぶべきであるが當分一時預けの所として之を利用してゐるわけであると。それにしても随分古い年代のもある八釜しい風水説で容易に墓

陵のきめにくい時など假の一時預けとしてこゝに持込むものゝ多いとはさもあるべきことである。

しかし支那人一般の氣持ちからすると、

「苟しくも人間に生れた以上永久の墓陵をこの天下の西湖湖畔に持ちたいものだ。」

とは誰しも考へてゐる所である。孤山放鶴亭のそばにも近來その新しい大規模のが出來た、その他山腹の形勝にも續々出來つゝあるのを見る。五百年千年の後には定めし墓陵で湖畔は埋まつてしまふことであらう。この意味から云ふと一時預けが永久の納屍堂となつてくれる方が亡者の爲めには本望かも知れぬのである。

溪谷の間の景趣に農家百姓の靜かな情趣などを見又名所とは云へその僻陬の地に西湖の田舎氣分を味ひつゝ、だらゝ阪を登る。すると遙か上の方に當つて渦溪亭と云ふ四阿の屋根の反りを面白く現はした門が鮮かに目撃される。見るからに、

康有爲の筆法で『龍井寺』

と大書された扁額が亭の正面に掲げられてゐる。犬養木堂翁の愛される筆蹟だけあつて木翁の書と大分似かよつてゐるわいななど考へて見た。

龍井寺の伽藍はまだ山の上で幾百の石段を登りつめなくてはならぬのであるが、寺そのものよりも此の過溪亭そのもの、方に古人のあたまを刺戟してゐたらしく考へられるものがある。自分共はその亭に行き着くと、亭の左右凭りかゝりの勾欄に坐したのである。するとその凭りかゝつてゐる眞下は龍泓である。清冽なる水が物すごい音して躍り湧き起つてゐるのである。四角に石で圍まれたる方泓で井戸の如く深くそしてその深い底の方から非常な轟聲を發してゐる。そしてその轟きにつれて狂瀾怒濤が絶えずその逆卷きを返繰してゐる。寄せては碎ける磯の天打つ浪などとは違ひ僅かのひろさの此の方井の裏でかく驚く可き怒濤の奮起を見るのである、而かも此れが亭の左右何れの方泓にも同じやうに物凄く現はれてゐるのである。

龍井寺の龍井とは正しくこの方泓からその名の起つてゐることはすぐ推定せられる。どうしたつて天然の水だけの力ではこれ程の轟聲と怒濤を見るわけがない。何かこゝに古くから龍でも潛みゐる此の不可思議な現象を惹起してゐるものだらうと、かう考へたくなる。古人が之を蛟龍の井底にひそみゐるその龍の躍動狂奔してゐるものだと考へたのは尤も至極なわけである。試みに轆夫あたりが之をどう考へてゐるか、自分は、ふしぎさうな云ひ方をして、

「轆夫、一體この井戸はどうしたのであらう。あのやうに盛に水が湧き起つてゐるぢやないか。」

と聞いて見るとその答は次のやうであつた。

「この井戸は古くから龍がぬしである千年も前からこはい龍がゐるて底が躍つてゐるからあの通り水が掻き廻はされてゐるのだ。」

實際面白い説明であると思つた。この龍井の歴史としては昔吳の赤烏年間に葛洪が練丹術をここでやつたその古蹟たとして傳へられてゐるのも故ありと云ふ可きであつて今以つて不可思議な井戸と考へられてゐる所である。龍泓から山道を上る。その石段を登りつめて右折すると龍井禪寺の山門につく。之に這入つた。邊りすべて清楚な氣分に充ちてゐる。堂の裏庭に出て來て會釋した和尚も質素な韻致のある山僧であつた。自分共の爲めに場所柄だけに名にしおふ龍井の茗茶を煮て請する。卓上の禪話興味深く、全く門に俗客なく古人の書を読んでゐられる禪僧と云ふものは羨しいものであると感ぜられたのである。それから和尚は肝煎りの楓樹の苔蒸す盆栽幾つか庭に陳べられてゐるのを指しその多年丹精してこゝまで作つた山中清香の氣分を語り出でたのであつた。又軒下に陳べられた鐘乳石の奇形狂態の珍物に話頭を轉じ云ふに、

「こは盆石として恰好なものをひまにあかせて裏山より蒐め來たものである。中々雅致掬すべきものがある」云々。

と茶盃を手にし乍ら茶禪の味を聞かせてくれたのであつた同道の自南翁はもとく僧門の出だけに山僧と話が合ふ。庭の苔むす盆栽の鉢の方を眺め、自南翁、

「いかにも皆よく丹精が届いてゐる、幾十年とせわをされたものであらう。」

「あのうち一等苔の深い、古木になつてゐる四角の鉢を一つ譲つてもらへないでせうか。」

などひやく／＼することを平氣で山僧に迫つてゐる。山僧すかさずどうも困ると云つた顔をして、

「あれ計りは眞平だ。」

「しかし外のならば都合でどれでも。」

自南翁、

「わきのはおちる。さう其の特にと云ふ氣もしない。」

とあつさりやつてゐる。そして自分に向ひこんどはしきりと、

「あの鐘乳石の最もおどけた嬌態の縦長いやつを一ついかゞです。」

と云ふ。山僧も話によつては應ぜぬでもなからうけれども自分はそれほどにも思つて居なかつた。

「又荷物になるから大變だ。」

「あと棋盤山上天竺へと登るつもりだからよしておかう。」

と折角であつたが斷つて龍井茗茶の話の方をつゞける。そして自分は、山僧和尚に向ひ語り出した。

「和尚さんこの頂いてゐる茶は大變結構だが、更に今一つ玫瑰花の點じて入れてあるのも一バイ頂かしてもらへないだらうか。」

山僧二つ返事で早速それを持つて來させて熱いところを卓上に請する。天下の龍井に來て遠慮は無用である。何事も研究である。經驗であるからよく聞き、よく味ひ、よく語つた。大層よい學問ができたのであつた。龍井の茶の味は禪話と同じくむしろ淡味で濃くなくて芳香が高い。そしてその出た色の趣が何とも云へぬよい。これは龍井の水の清いのが最大原因であつたであらう。杭州城内あたりの濁水を汲んだ茶の味とはその選を異にするのである。

龍井寺の和尚の好意に甘へ色々勝手な願を云つてゐたがこゝ丈の山寺訪問でもないわけであるから、いざさらばと自分共募化の小函に賽錢を喜捨し、和尚に寸志を残しおきて木魚のそばを通り本堂を出て假普請最中なる庫裡を左に見て山門を辭し去つたのである。

三、棋盤山上錢塘江の展望

龍井禪寺の山門を出てから山道を北にとり棋盤山の高峰を嶺づたひに登る南高峰、二龍頭、玉皇峰の諸峰を越えて見ゆる限り遙か向かうを眺むる。大平野の間を蜿蜒長蛇の如く曲りくねり流れ來たれる錢塘江の上流は水面に日光を受けてさも金蛇の如く輝き錢塘對岸の蕭山、紹興の平野は東の方どこまでも開展しつゞき大陸の地平線は長く一眸のうちに納められる。僅か三百メートルかの棋盤峰、浙東浙西の展望には恰好の山嶺である。近くは脚下に上龍井、下龍井の茶園の大盆地を俯瞰し得べく續いて九澤十八洞、すべてこれ茶園の延長にして插鉢の底の如く深し各層細かく雛壇式に整然と茶畑の畔が作られてゐる。龍泓亭、城隍廟、農家の村などそのうちに散點しいかにも繪の如くに美しく見える。かやうなわけで龍井茶園の全體はその規模が頗る廣く溪谷より山嶺まで山腹の全部を之が栽培に充てゝゐる。流石は天下の茶園として恥ぢない光景であると云ふことが出来るであらう。棋盤山嶺を登りつめて見るとこゝには平瓦の製造工場がある。薄く圓筒型にねり作つたものを縦に四分してわけなく出來るところなど見た。西人の別墅がすぐそのわきにある。實に見晴らしのよい處へいつも別莊を持つてゐる西人の心と氣宇の大なるにはわ

れ乍ら少なからず敬服させられるのである。

棋盤山には又吾人の最も風流心を唆るものとして之が各處に文人的の奇巖怪石の群がり存してゐるのを見る。其石質は多く石灰岩にして中には雨滴の爲めに大小各様の孔があいてゐて、夏雲の奇峰の如き形せるものあり懸崖に面白き奇拔な壁面を有し長さ數町に及べる所がある。而かしてこれらの奇嶂怪巖には悉く細かい竹叢が排在されてゐる。時には岩の孔から五六の竹幹の挺挺天に沖して伸び茂つてゐるものがある。文人畫に見る竹石の題材そつくりである。高士竹石に淫する畫中の人となりすましてもよろしい位の氣持ちがした。日本の南畫家にして竹石の氣韻を描出せんとするにはこの山にこもりて寫生の稽古をするのが捷徑であると考へたのであつた。そこで序に自分共もよい記念にと一株の小竹を根こそぎに引ぬいて杭州城内に持歸り馬市街に今も鉢植にして残してあるのであるが、その後之に小枝が殖えて來たやうである。

この附近の高峰には西に鷹嘴、白雲、東に南亭、北に天馬とどちらにも皆相當の山があつて、何れも大空に雄姿を聳やかせてゐるが一々これを攀登することも出來ないのでこの棋盤山を以つてこれらの秀峰の一例と見て之により心に足るほど之を味ひ、一孔一石無意味に看過せずは出來ずその鄭板橋の竹石そつくりなるものに會へば特に之が爲に石の一角を撫して低徊去るに忍びな

かつたものがあつた位である。又天然の形で時には凹くなれるものへ夜半の雨を其儘湛へてさながら天成の手洗鉢となれるがありその凹石の竹蔭に半ばかくれたる所など洵に雅趣掬すべきものがあつて嬉しい。世の畫卷、對聯の竹石を描きたるもの氣韻のあるは見あきの來す品よきものであるが自分共のやうに實地此の西湖棋盤山上の竹石を目のあたりに來て見て賞することの出来るものは風竹、月竹、雪竹の畫卷を書齎で眺めくらしてゐる王侯の楽しみよりも遙かにこの方が深く且つ生き生きしてゐるやうな感じがする。この湖は實に龍井に登り龍泓に驚き天下の茶園を賞し今又此が竹石天來の實畫を見る。かくて風流を味ふ材料は此の西湖の裏山に求むればいくらでも求められる。たゞ人は之に足を運ばざるが故に知らないのである。

龍井の觀賞はこれで了へた。それから山越しに靈隱寺飛來峰の方へと出るには三天竺を通過しなくてはならぬ。

三天竺とは下天竺、中天竺、上天竺の三者なること上にも述べた如くであるが普通靈隱、飛來の靈域に足を運ぶもの下天竺まで位はどうか參詣するものもないがそれも甚だ稀である。下天、中天、上天の三者何れかその一つで譚山のやうに考へられるが、その上中下三天竺を窮めなければその全體の規模が判らず殊に三天竺のうちで一等大きく又その進香者の最も多し

て毎年春の御開帳に天下の善男善女幾十萬を引きつけてゐる所の上天竺の實際を見ないやうでは杭州觀光の目的はよほど減じて來ると云つてよろしい。

四、天竺寺の清香氣分

棋盤山はみね傳ひの山路を上天竺へと下り左に鷹嘴岩の谷を見て辿り辿りて下り阪について下る。山の中腹から以下天竺の谷間一帯にかけては見渡す限りの山相が石がなくなつて竹林と一變する。その光景は又韜光庵の竹林以上で實に驚く計りひろい。全山竹林と云ふもの見んとすれば浙江では莫干山のそれが有名である。毎年盛夏西人を引付け吸収してゐる所の國際避暑地莫干山は竹林のみである。それと天竺とはいかにもよく似てゐる。天竺の竹林は自分の見た所その竹が皆大きいたちの竹であつて、孟宗竹が多いやうであつた。竹の枝もよく茂り幹尖も完全に天に沖してゐる。又よく密生してゐてその竹藪と云つたらたいしたものである。竹林の持主は一帯何を示せるものなるか竹林の竹の一本一本に持つて行つて符牒の如き文字を黒ペンキで以つて記してゐる。一々手で目どほりの處へ書き入れてゐる。一〓〓×〓上上上〓文十の數字を用る番號を幾萬となく記入せるもある。

竹林の山道を自分共、天竺さして下る。

「上天竺はたしか、此の下の方に當たる筈だ。」

「今少しく下つたらお寺の屋根が竹林の間から見えるであらう。」

など語りあひつゝどこ迄も下る。やがて來た。上天竺の山門前に來た。例によつて參詣者に賣り付けるお守札や珠數、線香の類、白檀の類殆んど家並みに賣り叫んでゐる。

寺は雍正年間の重建。乾隆帝の勅額「法喜寺」の三文字を掲げてゐる。五代宋元明清と世々名僧の住持の居た寺である丈に境内もひろく立派な寺である。よく山中の寺にありがちの祈雨の御靈場としても古來信仰が厚かつた寺のやうにも聞いてゐる。その年々參詣者の江南各地より集まり來たる數は天童育王のそれを凌ぎ春の時候のよい頃には青の頭陀袋を胸に提げ揃ひの姿した信者の引きも切らずその數何十萬と算せられてゐる。

自分共もその信仰の一人として山門前に眞鍮のお守り「魔よけ、香檀、香高き珠數など求める。山門を入り、禮拜を了へ善男善女と堂廻りする。紅蠟、香煙もかなり盛である。山僧は佛前に供せられたる大の紅蠟の未だその半分も點じ減つてゐないのを取り代へ引つ替へ頻りと差し替へしてゐるのを見る。自南翁に向ひ自分は、

「あれほどの參詣人ならたいしたものだ。」

「蠟燭立てのあの長い臺が幾臺あつても足りない位だらう。」

と云つたところが、自南翁はその路はくはしいもので、

「なあに、なまぐさですよ。折角善男善女の立て、行つた紅蠟をばその人が歸つたと見たらすぐ消して、へらないうちに抜き取つて溜めて居るのですから。」

「そして纏めてからかけ目で以つて製造元と金と交換をして平氣で居る位です。抜かるもんですか。」

とすつかり赤裸々のところを素破ぬいた話であつた。實際云はれて見ると思ひ當たるふしもある。或はさうかも知れぬ自分はまさかとは思つてゐなかつたが寺の事であるから、

「今に始まつた事でもあるまい。」

「坊さんたちは却つて商賣人以上のことをする。」

などを撥合はした話を細聲でして居たのは少々濟まなかつた。支那各地の寺をたくさん行つて見れば、自ら、

「支那の寺ぢやもの。」

「人寄せに成功するのも一筋縄では行けないものであらう。」
 などぶち割つた考も出て來るのである。

かうした話を交へつゝ山門内がひと通り済む。するとそとに出で少し離れたしもの方の山郷のめしやの店に入る。葦素包辨で手輕の晝食の出來るところである。奥に入ると中二階のやうになつてよい大きな室がある。われ／＼老酒をとり又鶏絲麵外二三點に饅頭の暖かいとこなどつてゐた。轎夫にも奥へ這入れと色々言つたが、どうしても遠慮して這入らぬ。店先きで別にやると云ふ。やがてすると別に天竺寺のよい檀家らしいのが一家族かたまつて來た。すつと這入つて來て自分共のとなりの席についた。色々とうまさうなものを註文してゐる。老母が中心に子供や若い衆もとの話が賑つてゐる。五六人の連れで春の日に天竺のお寺詣りに來た歸りらしい。いかにもよい氣分である。

ふたかたまりわれ／＼のこの奥の室で吃飯をしてゐるのが判つたと見えて山郷の籠屋がすかさず手にウンとかへて色々面白い籠細工を紐につないで持ち込んで來た。中々よく出來た細かい細工である。自分は云つた。

「天竺の名物だけに精巧に出來てゐる。が荷物になるから大きいのは困る小さい方がよい。十二

三ももらつておかうか。」

「竹の名所でこの籠細工はよい天竺記念になる。」

すると、子供連れの老人の客も七八つ求めてゐた。大分籠屋はこゝで商ひが出來たわけだがまだどつさり持つてゐたこの天竺の竹は日本にも近來よほど輸入されてゐるさうであるが、實際山あの通り廣い竹林であるから將來無盡である。江蘇、鎮江竹林寺の竹も有名なもので東晋の時代に法安大師の開山せし所と云ふ。例の竹林の七賢の遊んだ所であるが、これも大したものである。總體峽間の竹林は清雅愛すべく風流韻士の最も好む所のものであるがこの天竺が千古の竹林を背景として山門を建てゝゐることは甚だふさはしく感ぜられたのである。

天竺山門前の町は京都本願寺前の珠數屋町の如くどの家も線香、キヤラ、白檀、紅蠟、珠數など參詣人に向くものを鬻けるうちばかりである。年々江南各地からのお参りに來る者を當て込んだ香料老舗の町つゞきであるから山郷とは云へ街に一種の香のほひが濛ひ行人は爲めに何となく天竺の御利益を唆らるゝやうな氣分になるのである。

上天竺に參詣した目で山道を下り豫定の中天竺、下天竺に來て見ると大體寺の様式は上天竺に似て壁にそれ／＼大書せられた中天竺、下天竺の文字も白く鮮やかに讀まれる一々山門を這入つ

て禮拜をして、飛來峰の右手の谷を靈隱寺へとつて下山する。

「靈隱寺の山門に來た。參詣しますか」

「いつも度々參つて居るから今日はこゝで精神的の禮拜をしておけばよからう」

など勝手な要領のよい事を山門の前で語り合ひつゝ、新道の自動車路を岳王廟前へとてくる。天曹廟、白樂橋、石運亭の前を通り過ぎて屏風山を右に九軍松を左に見て路を左にとりつゝ、進めば清漣寺の玉泉觀魚の名所へ行く岐路に近來立派に塗り立てられた樓門が行人の目を喜ばせてゐる。玉泉山行きは左右葦原雜木林の間を行くので風流ではあるが路面の割り栗石には痔病のある人どもも小心ならざるを得ぬであらう。又婦人どもは流産の恐れがないでもない。この邊の細かい注意は清漣寺の大和尚にも通じておきたいと思ふ。併しその寺内に有名な玉泉魚躍の目のさめるやうな五色の大鯉が清水の中に游泳してゐる清雅の眺めは如何に路になやまされても行つて見る價值がある。その西湖十八景の一つに數へられ董其昌が『魚樂園』と扁額を書いてゐるのも偶然でない事が判るのである。天竺には游客がなくとも靈隱とこの魚樂園とはいつ行つて見ても游客の絶えてゐることがないのである。夏の玉泉觀魚は殊によろしい。一般の見物には天竺よりも此の鯉である。鯉は玉泉の一大呼物である。

岳王廟まへに來れば廣場の獅子の大彫刻一對いつもの如く嚴として岳廟を護れるもの、如く、老樹の下、小舟をやとつて乗ればいつでも湖上の人となれるのであるからと、大門を這入る。いつも度々見てゐるところではあるが岳飛の土饅頭の墳墓に秦檜の立像など瞥見する。山門を出て拓本屋に鄭板橋朱拓の竹圖など數葉を求めて小舟に入る。終日の登山探勝に少々のががかわき轆夫をして山門前の小店に見えた甘蔗の莖の細かく輪切りにしたのを求めさせる。小舟の行くまゝ、砂糖黍でもかぢり乍らと大童をきめ込んだのである。嚙んでは吐き出すそのたべ方の様子に自南翁も子供の時など思ひ浮べて笑聲頻りに起る。そのうち自分は思はず云つた。

「ウツカリして齒を使つて居た間にツイ前齒が折れた」

「大事な入れ齒がしてあつたものを大變な事になつた」

「醫者の注意もあつたのをウツカリしてこの通り」

と手のひらに白いのを載せて見せると自南翁又大笑ひ。今更悔いても湖上では仕方がない。かくて暢氣なふたりは湖上の游客として孤山哈同の別荘の白壁の窓の移り行く倒影など左舷に眺め遠く天竺、棋盤、龍井の山々を暮れ行くもやのうちに仰ぎつゝ、櫓の音しづかに湖濱路の碼頭石段の所へ歸りついたのは六點半の頃であつたらう。

揚
州
物
語

一、久しく揚州を想ふ

揚州と云へば南方は江蘇省、美人の本場で蘇州のそれと一二を争つてゐる所である。南北支那を漫遊する者はひとりとして揚州に一遊を試みようと思はない者はない。由來揚州の地は外人のこゝに住める者甚だ少なく、又從來殆んど西洋文明の之を侵した形跡はなく、全く純粹なる支那在來の古風な文化生活其の儘の状態を今尙傳へて居る洵に懐かしい、優美な感じのする古都である。謂はゞ支那十八省中のパラダイスとでも推稱せらるべき所であつて、支那に遊んだ者は此の揚州に行かなければ支那に遊んだとは言はれないといふ位に吾々仲間にも喧傳されて居る所である。今では鎮江から渡ると對岸に自動車があつてすぐ便利に揚州まで運んで呉れるやうになつたのでやゝ古風の趣を破壊してゐる感じがする。しかしこゝにはなるべく古風の處を紹介したいのである。「腰纏十萬貫」「騎鶴上揚州」といへる風流の語が染出しにして、手拭に筆蹟鮮かに書かれてあるが、此手拭は揚州唯一の邦人、今は山口縣の斐島に起臥し支那生活の延長に浸つてゐるが當時高洲太助翁の許に一遊を試みた風流人でなくては此一筋の手拭は獲られないことになつてゐるのである。とにかくこの都は風流古雅の都に見立てられてゐるのである。岩崎三井は腰に十

萬貫を纏うて居る。けれども未だ曾つて鶴に騎つて揚州に上つたことはあるまい。吾人は腰に十萬貫こそは纏つてゐなければ、けれども船に乗つて揚州に遊んだのである。此點に於て吾人も亦高洲翁から一筋の染出しの手拭を貰ふの光榮を得たのである。實は自分は先年始めて揚州に遊ぶことが出来た。久しい間に廻つて見たいと憶ひを掛けて居つたのであるが、今より十年前我が郷里の先輩拓川加藤恒忠翁と豫てから北京から揚州へと考へてゐた。自分はその時都合が悪く揚州に上ることは出来なかつたが加藤翁は一人で揚州へ行かれた。其時高洲老人のところに加藤翁は色々の物語りに耽つてゐられたその話の中に、自分のことを如何にもそゝつかし屋のかはり者のやうに紹介してあつたので未見の高洲翁に取つては後藤と云ふ男はよほどの頓珍漢な男、頗る付きの珍談屋と云ふ風に見られて居たらしい、併しながら自分の揚州を訪ねて見たいといふ、熱心は年來頗る切であつたのであるから此度は如何にしても一遊を試みたいといふ希望を懐き上海から數度直接間接に其趣きを先方へ傳へて置いたのである。

二、長江夜泊

今から云へば五六年も前になるがその年の八月上海から日清汽船の船で長江を溯り、漢口武昌

の方面に行つた、其の時豫め揚州へは歸りの船で鎮江迄下り、それから乗り替へて揚州に渡る計畫を立て其の事は既に高洲翁へ通じて置いたのみならず、自分でも間違はない日と時間迄チャンと知らせて用意周到にやつた積りであつた。自分の其の時上海から乗つて行つた船は大貞丸と云ふ日清汽船の古船であつた。船長の崎濱惠三君は頗る用意のよい深切なキャプテンであつて自分も安心して船長の事務に差支ない限りデッキに又船長室に種々な談話を交換し、殊の外愉快であつた。其時の乗合ひ客には同文書院の監督文學士の齋藤重保君や中華民國の農牧實業公司總理の何扶桑君一名ホームメル君 Mr. Homer 杯も居てかなり船中の賑かさを持續して長江を上へ上へと遡つて行つたのである。所が南京の少し上流の所、蘆原の汀で十數隻の湖南より出たらしい大の筏の群に出會はした。それ等の筏の群の下り振りのいかにも優長な趣のあるところを長閑に眺めながら我が船は尙ほ上へ上へと遡つて行つたのであつた。然るに減多にないことであるが珍らしくも夕方になつて船の舵に故障が出来して齒車に破損を生じたのである。そこで運轉がピタリ止まつて了つた。船長始め汽罐の方の係の者は徹夜で、修覆に努力して居つたのが氣の毒な位であつた。しかし吾々は思ひ掛けなくもこゝに長江夜泊を経験することが出来た。柄にない詩的な愉快な長江星月夜の氣分を味ふことが出来たのである。機械を修覆する方では氣が氣でなく一生

懸命である。十八時間目にどうやら目出度く機械が動き始めたと思つたら、翌日またやつた。蕪湖安慶を過ぎて九江の上流の所まで進んだとき前夜と同じ所が又破損した。今度は長時間経つても一向に恢復が六ヶしい、そこで再度の停船までをしたのを見てとつて長江を下つて行つた他の汽船など我が大貞丸は坐礁して居るのだらうといふ噂さへ傳へて下つたものと見える。上海を一日遅れて出帆して漢口へ向つた所の瑞陽丸が夜半二時過に我が船のところに来た。丁度同じ會社の船である。そこで此瑞陽丸に曳いてもらつて漢口迄上ることになつた。漢口に上陸しても中日置いて出發する考であるが、それ迄に十分破損の箇所も修繕されて長江を下ることは出来る積りでゐた、處が破損した其の楫棒齒車を漢陽の鐵工場へ修繕にやつて居たのが其鐵工場の機械が又破損して了つたために、其機械を修復した後でなければこちらの船の楫も齒車も修復が出来ないと云つた來た。それで出帆はいつの事やら全く分らぬことになつたといふ甚だ悲觀すべき報告があつたので自分は腰を据ゑて直るまで、其儘船中に寝てしまつた。すると夜半に機械が修復されて戻つて來たものらしく、朝になつて動き始めた。夜の九時に出る船が翌朝九時に漸く漢口の岸壁を離れた。斯様に色々手違ひを生じた爲めに豫定より下りが大分遅れた。そこで蕪湖迄下つた所が例の揚州の高洲翁からの書面が來て居つた。毎日毎日鎮江まで出迎へを出して居

るのに一向貴方の姿が見えない。何時も待ちほけて出迎への者が失望してゐる。一體どうして居るのかといふお叱言らしい書面であつたので自分は非常に恐縮した。併し自分は正確に時間を守る積りであつたけれども右の次第で船が動いてくれぬ。何とも致方がない。しかし船の故障のことなんか夢にも知らない高洲老人の腹の中は無理のないことと思つた。鎮江に船が着くと泰來館から出迎の者が來てゐる實は先刻の船だと思つて出かけて見たら、あれは瑞陽で貴殿の顔は見えなかつた。やつと此船で捉まりました次第でといふ。早速金山寺の下碼頭から渡船に乗つて揚子江を北岸に渡り隋の煬帝の拵へた運河を曳船で引張られて上り揚州へ着くことが出來た。斯様な譯で長江夜泊は思ひも依らぬ夜泊であつた。其爲に揚州へ上る日數は段々と遅れて了つた。久しく思つてゐた揚州がかやうに障りの多いのは何の因果であらうか。

三、揚州公廨

揚州の碼頭に上つて高洲大人からの轎に迎へられて支那式の狭苦しい街、油つ濃い街、臭い街を轎の竿の音に調子を取りつゝ進む。又道往く子供から東洋人々（日本人の意）と目をつけられつゝ高洲翁の邸迄昇がれて行つた。公廨の門前に着くと紅紙に『紫氣東來』筆太々と書かれて